

# 邂逅の森

くかいこうのもり



## 【1】 神殿騎士

触れられると背筋も凍るような冷気が追いかけて来る。

それは一片の光も射さない漆黒の空を、からからと乾いた骨を鳴らし合う音を立てながら、まるで霧でできた蛇のような姿をしていた。

「まだだ……はぁ……はぁ……もっとたくさん、引き寄せないと……」

少女は背の高い草の生い茂った野をただひたすら駆けた。

人目を避けるために羽織った藍色のマントの上で、一本の三つ編みにした白く輝く髪が揺れる。

姿を見られないように街道を避け、なるべく山道を選んできたのだが、森が途切れてしまったため、やむを得ず、強行突破することにしたのだ。

選択の余地はなかった。

この草原をつっきらなければ、『聖なる森』へ入る事ができない。

息を切らせながら顔を上げた少女の目前には暗い陰を落とす森があり、そして目指す三つの山々の姿が雷鳴轟く黒い雲の下に浮かび上がっていた。

カラカラ……。

背後から乾ききった骨がいくつも鳴っている音が聞こえる。逃げまどう少女の、温かな血潮を瞬時に凍らせる快感を得ようと、集まってきた霧の蛇たちが嘲笑っているのだ。

疲労と恐怖で震える足を無我夢中で動かしながら、少女は鮮やかな紅色をした瞳を細めた。本当ならとっくの昔に、この小さな体は疲労のあまり地に倒れ伏している。

けれどどうしても逃げ切らなければならないのだ。

あともう少し。

少女は決して後ろを振り返らなかった。

振り返らずともわかる。

あの霧の蛇たちはもはや津波のように数を増し、背後に迫ってきていることだろう。

そして、彼等の放つ冷たいおぞましい気に触れれば、自分の心臓は速やかに鼓動を止めるのだ。

少女は真直ぐな草が生い茂る草原をついに走り抜けた。

そのまま、鬱蒼と木々が茂る真っ暗な森の中に駆け込む。

けれど少女を追う霧の蛇たちは、その追跡を諦めようとせず、高らかに乾いた声を上げながらその背に迫った。

皮肉なものだ。

少女はふっと唇に笑みを浮かべた。

少女の目は夜の闇を昼間と同じように見る事ができた。

背後から迫る霧の蛇達の主からこの目を与えられたのだ。

それを今は呪うがいい——幽鬼ども。

時は満ちた。

雪のように白い髪を翻し、少女は両足に力を込めて不意に走るのをやめた。

そこは森が開けた場所で、天を仰げば星のない不気味な夜空が見える。

ざざざっ……！

しんしんとした冷気の渦が幼い少女を見る間に取り囲んだ。それは落ち窪んだ暗い眼光の奥で青白い炎を揺らめかせている。

けれど少女は生命なき彼等の姿を見てはいなかった。

瞳を閉じ、全身で彼等の気配を感じながら、小さな体に宿るありったけの力をかき集めていた。

(――消え失せろ！)

少女は紅の両目を見開くと、目前に迫った霧の蛇達に向かって両手を突き出した。

「その息吹もすべてを滅却せよ――『エルディラン』(炎の檻)！」

今にも少女の体を冷気で包み込もうとしていた霧の蛇達は、その小さな手から発せられた炎の渦に反対に包み込まれた。金と緋の輝く炎は業火の檻と化し、霧の蛇達の退路を断つ。苦悶の声すら上げる暇もなく、業火の檻に閉じ込められた霧の蛇たちは、瞬時にその姿を蒸気に変えて消失した。

「ふ……ふふふ……ふっ」

世界が回る。

少女は星一つ見えない暗闇の空を睨み付けた。

背中から地面に倒れたことに気付かないまま。

大地を覆う柔らかな草が、その身体を労るように受け止めてくれた。

霧の蛇達を消滅させた安堵感と、この二日間続いた逃避行の疲れのせい、少女は急速に眠気を感じた。

「……だ。眠っちゃ……」

少女は塞がりかけた目蓋を意志の力で押し上げようとした。

本当はこの眠りに身を任せたい。すべてを忘れて今は眠りたい。だがその眠りを他ならぬ自分が妨げている。

何かがおかしかった。頭の中で鳴り響く警鐘はさらに激しさを増していく。

疲れのせいじゃない。

この眠気は。

少女はいつしか自分の歯がかたかたと音を立てている事に気付いた。

寒いのだ。

さっきから。

頬を撫でる風が。

「……！」

少女は鮮やかな紅の瞳を見開き、冷えきった四肢に力を込めて地を転がった。

身体がまだ動く事に正直驚く。

氷で直に触れられたような冷気が青ざめた少女の頬に当るぎりぎりの所で通りすぎた。

「まだ……いたのか！」

からから。

骨と骨を打ち鳴らす声を上げ、一匹の霧の蛇が、先程まで少女が倒れていた所でゆらゆらと揺れている。まるで嘲笑うかのように。

全部仕留めたつもりだった。

なんとか立ち上がった少女はゆっくりと後ずさった。が、霧の蛇の青白い炎の目は少女を捕らえたままだ。

なんとかして逃げなければ。

焦る気持ちとは裏腹に、疲れきった体はいうことをきかない。

膝をがくがく震えさせながら、少女はひたすら後ずさりを続け、肩甲骨に固いものがぶつかったことに気付かないまま足を動かした。

額から滴り落ちる冷たい汗が気持ち悪い。

少女は再び意識が鈍のを感じた。寄りかかった木に爪を立てながら、なんとかその場に崩れ落ちそうになるのを堪えるが、もう限界かもしれない。

この小さな身体にはもう何度も無理を強いた。

今一度、目の前の幽鬼を消失させる力を搾りだせるかどうか。

「……」

木の幹に背中を預け、呪文を紡ごうと開いた口からは息も洩れない。

もはや暗闇の中で揺れる青白い炎は、少女の眼前にあった。

霧の蛇がその体を横に広げ変化させた。少女の身体を覆い尽くそうとするかのように。少女の視界は白い闇へと変わる。

いや、変わろうとした時、その闇を一筋の光が斬った。

おぞましい絶叫をあげて霧の蛇が辺りに四散する。

木の幹にもたれ、朧げな意識を繋ぎ留めながら少女は見た。

背の高い黒いマントを着た何者かが、白銀の光を宿す剣を手にして目の前に立っているのを。

「大丈夫かい？ お嬢ちゃん」

襟足まで伸びた黒い髪をふわりと揺らし、目の前の男は白い手袋をはめたそれを少女に向かって差し出した。薄暗くて顔は良く見えないが声が若い。

多分、二十過ぎの青年だろうか。

「……お嬢ちゃんって、呼ぶな」

少女はその手を拒むように払いのけようとしたが、すでにその体力は尽きていた。

「おっと。危ない」

前に傾いだ少女の体を、黒髪の青年は剣を持たない方の手で受け止めた。

新雪のような輝きを放つ白い三つ編みの髪が小さな背中で弱々しく揺れる。

「……放せ」

少女の細い手が青年の腕を掴んだ。

口から出た言葉とは裏腹に、少女が弱っているのは誰の目からみても明らかだった。

「まあ少し休みなさい。アレがきたら私が追い払ってやるから」

黒髪の青年は少女に向かって、まるで自分の小さな妹に話し掛けるような優しい口調で言った。

少女は青年の腕を掴む事でようやく立っている状態だった。その時、少女は冷たい金属の感触を頬に感じた。青年の首から何かが下がっている。

「あんた……まさか……」

少女は紅の瞳を見開き、青年の顔を――正確にはその首元から下げられている剣の形をした銀の首飾りを見つめていた。

それは青年が右手に持っている剣を小さくしたような、同じ形のものだった。

「あんた、神殿騎士……」

少女の顔を覗き込む青年は、肯定とも言える穏やかな笑みを浮かべてうなずいた。

同時に少女の四肢から力が抜けた。

青年は意識を失った少女に一瞬憐憫の眼差しを向けると、片手で剣を鞘に収めた。そしてその小さな体を大事そうに抱え上げると、夜の森の中へ歩いていった。



少女は未だ闇の中にいた。

闇の中で細い体を縮こまらせ、ぎゅっと目をつむっていた。

先程から目が痛い。

闇の中にいるはずなのに、まるで太陽を直視しているかのような強烈な灯を感じる。

きっとそのせいだ。

焼いた鉄を両目に当てられ眼球が溶けるような熱さと、針で突かれるようなきりきりとした痛みがするのは。

少女は体を縮こませたまま叫んだ。いや、絶叫した。

「やめろ！ もうやめて！ わたしには明るすぎるんだ！ その光は！」

両手で目を塞ぎながら少女はひたすら叫んだ。

足をばたつかせ、体全体で叫び続けた。

すると、じゅっという音と共に少女の目を苛んでいた強烈な灯が目前から消えた。

「……すまなかった。これでいいか？」

少女は誰かが自分の額にかかった髪に触れるのを感じ、ゆっくりと目を開けた。

そこには先程、霧の蛇を一刀の元に切り捨てた黒髪の騎士が座っていた。白い手袋をはめた右手には、コップらしきものが握られている。どうやらその中身をたき火にぶちまけて火を消したらしい。薪の他に何かを一緒に燃やしていたのか、香草のような、虫が嫌うようなつんとした香りが周囲に漂っている。

青年は少女の側に腰を下ろしたまま、淡々とした口調で話しかけてきた。

「私も夜目はきくが、できたらもっと明るい所で君と話したい。魔物避けの香木は焚かないから、小さなたき火ならしてもいいかい？」

少女はいつしか布団代わりにくるまれていた青年の黒いマントの裾を握りしめうなずいた。滑らかで気持ちいい手触り。そっと目元までマントを引き寄せる。

「火を焚いてみて。眩しかったらすぐに言うから」

「わかった」

青年は一度火を焚いた所とは別の所に乾いた木片を重ね合わせ、懐から火打石を取り出した。

旅慣れているのか、野営はよくするのか。瞬く間にそれは小さな赤い炎を上げるたき火となった。

火をつけ終えた青年は、気遣うように少女の方へ振り返った。

「大丈夫かい？」

「……」

少女は目元まで引き上げていた黒いマントからそっと顔を出した。

「うん……大丈夫」

「そうか。よかった」

青年は目を細め少女に向かって笑ってみせたが、その顔はいくばくか青ざめていた。

「気付くべきだった。お嬢ちゃんの目が『紅い』ってこと」

「こらぁ～！ だ……誰が、お嬢ちゃんだってえ！」

少女はがばとマントを跳ね上げて、その小さな体を起こしていた。

猫のようにつり上がった紅い瞳をららんと光らせて、体中の毛を逆立てて青年を睨み付けている。

「えっ。あ、いや。君はどうみても十三才ぐらいの可愛いお嬢ちゃんじゃないか。男の子じゃないのはわかってる」  
「……」

少女はぐっと紅い唇を噛みしめたまま、青年の顔を睨み付けていた。

確かに自分はそれぐらいの幼い少女の姿をしている。

それは嫌というほど、そして未だに認識したくないほどよくわかっている。

だが少女は別の事に気付いてみるみるその頬を赤くさせた。

身に纏っていた紺色のマントや同じ色のチュニックが何時の間にか脱がされている。

少女は白い袖無しの上着のみを纏った姿で立っていた。

「あっ……勝手に、ぬが……脱がしやがったな！」

けれど青年は涼やかな目元を細め、肩をすくめた。

「それも悪かった。だが、君があまりにも息苦しそうだったんでね。ただそれだけだ」

青年は立ち上がると、少女の足元に落ちていた自分の黒いマントを拾い上げた。そっと少女の体をそれで包み込んでやる。

「座りなさい。今、温かいお茶を作るから」

「……」

青年は湖水のような透き通った青灰色の瞳をしていた。それを覗き込んだせいなのか、少女は自分の中の熱い憤りが鎮まっていくのを感じた。

一見飄々とした外見のくせに、何故か、その言葉には逆らえないものがある。

少女は言われた通り、再び腰を下ろした。

辺りは依然暗い夜の闇に覆われていて、どうやら森の中で野営しているらしい。

「あの」

「よし、できたぞ」

必要最低限、少女から離れた所に作ったたき火で、青年は小さな鉄の鍋に水筒の水を入れて湯を湧かし、何やら淡い花の香りをたてる葉を砕いていた。

「アマランスの葉？ ひょっとして」

青年の黒いマントにくるまったまま、少女は青年から手渡された小さなカップを受け取った。

「ほう、良く知ってるね」

青年は涼やかな目元を細め、感心したようにうなずいた。

少女はそれにむっとしながら茶をすすった。

お世辞にもおいしいとはいえない苦味が口一杯に広がる。

けれど少女はそれが体を温めて、気力を回復させる薬効があるのを知っていた。

「当然。魔法に使う触媒の一つだもの」

「ほう。それは知らなかった」

「知らなかったって……アマランスは『神の山』にしか生えていない稀少植物だ。王都の薬問屋にだって滅多にその葉は入荷しないのに」

少女の紅い瞳が青年の顔を抉るように見る。

「まあ……助けてもらった事には礼をいう。けれど、神殿騎士が、こんな辺鄙な森で何の用だ？」

黒髪の青年は困ったように眉間を寄せた。

「君、黙っていればとても可愛い少女なのに、その口の悪さはいかがなもんかな？」

「うわー！ うわー！ 『可愛い』なんていうなー！ 頼むから！」

少女は白く輝く髪を振り乱して叫んだ。

うっすらと目に涙まで浮かべて。

青年はもっと困ったように唇を歪めた。

「わかったわかった。君は自分を『女の子』としてみたくないんだね？」

少女は頭を抱えながら、激しくぶんぶんとうなずいた。

「そう！ そうなんだ。だからわたしのことは『お嬢ちゃん』じゃなくて、名前で呼んでくれ。頼む。わたしの名はリセルだ」

黒髪の青年は困惑したまま、けれど了解したかのように微笑んだ。

「わかった。リセル。これでいいか？」

「ああ、結構だ」

少女――リセルはほっと安堵の表情を浮かべ、ようやく落ち着いたかのように肩の力を抜いた。

それを半ば残念そうに見つめながら、青年は口を開いた。

「じゃ、私も名乗っておこうか。私は神殿騎士のルヴォーグだ」

「る、るぼーぐ？」

リセルは発音しにくそうに顔を歪めた。

するとルヴォーグはやれやれと肩をすくめながらつぶやいた。

「そう、どうも王都の人間に、南部出身の私の名前は発音が難しいみたいなんだよな。ああ、無理にちゃんと言う必要はない。私の事は皆『ルーグ』と呼ぶから」

「あ、でも」

リセルはルヴォーグの顔を見上げ首を振った。

「いや、そういうわけにはいかない。誰だって自分の名前を間違われたら、嫌な気持ちになる。第一失礼だ」

ルヴォーグは一瞬戸惑ったように瞬きした。が、その顔には微笑が浮かんでいた。

「ありがとう。でも、私としては『ルーグ』と呼んでもらう方がいいんだ。君が魔法使いならわかるだろう？ 真名は普段使わないほうがいいって事」

リセルは意味ありげにルヴォーグの顔を見上げた。

「……そうだな。神殿騎士は神殿を守るために、時として邪悪なモノ達と戦うことがある。名前を支配されたら相手のなすがまま……だしな」

「そう」

小さく同意したルヴォーグの黒衣の上で、彼の所属を表す銀の剣の首飾りが揺れた。

たき火の光を受けてきらりと輝く。

「ルーグ。あんたは、王都にある『大神殿』直属の神殿騎士だろう」

リセルの視線が注がれている首飾りにルーグも視線を落とした。

「それが、何か？」

小さな含みをもたせた声でルーグが答える。

リセルはいつしか自分の体が震えている事に気付いた。それを抑えるために、お茶の入ったカップをぐっと強く握りしめた。

「……よく、無事だったな。とても、信じられないけど」

ルーグは意味ありげに眉根を寄せ、じっと燃えるたき火の炎を見つめた。

「二日前に王都の『大神殿』で事件が起きたのは知っている。あの神殿が柱を残して天井も壁もすべて崩れ落ちたそうだな。けれど私はちょうど南部の神殿の方へ使いに出ている、あの事件には巻き込まれなかった。ハイ・プリースト（神官長）＝リセル」

リセルは弾かれたように顔を上げ、激しく頭を振った。

「わたしを知っていたのか。でも、その呼称でわたしを呼ぶな。わたしは神官なんてなりたくないんだ。わたしはただのリセルだ！」

「……じゃ、何故君は王都を抜け出し、たった一人で『神の山』に向かっているんだ？ ぶっそんな幽鬼どもに追われながら」

「そ、それは」

ルーグが白い手袋をはめた右手を伸ばし、リセルの青白い頬にそっと触れた。

「何する。急に」

ルーグは黙ったまま顔を近づけ、ひたとリセルの顔を覗き込んだ。

リセルの血のように紅い瞳は、一つの三つ編みにくられた白銀の髪と同じ睫毛で縁取られ、まるで吸い込まれそうに妖しい光を放っている。

魔性のものといっていいだろう。それは。

「何のつもりだ。人の顔をじろじろみて」

リセルはルーグの手を振り払おうとしたが、その青灰色の瞳に見つめられているせいか、何故か身動きできない。

ルーグはリセルの瞳を覗き込みながら、畏怖するかのように密やかに口を開いた。

「紅い瞳と白銀の髪をした『旧き神』を知っているか？ 私は『彼奴』を知っている。その名を言うのは今はやめておこう。何故、太陽神アルヴィーズの命で封じられていた『彼奴』が現世に現れ、王都の『大神殿』を破壊したのかわからないが、君は彼奴に『呪い』を受けたんだろう？ その身に宿る強大な力を封じ込めるために」

「ルーグ……あんたは、どうしてそれを……っ！」

リセルは今度こそルーグの手を振り払い、顔を覆った。

ルーグの言葉のせいか、僅か二日前に起きたおぞましい出来事が脳裏に蘇ってきた。

まるで悪夢でも見ているようだった。

真っ白い大理石の神殿は一瞬で瓦礫の山と化し、その下敷きとなった数多くの神官達の血で地面は真っ赤に彩られた

。

勿論、神殿を警護していた『神殿騎士団』の団員達も巻き込まれ犠牲となった。

リセルは天井が崩れ落ちた祭壇の前で呆然と立ち尽くしていた。

無傷だったのは大神官（アーチビショップ）を務める母リストイスが、自ら持つ力を行使して、祭壇近くにいた王やその側近、そして自分の跡継ぎであるリセルをかりうじて神殿の崩壊から守ったからである。

けれど母の魔法の力はそれで大半が失われた。

十五年の長きに渡って大神官を務めた母の力は枯渇しつつあった。

よって彼女は優れた魔力を持つリセルを自分の後継者として指名し、リセルはその資質を証明するため、国王や他の高位神官たちの前で、実際にエルウエストディアス国の守護神・アルヴィーズを喚び出す『召喚の儀』を神殿で行っていたのだ。

もっとも、リセルがリストイスの後継に選ばれたのは大きな理由がある。

昔は信仰心のみでアルヴィーズ神を呼び出せる者が大神官（アーチビショップ）になったが、長きに渡って続いたその加護は国民の心を慢心へと変えてしまった。

どの国からも侵攻されず、日照りの災害にも遭わず、安穏とした生活が当たり前となった昨今。それをアルヴィーズ神に感謝することを忘れた人々からは信仰心が少しずつ失われていった。

よって、ついに年に一度、国の安寧を願う『降臨祭』の時、アルヴィーズ神は神官達の祈りでは召喚に応えなくなってしまったのだ。

その年は十分な日照を作物が得る事ができず、飢饉が各地で発生した。

翌年も長雨のせいで疫病が流行り同じことが続いた。

それを憂いた国王は、神官たちの力だけでは不十分と思い、名のある魔法使いを片っ端から王都へ連れて来させた。

そして魔法使いに太陽神を召喚させ、国王自らがこれまでの慢心を、感謝の心を忘れたことを懺悔した。

アルヴィーズ神の立腹はそれで一時解けたが、けれどかの神を信仰のみで呼び出せるものは皆無となっていた。

それからである。

魔法使いが大神官に任命されるようになったのは。

条件はただ一つ。

その力でアルヴィーズ神を喚び出せる事。

魔法使いの数は神官のそれよりもずっと少ない。

まして『神』を呼び出せる実力を持つ魔法使いとなれば、さらにその数は限られてくる。

リストイスの類い稀な魔法の才能を受け継ぎ、開花させたリセルが、彼女の後継者となるのは王命でもあった。

「……わたしが、悪かったんだ」

リセルは膝を抱えて肩を丸めた。

「わたしが、『あいつ』を喚んでしまったから」

「リセル」

リセルは再び肩に置かれたルーグの手を振り払った。

顔を上げたりセルの瞳には、一筋の涙が浮かんでいた。

「そう。わたしはアルヴィーズを喚べなかった。代わりに、遙か昔、アルヴィーズ自身が自分の中にある『悪』の心を嫌い、地中深く封じた『半神』を喚んでしまった。エルウエストディアスの民なら子供でも知っている、あの有名な神話に出てくる『半身』だ。神殿はわたしが召喚した『あいつ』のせいで崩れ落ちた。母さんも陛下もご無事かどうか全くわからない。母さんが残る力で、わたしだけを王都の外まで飛ばしてくれたから。だから、わたしは『あいつ』を再び封じ込めなくちゃならない。『あいつ』は自分と同じ呪われし姿を与えることで、神を喚ぶわたしの『力』を封じこめたけど、わたしはそれを解く方法を知っている」

ルーグはリセルの隣に座したまま、幼い少女が体全体で自らの決意を叫ぶのを聞いていた。

「なるほど。『神の山』の神殿に赴き、太陽神アルヴィーズに、『彼奴』にかけられた呪いを解いてもらうんだな」

「ああ」

リセルは迷いのない真直ぐな瞳でルーグを見据えながらうなずいた。

「じゃ、神官を守る『神殿騎士』として、私も僭越ながら同行させてもらおうかな」

「……へっ？」

ルーグは涼やかな目元を細めながら、腰に帯びている銀の剣に手をかけた。

「君は大魔法使いなのかもしれないが、今はただの子供だよ。それに、『彼奴』の呪いのせいで、ほとんど魔法が使えないはずだ。どうやって『彼奴』の下僕たちを退ける」

「いいよ。放っというて。あんたも旅の途中でしょ」

リセルはルーグの黒いマントを頭から被った。

髪を白銀に、瞳を紅に変えられて、本来の姿を歪められた自分は、普段の三割以下の力しか魔法が使えなくなってしまった。けれど全く使えないわけじゃない。

体が小さいことを利用して、普段は何か物陰に隠れて追跡を躲し、どうしても逃げ切れない時だけ魔法を使えばやっていける。実際そうして二日間やってきたのだ。

太陽神アルヴィーズに地上で会える場所は、「神の御座」と呼ばれる山のふもとにある神殿だ。

あと一日あればたどり着ける。

「リセル」

ルーグが呼びかけてきたがリセルは無視した。

うるさい。

こっちは早く寝て体力を回復しなければならないんだ。

なんせあんたみたいな大人の男じゃないから、とにかく体力がないんだ。

「……そうだな。しばらく寝た方がいいな。見張りは私がやるから安心してくれ」

そうですか。それはとってもありがたい。

リセルは両目をつぶった。このまま眠ろうとおもったが、彼のマントを被ったままりセルは小さくつぶやいた。

「ルーグ」

「何だい？」

「助けてくれて……ありがとう」

神殿騎士はふっと笑い声を漏らした。

「おやすみ」

「……」

リセルは返事をしなかった。いやできなかった。忍び寄る睡魔にとうとう捕まって、夢をも見ない眠りに落ちてしまったから。

## 【2】森の番人

「おいこらルーグ！ いつまで眠っている。さっさと出立するぞ」

リセルは眠りこけている黒髪の神殿騎士に向かって呼びかけた。

が、騎士は銀の剣を大事そうに抱いたまま、木の幹に背中を預け眠っている。

『見張りは私がやるから安心してくれ』 頼もしい言葉をいっておいてこのざまか。

リセルはルーグの顔を覗き込んでから、やはり彼がまだ眠っているのを確認して、やおらその向こうずねをブーツのかかとで蹴り飛ばした。

「！」

ぱっとルーグは青灰色の瞳を見開き、信じられないと言う顔でリセルを見つめた。

「なっ、なんていう起こし方をするんだ、君はっ！ 痛いじゃないか」

蹴飛ばされたすねを押さえて、ルーグの目に涙が光る。

けれどリセルはそしらぬ顔でばたばたとチュニクの裾の埃を払い落とした。

心の中で、これは勝手に人の服を脱がした時の礼だつつぶやきながら。

「……ううむ。陽の光が恋しいな。こう暗くてはどうも朝が来たという気がしない」

立ち上がり、四肢を伸ばすルーグのぼやきを聞きながら、リセルは彼にみられないよう小さく溜息をついた。

そう。

この世界は今日を含め、三日、太陽の姿が隠されてしまっている。

王都にいるリセルが喚び出してしまったアルヴィーズの『半神』が、一方的にその力を抑えてしまっているからだ。

『半神』はアルヴィーズの『善』の部分嫌い、その象徴ともいえる陽の光を嫌い、瞬く間に空を暗い雲で覆ってしまった。

けれどリセルにはわかる。

アルヴィーズの力が抑えられているのは一時的なものだということ。

太陽神は完全に不意を突かれたのだ。

リセルが、『アルヴィーズ』ではなく、あの者を喚んだからだ。

地中に封じられていたアルヴィーズ神の『負』の心。

その名を旧き言葉で『ルディオール』という。

氷のような白銀の髪を闇夜に靡かせ、自らそう名乗ったかの神の目は、凍るような紅に染まっていた。

自分の存在を切り捨てた、アルヴィーズに対する憎悪に満ちた忌わしい赤色に――。

「リセル。軽く朝食をとろう」

ルーグが火を起こして、あの苦い茶を作る準備をしている。

「わたしはもう行く。早く神殿にたどり着いて、早く本当の自分の姿に戻らないといけないんだ」

リセルは一瞬だけルーグを見つめ、彼の視線をふりきるように背を向けた。

「あっ、待てリセル」

リセルは夜の闇に包まれた森の中を急ぎ足で歩いた。

昨日ルーグに作ってもらったアマランスの茶のせいだろうか。心なしか足の疲れが取れて軽く感じる。

よく考えてみれば、王都のはずれまで母に飛ばされて、それから『ルディオール』の使い魔達にずっと追いかけられていたのだ。食事らしいものも一切とらず、途中、山の中で見つけた無人の炭焼き小屋の井戸水で喉を一度潤しただけだ。

「食事——か」

リセルはふと思い出したかのように周囲の木々に視線を投げた。

夜の闇に覆われた森の木々はすべてが黒く、何の色彩も目にする事ができない。なにより生物の気配がしない。

ここは太陽神に最も近付ける「神の山」のふもとにある『聖なる森』であるというのに。

アルヴィーズの力が遠い——。

人間に活力と生命力を与えてくれる、あの暖かな日差しが恋しい。

リセルは、再び気力が萎えてくるのを感じた。

『ルディオール』にかけられた呪われし紅き瞳は、夜の闇の中でも真昼のように見通すことができるが、かの瞳の力をもってしても、この森の中には木の実一つ、小動物の姿一つ見つける事ができない。

まるで『死の森』を歩いているみたいだ。

ひょっとしたら、ここを歩いている自分はとっくの昔に死んでいて、森の中を彷徨っているだけじゃないだろうか。

リセルはゆっくりと頭を振った。

先程から足が何かに掴まれているように——重い。

泥沼を歩いているように、徐々にその一步を踏み出すのが困難になっていく。

びしょりと汗に濡れた額を拭い、リセルはふと歩くのを止めた。

いや、ついに動く事ができなくなったのだ。

「ど……うして……？」

リセルは辛うじて動く首を動かし足元を見つめた。

何かが足にからみついている。

茶色い干涸びた蔦のような植物が足元の地面から幾つも生えて、リセルめがけて蔓を伸ばしてくる。

「……！」

それらはあっという間にリセルの体を包み込み、蔦でできた檻となった。

リセルを捕らえた蔦は容赦なくその首や腕にも絡みついた。

息ができない。

リセルはなんとか絡み付く蔦から逃れようと、有効な呪文を脳裏に浮かべようとした。だが蔦の生命力はまるで大地のそれを相手にしているかのように強大で、山を素手で動かそうとするくらいの力の差がある。

『だめだ……わたしじゃ、この蔦を枯せ……ない』

体が浮いているような不安定な感覚を覚えながら、リセルの意識はどんどん濁っていった。

誰かが子守唄を歌っているのが聞こえる。

——眠れ。

呪われし闇の子よ。

我が蔦の揺り籠の中で。

とこしえに。

ここは汝らの領域にあらず。



これは警告だ。

リセルはぎりりと歯を噛みしめた。

迂闊だった。

アルヴィーズの力は今は弱まっているが、決して消えたわけではない。

ここはかの神に、最も近付ける神殿へと通じる『聖なる森』。

リセルは自分が今呪われている身であることを思い出した。

だから森の力がリセルを排除しようとしているのだ。

アルヴィーズの嫌うルディオールの眷属を神殿に近付けないように。

――眠れ。

呪われし闇の子。

『違う』

リセルはあらんかぎりの意志の力を集めて叫んだ。

『通してくれ。わたしは、アルヴィーズに、会わなくちゃ……ならないんだ』

『行かせてくれ』

『頼む！』

その時、頭の中に直接響いていたけだるい子守唄の音が絶えた。

「リセル！ リセル、どこだ？ 返事をしろ！」

若い男の声。

誰かを探している。

――るぼーぐ。

――ルヴォーグ。

『ルーグ』

リセルは無意識の内に唇を動かした。

声は出たかどうかわからない。ただ、その名を呼んだ。

「ここ、だ。ルーグ……」

びっしりと絡み付いた蔦の壁が、不意にぴしぴしと鋭利な音を立てながら崩れ落ちていく。

森の中は相変わらず日の光が射さないが、それに似た銀色の光が確実に蔦の壁を浸食していくのが見える。

その光は、蔦の壁を壊している黒髪の神殿騎士が、右手に振るう銀の剣から発せられていた。

リセルは目を閉じ思わず呻いた。

その光は自分にとっても眼球を焼くように強烈なものだったからだ。

「リセル……！ もう少し我慢しろ」

ばりばりと蔦の壁を剣の柄で突き崩しながら、力強い手がリセルの小さな体をつかみ、引っ張

り出す。

ルーグが胸にリセルの顔を押し付けて抱きかかえた。

直接剣の光をその目に当てないためである。

リセルの瞳はルディオールの呪いのせいで、闇の中しか見通せない。

だからアルヴィーズの祝福を受けている剣の光を見る事は、太陽を直視するのと同じ行為なのだ。

「私はアルヴィーズに仕える神殿騎士ルヴォーグ。この銀の剣がその証。森を通してもらうぞ。番人よ」

ルーグは煌々と輝く銀の剣を松明のように掲げ、隙あらば、その腕に抱きかかえているリセルの体に蔓を伸ばそうとする蔦を牽制しながら歩き出した。

「大丈夫か、リセル」

「……」

リセルは体を縮こませたまま返事をしなかった。

けれどゆっくりと頭を動かした。

ルーグの掲げる剣の光が全身を貫く槍のようで、その痛みに声が出せなかったのである。

「後もう少しで森を抜ける。アルヴィーズの神殿の入口は見えているんだ」

ルーグはリセルを抱いたまま駆け出した。

その後ろからは侵入者を決して聖なる森から出すまいと、再び意志を持った蔦の蔓が幾重も重なり、巨大な手となって追いかけてくる。

だがルーグはそれらに追いつかれることなく、森の外まで疾風のごとく走り抜けた。

賊を取り逃がして悔しがるような、低く、くぐもった唸り声が森から響いた。

「……よし。ここまで離れたら大丈夫だ。ひと休みできそうだ」

ルーグは左手に抱えていたリセルをそっと足元の草むらへ下ろした。

まるで光を拒むように、その小さな両手は目をしっかりと覆っている。

ルーグはまだ淡い光を放つ銀の剣を鞘に戻した。

「気付くべきだったこと、その一。私から離れない方がよかったな、リセル」

「……」

リセルは目を覆っていた手を下ろし、ぶすっとした顔で草むらに座っていた。

「またしても恩を売ったつもりか？」

ルーグはやれやれという風に肩をすくめ、機嫌の悪いリセルの隣に腰を下ろした。

「まさか。私は『神殿騎士』として、当然の使命を果たしたまでのこと」

「……」

リセルは返事をせず膝を抱え、じっと前方を睨み付けていた。

聖なる森に入る前、遙か遠方に感じられた「神の山」が、黒い雲の下、青白く光る雷鳴によって白くくっきりと浮かび上がる様を。

同時にそのふもとで、旧き時代に作られた二本の水晶柱が、天に向かって高くそびえているのを。

そこは太陽神アルヴィーズに最も近付けることができるという神殿の入口を示す。山のふもとまでは一直線に草の生えていない白い道がついていて、三十分とかからずに神殿の門まで歩いていく事ができるだろう。

それを黙って見つめるリセルの横顔は、十を過ぎた幼い少女とは思えない程大人びていて、おいそれと声をかけられない緊張した雰囲気漂っていた。

何かを決意したかのように、リセルは急に立ち上がった。

「ルーグ。もういい」

「えっ？」

ルーグはリセルを見上げた。

「ここからはわたし一人で大丈夫だ」

ルーグは眉をひそめた。漆黒のマントを揺らし、静かに立ち上がる。

「……確かにここはもうアルヴィーズの領域だ。『彼奴』の使い魔も簡単には入ってこれないだろう。だがリセル。神殿には――」

「ルーグ」

リセルがルーグの言葉を遮るように名を呼んだ。

白い手袋をはめた彼の手を小さな両手で握りしめる。

「その代わり、頼みがある。『神殿騎士』であるあんたにしかできないことだ」

リセルの顔は白銀に輝く髪のように色を失っていた。

ルーグは目を細め、自分の手を掴むリセルのそれが震えているのを感じ取った。

「頼み？」

リセルはこっくりとうなずいた。

「そうだ。ルーグ、あんたは王都へ戻って、母さんを……リスティス＝アーチビショップを探し出して欲しい」

ルーグは意外そうに言葉を返した。

「リスティス様を？」

「ああ」

「それは何故？」

リセルはきゅっと唇を噛みしめ、ルーグから手を離れた。

「頼れるのはもう母さんだけしかない。母さんが生きていれば、アルヴィーズを喚んでもらって、あいつを……『ルディオール』を地の闇に戻す事を頼める」

「リセル。それは……それは、『彼奴』を喚び出した君がすべきことだろう！」

ルーグは背を向けたリセルに向かって低い声で呼びかけた。

リセルは振り向かないまま、小さくうなずいた。

「わかってる。わたしだってそのつもりだ。でも……」

小さな両手がぐっと握りしめられる。

「でも、神殿騎士のあんたならわかるだろう？ 今のわたしは、ルディオールの呪いに穢されている。奴の姿そのものだ。そんなわたしが『無事に』アルヴィーズの神殿に入れるとは限らない

。もしもわたしの呪いが解けなかったら、母さんしかアルヴィーズを喚べないんだ。いや、むしろそっちの方が確実かもしれない」

「……」

ルーグは言葉を詰まらせた。

リセルの言う事は正しい。

現に聖なる森の番人は、ルディオールに呪われたリセルを闇の眷属と認識し、彼女を排除しようとした。

ルーグは青灰色の瞳を細め、リセルのうつむいた顔がさらに青ざめていくことに気がついた。何か大きな重圧に耐えているかのように、両手で自らの腕を抱き締めている。

神殿に近付いたせいか、アルヴィーズに護られているような、胸の奥から勇気が湧いて活気に溢れるルーグとは対照的だった。

「……では尚の事、私が同行するべきだろう。君を護るために」

「ルーグ！」

三つ編みを舞わせながらリセルが猛然と振り返った。

紅の瞳が怒りの光に満ちている。

「その必要はないと言っている！ あんたが神殿まで来たってすることは何もない」

「でも、折角ここまで来たんだから、追い払わなくてもいいじゃないか。ねえ？」

ルーグは鼻歌を歌いながら、雷鳴の光に青白く輝く二本の水晶柱に向かって歩き出した。

「ちょっと、おい！ ルーグ。何、先に行こうとする……」

リセルはよろめきながらその後を追った。

が、慌てて駆け出したのがまずかったのか、リセルのつま先は草むらに隠れていた小石に当たった。

「――！」

黒髪の神殿騎士は不意に足を止め、振り返りざまに右手を伸ばした。

小石に足をとられふらついたリセルの肩を片手で支える。

はっとリセルが顔を上げた。

ルーグの瞳は笑ってはいなかった。

「じゃあこうしようじゃないか。強情な魔法使いどの。君がアルヴィーズの神殿に入れなかった時は、共に王都へ戻り、リスティス様を探そう」

ルーグに体を支えてもらいながら、リセルはじっとその瞳を見つめていた。

「……なぜわたしのためにそこまでする」

ルーグは唇に淡い笑みを浮かべた。

「私は馬鹿がつくほどのお人好しでね～。こんな小さな子がひとりで健気にがんばっている姿をみると、涙腺がゆるんでゆるんでそりゃーもう大変なんだ」

リセルは顔を引きつらせて溜息をついた。

涙腺はどうかかわからないが、ルーグが心配してくれている気持ちは理解できる。

「本当にどうしようもない馬鹿だな。でも……ありがとう」

ルーグはリセルの肩を黙って叩いた。

「じゃ、行こうか。アルヴィーズの元へ」

「ああ」

### 【3】太陽神の神殿

どれくらい前からここにあるのだろう。

それは鋭利な白い岩肌に、ぼっかりと口を開いた洞穴の前にそびえ立っていた。恐らくルーグのような大人の男を三人横一列に並べたぐらいの幅がある、とても巨大な水晶柱だ。その表面には隙間なくびっしりと幾何学的な文様が彫り込まれていて、上空で稲光が閃く度に青白い光を放っている。

神の山にはずっと黒い暗雲がたれ込めていて、何度も雷鳴が轟いていた。

まるでアルヴィーズが怒っているかのように。

いや、太陽神は実際怒っているのかもしれない。

地中深く封じ込めた自らの『半神』を、こともあろうに喚び出してしまったのだから。

リセルは前を歩くルーグの後ろで自嘲げみに唇を歪ませながら、紅に染められた瞳を細めた。

この柱に近付くにつれて、頭が鉄の輪で締め付けられるようにきりきり痛んだ。

ぐっと肩を押さえつけられているような重圧感もある。

耳元でぐわーんと反響し続ける鐘の音がずっと鳴り響いていた。

『それでもわたしは先に進む』

そういう強い意志を持ち続けなければ、すぐにでも気力が萎えて足が竦み、身動きすらできなくなりそうだ。

水晶柱は古の神殿を邪悪な魂を持つ者達から護るために、古代の人間が作った巨大な結界であった。

「リセル。君は『神の山』の神殿に来た事があるかい？」

ルーグが鼻歌でも歌い出しそうな陽気さで振り返った。その動きに合わせて肩まで伸びた黒髪が風をはらんで揺れた。

彼の気分が高揚しているのは、ここがアルヴィーズ神の領域だからだ。

神殿を護る『神殿騎士』は、アルヴィーズに祝福された銀の剣を帯び、かの神の加護を得ている。

水晶柱に近付くにつれて気力が挫けるリセルとは正反対に、ルーグは体全体から生気に満ち溢れていた。

「来た事は……ない。「神の山」は、普段は入山が禁じられている聖域だ……」

重い口を開きながら、リセルは気力と共に一步を踏み出す。

顔をあげるといつしかルーグが立ち止まって、リセルが追いついてくるのを待っていた。

「疲れたんじゃないのか？ おぶってやろうか？」

「……不要だ」

リセルは立ち止まったルーグの隣を追い抜いて歩き続けた。

(馬鹿者。ここで休んだら、わたしは二度と立てなくなる)

リセルはあと数十歩という距離まで近付いた水晶柱を睨み付けた。

耳元で鳴り響く鐘の音は一層かん高く音量を上げ、それに古代人の呪いのようなもごもごとした詩が加わって、今にも発狂しそうになる心境だが、所詮あの水晶柱は限りある力を持つ人間が作った魔導器(まどうぎ)である。

(だから、わたしは、あの間を通ることができる)

額から流れ落ちた冷たい汗を拳で拭い、リセルは水晶柱の間を抜けることだけを考えた。

(先へ進む。その強い意志を持ち続ける限り、機械ごときの力でわたしを止める事はできない)

リセルの足は確実に水晶柱との距離を詰め、ついに間を通り抜けた。

ふっと肩を押さえ付けていた重圧が抜けた。リセルは思わずその場に座り込んだ。

息が乱れる。水晶柱の結界は無事に抜けたが、新たな圧力感が前方の洞穴から感じる。何かに見張られているような鋭い気配。

「リセル。大丈夫か？」

ルーグが黒いマントを翻しながらリセルの隣に駆け付けた。リセルは差し出されたルーグの手をつかみ立ち上がった。

「顔が真っ青だ」

「流石に少し……疲れただけ」

リセルはルーグの手を解き、前方に口を開く洞穴を凝視した。

人工的にアーチ状にくり抜かれた白い洞穴の前で、いつのまにやってきたのだろう。一人の女性が立っていた。 肩

まで切り揃えられた金色の髪は淡く、リセルを見つめる青い瞳は久しく見ていない透き通った空のよう。

華美な緋衣を纏う王都の神官とは違って、彼女は袖の長い清楚な白い法衣を纏い、額には青玉（サファイア）の丸玉をはめた小さな額環（サークレット）をつけている。

年の頃は二十を過ぎたぐらいの若い女性だ。

恐らく「神の山」の神殿でアルヴィーズに仕える巫女だろう。

「小さな子供なのに、その精神力は巨人のよう。結界を抜けたあなたの力は認めるけれど、その姿でアルヴィーズの神殿に入る事は叶いません。さあ、ここから立ち去るのです。命が惜しければ」

リセルを見下ろしながら巫女は冷たく警告した。

「それはわかっています。でも、わたしはどうしてもアルヴィーズに会わなくてはならない」

「……アルヴィーズ神に？ あなたが？」

巫女は驚いたように目を見開き、まじまじとリセルの顔を見つめた。

「あなたはひょっとして、「神の山」の神殿の巫女どのか？」

リセルの隣にルーグが並んだ。

巫女はルーグの姿をみて小さくうなずいた。

「ええ。王命によりここの管理を任されております。巫女のアルディシスと申します。あなたは神殿騎士……？」

ルーグはうなずき、腰に帯びていた銀の剣を巫女に見せた。

「私は神殿騎士のルーグ。そしてこちらの少女はリセル。訳あって『ルディオール』に呪いをかけられ、髪は白銀に、瞳は紅に変えられてしまった。私達がここに来たのは、アルヴィーズに会って、リセルにかけられた呪いを解いてもらうためなのです」

巫女――アルディシスは戸惑ったようにリセルとルーグを見つめた。

「確かに――三日前から邪悪な気配を王都の方から感じてはありました。同時にアルヴィーズ神の御力が弱まっていくのも。まさか……まさか、アルヴィーズの半身、『ルディオール』が現世に現れるなんて……！」

アルディシスは動揺しているのか、両手を白い頬に添え目を伏せた。

「わたしのせいなんだ」

リセルは自分にいきかせるようにつぶやいた。

「えっ？」

アルディシスがおずおずと顔を上げる。

「だから、わたしがルディオールを封じるために、あいつに歪められた姿を元に戻さなくちゃならない。そのためにわたしはここに来た」

リセルはアルディシスの脇をすりぬけ駆け出した。

皮肉にも小さな身体の子供であることが幸いした。

リセルの姿はあっという間に洞穴の薄闇の中に消えた。

「あっ！ 駄目です！ 神殿に入っては」

不意を突かれたアルディシスが半ば悲鳴じみた声を上げた。

金色の髪を乱して振り返りながらリセルの後を追おうとしたとき、その細い腕をルーグが掴んだ。

「なっ、何をしますのです！ 早くあの子を止めなくては！」

「その必要はない」

ルーグの声は落ち着いていた。

驚く程落ち着いていた。

飄々とした青灰色の瞳にも動揺の影は微塵も表れてはいない。

アルディシスはそれを無知からくるものだと察して叫んだ。

「神殿騎士のあなたは知らないかもしれないけれど、善と悪。これらは光と闇と同じくして相反し、決して互いを制することができない絶対的な存在なのです。ですから、アルヴィーズ神が降臨されるこの「神の山」の神殿には、古の契約により邪悪な意志を持つ者は入ることができません。私達が地の闇の領域に入れないように。無理矢理入ろうとすれば……」

はっとアルディシスは顔色を変えた。

洞穴の奥の方からくぐもった子供の悲鳴が聞こえたのだ。

「ほら……！ 私の言った通りじゃないですか！ だからあの子は神殿には入れないと言ったのです。ルディオールの方に満ちたあの子供は、アルヴィーズに拒まれたのです。きっと死んでいるわ」

アルディシスは法衣の裾をひらめかせて洞穴の奥へと走り出した。

「……」

ルーグは黙ったまま薄暗い洞穴の奥を見つめ、やがてゆっくりと中に入った。



神殿へと続く洞窟はぼんやりとした薄明かりに包まれていた。

岩肌は滑らかでほのかに白い。それらの石が微光を放っているせいで、周囲は薄ら明るいのだろう。

ルーグは長靴の音を響かせながら、相変わらず落ち着いた足取りで洞窟を歩いた。それはさほど長い距離ではなく、洞窟は急に目の前が開けた所へと出た。

そこには巨大な地底湖が広がっていて、目のさめるような美しい青色の透き通った水で満たされている。地底湖は浅いのか、ルーグは白い法衣を纏ったアルディシスが対岸に向かって走って行くのを見た。

アルディシスは湖を渡り終え、その岩壁を削って作られた「神殿」の階段を駆け上がっていく。神殿は円柱の回廊がずらりと並んだ大きなものであり、それが天井近くまで何層にも渡って建てられていた。

その規模からして、おそらく「神の山」内部全体が、アルヴィーズの神殿となっているのだ。

ルーグも湖に向かって歩き出した。水はくるぶしまで届くかどうかというくらい非常に浅い。けれど水は恐ろしい程澄み渡り、疲れ切った心が癒されるような清浄な気に満ちている。

湖を渡り終えると、目の前には五十段ぐらいの幅の広い階段があった。これも岩壁を削って作られたものだろう。

「……」

ルーグは階段の上を見上げた。

アルディシスが階段の一番上の所に膝をついて座り込んでいる。

ルーグは黙ったまま階段を昇った。

その足音を聞き付けてアルディシスが俯いていた顔を上げる。

ルーグが階段を昇ってくるのを険しい表情で見つめ、彼女は大きく頭を振って溜息を漏らした。

「やはり駄目でした。可哀想に。無理矢理神殿に入らなければ、命まで失わずに済んだものを」

「……」

ルーグは視線を下に落とし、アルディシスが床に倒れているリセルの髪をそっと撫でるのを見た。

リセルは階段を昇りきり、神殿内部に入る入口の手前で倒れていた。

まるで救いの手を求めるように、右手を前方に伸ばしていた。けれどその顔に苦悶の表情はない。ただ眠っているだけのように見えるほどの穏やかさだ。

「そんなことはない。神々はまだ、この子を死なせることなどできはしない」

ルーグは膝をついてリセルの顔を覗き込んだ。

だが傍らに座っていたアルディシスは言葉静かに否定した。

「いいえ、もう死んでいます。この子の頬は彫像のように冷たくなっている。唇も真っ青」

ルーグは右手の手袋を外すため、指先の部分を口でくわえて手をひっぱった。

外した手袋を床に落とし、そっとリセルの細い首筋を探る。

アルディシスの言う通り、リセルの身体は氷のように冷えきっていた。

だがルーグは瞳を閉じ、指先に全神経を集中させた。

「……」

弱いながらも、ルーグの指先はリセルの命の鼓動を感じ取った。

それが途切れる事なく続くことを確認し、ルーグは思い出したかのように息を吐いた。

「大丈夫。彼女は生きている」

「えっ、それは、本当ですか！」

信じられないといった声色と表情でアルディシスがルーグを見つめる。

「ああ。とても弱いが脈はある。どこか、彼女を休ませる部屋はないか？」

ルーグはリセルの身体を抱き上げた。けれど意識のないその四肢はまるで人形のように強ばっている。

アルディシスは動転する気をなんとか抑えようと、深呼吸を繰り返した。

「神殿の中に……来客用の小部屋がありますが……その……どうして？ どうしてルディオールの力に染まったこの子供を、アルヴィーズは生かしたのですか？」

ルーグはリセルを抱えたまま、鋭い青灰色の瞳を細めてつぶやいた。

「ルディオールはリセルの姿を歪め、神をも喚ぶ力を封じ込めたが、その魂まで闇に染める事ができなかった。そういうことだ」

「……」

「さて、巫女どの。部屋へ案内して頂けないだろうか。元々強行軍で来たので、彼女はとても疲れている」

アルディシスはいそいそと神殿の入口へと歩き出した。

「あ、はい。ではこちらへ……」

「すまない」

ルーグはアルディシスの先導でアルヴィーズの神殿内部へと入って行った。

#### 【4】夜明け

ある日、わたしは王都の大神殿にいる母に呼ばれた。

『あなたが私の後を継いで欲しいの』と。

この国には魔法を使える人間の数がとても減ってしまい、まして、神を喚び出す事ができる者となれば、それこそ殆ど皆無なのだそうだ。

わたしは一度だけアルヴィーズ神を喚び出したことがあるらしい。

とても幼かった頃で、わたし自身はどうやって神を喚び出したのか覚えていない。

けれど成長するにつれて、わたしの内に秘める力は大きくなった。

魔法使いであった母の血のせいなのかもしれない。

だからわたしは五才の頃、自分の力を制御することを学ぶため、母の師匠の庵へ修行に出された。

母の師匠でもあるエンジェステッド老の庵は、王都から離れた南の辺境の森にあり、わたしはそこで学びながら、魔法が見せてくれる非日常の世界、古代人の残した遺跡や言葉を探究する日々ですっかり魅了されていった。

けれどわたしの修行は、王都からの使者が来た時に終わりを告げた。

森の木々が赤や黄色と色付き始めた去年の秋のことだった。

王命だかなんだか知らないが、わたしを王都へ呼び寄せた母は、三十八才と言う年の割に随分と老け込んでしまっていた。

日の光を受けて輝いていた金の髪は光沢を失い、気品溢れる緑の瞳は眼力がなく、何よりも母は疲れ切っていた。

年に一度とはいえ、神を喚び出す行為は魔法使いの身体に大きな負担をかけてしまう。召喚の儀は、魔法使いの生命力と力を削る行為と言ってもいい。

母は十五年という長い間、大神官の役目として、この国——エルウエストディアスの守護神アルヴィーズを喚び出して安寧を願い続けてきた。

その結果、エルウエストディアスには豊穡と繁栄が約束されて、西の大陸の中で最大の国家となった。

『ごめんね、リセル。私の力は消えようとしている。この国の安寧を願うために、あなたが私の後を継いで欲しいの』

わたしは正直、自分の持つ大きな力を持て余していた。

エンジェステッド老の指導のお陰で、それを制御する術は身につけてはいたが、それを心置きなく使う事ができればどんなにいいかとも思っていた。

だからわたしは母に言われるまま、そして国王陛下自らの要請もあって、王都の神殿へ次期大神官候補としてやってきた。

けれど——大神殿の神官達は、さぞわたしのことを滑稽に思っただろう。

『神を喚び出す事ができる』

ただその目的のためだけに、大神官である母の次席の位——神官長（ハイ・プリースト）に就

いた子供のことを。



「……」

誰かに呼ばれた気がして、リセルは目を開けた。

けれど周囲は白みがかった薄闇に覆われていて、ここがどこだかわからない。

「確か、わたしは神殿の中に入ろうとして……」

リセルは横向きに倒れていた身体を起こそうと腕に力を込めた。

が、全身が麻痺したように動く事ができない。

「ちょっと待て。どういうこと？」

それよりも、ここは何処だ？

リセルは焦りながらも、ゆっくりと目の前を流れていく白い薄霧を睨み付けて、自分の置かれている状況を把握しようとした。

確か自分は「神の山」の神殿にたどり着き、その中に入ろうとした。

神殿を管理している金髪の巫女に警告された通り、ルディオールの呪いを受けた身で、すんなり中に入れるとは思ってはいなかったが。

リセルはその瞬間を思い出し息を詰めた。

頭上で轟いた幾千の轟音と青白い稲妻は、鉄槌のようにリセルの頭上に降り注いだ。

神に許しと助力を乞う間などない。

その衝撃は今にも身体が引き裂かれてばらばらになってしまうほどだった。

「わたしは――生きているのだろうか」

未だ動かせない身体に、リセルはゆっくりと目を閉じた。

ここが現（うつ）でないのはわかる。

世界は幾つもの空間が複雑に重なりあって存在している。

その空間を自在に行き来できる魔法使いもいるらしいが、リセルはそれを試した事がない。やってみてもいいが、再び自分達の生きる世界に戻れる確証がない。

どのみち、ルディオールの呪いを受け、魔力を封じられている自分に、ここから脱出する術はない。

「……こんなことに、なるなんてな」

目を閉じたままリセルは息を吐いた。

王都の大神殿で、母リスティスの後継者としての証を示すため、アルヴィーズを召喚しようとした『あの日』が遠く感じる。

アルヴィーズではなく、かの神が嫌い疎んだ『ルディオール』を出現させ、大神殿が崩落したのはたった三日前の出来事なのに。

――どうして『彼奴』を喚んだのだ？

「……」

誰かが頭の中に直に響く声で訊ねてくる。

リセルは反対に訊ねた。

「どうして『あいつ』は出て来た？」

リセルに訊ねて来た声は、愉快と不愉快が混じったような声色で笑った。

——そうだな。確かにそれは、妾の慢心のせいかもしれぬ。

あやつは常にこの世に出る隙をうかがっておるから。

きっとそなたの中に眠る旧き血を利用したのだろうな。

リセル。

リセルは閉じていた目を見開いた。

目の前の白い霧が突如吹き出した風により、散り散りになって消えた。

同時に前方からきらりと銀の光がものすごい早さで飛んでくる。

それはみるみる明るさを増し、太陽のように白熱した。

リセルは咄嗟に顔を背け再び強く目蓋を閉じた。ルディオールの闇の目は日の光を直視できない。

目蓋の赤い闇の奥で強烈な輝きを放つものが近付いてくるのがわかる。

耐えられない。この燃えるような光に包まれたら。

考えるより先に答えが脳裏に浮かぶ。

リセルはどうすることもできず、横たわったまま身体を竦ませた。

同時に光の洪水がその身体の上に降り注いできた。

「あ……れ……？」

何も感じない。

予想された熱さも眩しさも痛みも。

「ここは神界と地界の狭間の領域。いわゆる『中立地帯』だ。よって妾の力も『彼奴』の呪も古の契約によって無効になる」

威厳に満ちた声がりセルの頭上から響いた。

けれどどこかで聞いた事があるような、懐かしさも感じる。

「あなたはひょっとして……」

リセルはいつしか目蓋を開き、目の前に立つ金色の光を凝視した。

恐る恐るその名を口に出す。

「太陽神アルヴィーズ」

「そうだ。妾を喚んだのはそなただ」

リセルは驚きに目を見張りながら、光が人の形へと変化していくのを見つめた。

母リスティスの話では、アルヴィーズが人の前に姿を現わす時は女性の姿をとることが多いと聞いていた。

その通り、リセルの前に立つ太陽神は、眩い金色の甲冑と白銀の衣を纏った女性の姿で現れた。

金の麦穂のように輝く長い髪は神々しい光を放ちながら両肩の上にこぼれ、リセルを見下ろす

瞳は真昼の晴れ渡った空の色。神は慈愛に満ちた穏やかな表情をしているが、その下には燃え盛る炎のような激情が隠れている。

だがアルヴィーズはその憤怒の表情を白い顔の面に隠した。

そしてあきれたように肩をすくめ金色の髪を震わせた。

「全くそなたは無茶をする。神官ともあろう者が、『彼奴』の呪いを受けし身で、妾の神殿に入ろうとするなんて。どうなるかは知っていたらどう？ 妾がそなたの魂をここに連れて来なかったら、本当に命を落としていたのだぞ！」

リセルは膝をついたまま太陽神の顔を真っ向から見つめた。

「仕方ありません。わたしにはそうするしか方法がなかったのです。あいつに……『ルディオール』にかけられた呪いから解き放たれるためには、あいつと同等の力をお持ちである、あなたに助けをもうしかなかった。そうでしょう？」

アルヴィーズは柳眉をしかめ、唇を震わせて小さく笑んだ。

「妾の前であやつの『名前』を堂々と口にできるのはそなただけだ。『エレディーンの末裔』よ」

「エレディーン？」

リセルは聞きなれぬ名前に戸惑いアルヴィーズを見返した。

アルヴィーズは黙ったまま真昼の色をした蒼眼を周囲にうつろわせたが、気にするなというように微笑した。

「そなたは己が何者であるのかまだ知らぬのだな。では話さねばなるまい。『ルディオール』が元は妾の『負』の部分であることは知っているな」

「はい」

アルヴィーズはそっと自らの胸に手を当てた。

「妾は彼奴を自らの意志で『切り捨てた』。今から遠い昔、神界は戦で乱れ、その影響でそなた達人間が暮らす地界も天変地異が起き、多くの生きとし生けるもの達が死んだのだ。私は自ら育んできた大地やそなたたち人間をこれ以上失いたくないと思った。そのためには神界の戦を終わらせなくてはならぬ。何事にも迷わず、惑わされない、確固たる強い意志が、妾には必要だったのだ」

アルヴィーズは金の甲冑を震わせ手を胸から下ろした。

「だから妾は自らの弱い心を――そして迷いを生み出す『負』の心を地中深く埋め封じた。迷いのなくなった妾は世界の理を乱す悪神を神界から駆逐したが、『善』と『悪』は世界を構築する元素の一つで、どちらかを滅する事はできない。だから、『切り捨てた』とはいえ、妾の『負』の心は今も『ルディオール』となって生きている。彼奴を滅ぼす事は、すなわち、妾も滅ぶという事と等しい」

「……」

アルヴィーズは厳しい目元をふとゆるめ、跪いたりセルをどこか懐かし気に見つめた。

「だが彼奴が純粋な『悪』であることには変わりはない。かといって、妾は再び彼奴とは一緒になれぬ。我々は元は一つの神格でありながら、全く別のものに成り果ててしまったのだ。妾の『負

』の心は『ルディオール』という神となり、地の底でいつか妾に一矢報いようと機会を淡々と狙っている。そこで私は、一人の信頼できる人間に役割を与えた。妾の『負』の心、あるいは『妾自身』が、世界の均衡を乱す存在となったとき、その力を封じてくれるようにと」

リセルはおずおずと口を開いた。

「アルヴィーズ。それは、御身の護身のためですか」

アルヴィーズは悲し気に瞳を伏せた。

「妾と『ルディオール』、どちらかが消失すれば、残されたもう一方も消滅する。『ルディオール』が世界を壊す存在となったら、妾は潔くこの身に彼奴の刃を受けようぞ。だが、妾達が地界で争えば、そなたたち人間の世界は確実に滅亡する。地は引き裂かれ空は暗雲が広がり、生き物を育む日の光は二度と降り注ぐ事がないだろう。この世は亡者と悪霊の嘆きの声が風のように通り過ぎていくだけだ。妾はそなたの世界をそのようにはしたくない。だから、そなたたち人間が自らの世界を守れるように、私の力の一部をとある者に託した」

アルヴィーズは静かにリセルの所に歩み寄ってきた。

「そしてそなたが当代の『監視者』だ。リセルよ。そなたのみが、現世で『ルディオール』を封じることができる。だから、あやつを喚び出した事は『必然』だったのだ」

リセルはアルヴィーズの深い青色をした瞳を覗き込みながら、心が掻きむしられるように苦しくなるのを感じた。

「わたし、は」

ずっと心の奥底に封じ込めていた『想い』が、アルヴィーズの神々しい光に照らされて胸元までせり上がってくる。

――わたしはただ、あの場から逃げ出したかった。

「くっ……」

リセルはアルヴィーズの視線に耐え切れず、思わず足元に手をついて頭をたれた。

アルヴィーズはそれを黙って見下ろしていた。

「そなたたち人間もまた『善』と『悪』の心を一つの器に持つ者。時には迷い、間違っただ道を選ぶこともある。だが、妾はそなたを責めているのではない。そなたは己の間違いに気づき、それを正そうとしている。自らの命をかけてな。だから、妾はそなたにかけられた『ルディオール』の呪いを解く。そして古の契約に従い、彼奴を再び地の底に封じて欲しい。『監視者』リセル・エレディーン」

「……」

太陽神は身を屈め、そっとリセルの額に唇を寄せた。

「さあ、そなたの魂を地界に戻す時間がきた。そなたが受けた呪いを解く方法を教えるからよく聞くのだ。目が醒めた時の朝、神殿で朝日を一番に浴びる場所へ赴き日の出を待つのだ。苦しいかもしれないが、じっと耐えればいつか終わる。いいな、目が醒めた時の『夜明け』だぞ」

リセルは神々しい大きな力に満ちたアルヴィーズの存在が徐々に消え失せるのを感じた。

「アルヴィーズ！」

不安に駆られて思わずリセルは太陽神の名を呼んだ。

だが周囲は再び白い霧に包まれ、何も見えなくなった。



子供のように子供でない。

不思議な子供。

アルディシスは神殿内の居室で、未だ眠り続けるリセルの顔を見つめていた。

その肌は新雪のような輝きを放つ白銀の髪と同じように色を失い、身体は神殿の壁に彫刻されている神々の像のように冷えきっている。

けれど彼女は眠っているだけだ。

そう、連れの神殿騎士は言った。

あの人も何者なの？

アルディシスは純白の法衣の上に緋色の肩掛けを羽織り、そっと冷たくなった手先を擦りあわせた。

この世界に太陽の光が射さなくなつてはや五日。

山の中に造られた神殿のせいもあって、晩秋のような冷えを感じる。

このまま気温が下がるのなら、山を降りて王都まで戻らなくてはならない。

「うん……」

小さなうめき声が聞こえた。アルディシスは後方の寝台を振り返った。

「あら」

思わず感嘆の声を漏らす。

簡素な木の寝台には、この二日死んだような状態で眠り続けていた子供が身体を起こし、小さな手で眠そうに目蓋をこすっていた。

アルディシスはゆっくりと寝台まで近付いた。

「よかった。目が醒めたのね」

「……」

子供――リセルは、アルディシスに気付いて、ぎょっとしたかのように紅の瞳を見開いた。

「ちょっと今、なんて言った？」

リセルはかん高い声でそう叫ぶと、慌てたように布団を引きはがし、寝台から飛び出した。

「駄目よ、急に起きちゃ！ あなた、ほとんど死人と変わらない状態で眠ってたんだから。また倒れちゃうわよ」

アルディシスは夢中でリセルの小さな身体をつかまえた。リセルはアルディシスが子供の頃着ていた白い法衣を纏っている。寝巻き代わりにちょうどよかったから着替えさせたのだ。

「ねえ、教えて！ この神殿内で一番最初に朝日が射す場所はどこ？」

リセルがアルディシスに向かって叫んだ。

ただ事ではない形相で。

その真剣味を帯びた眼差しにアルディシスは一瞬言葉を失った。

紅に光る少女の目には確かに巨人を思わせる『力』が宿っている。

リセルの目をのぞきこんだアルディシスは思わずその身体から手を離れた。  
「……この部屋を出て、まっすぐ行った突き当たりの階段を一番上まで走れ」  
若い男の声が出入口の扉の前で聞こえた。

黒髪の神殿騎士、ルーグが扉を開けて何時の間にか立っていた。

「あっ！」

リセルは白銀の長い髪を靡かせて、突風のようにアルディシスの前から走り去っていく。  
「ちょ……ちょっと！ 一体なんなの？ あれ！」

アルディシスは扉の前に立つルーグに向かって叫んだ。

ルーグは涼しい顔をしながらも、どこか緊張した面持ちでアルディシスに視線を投げた。  
「感じないか？ アルヴィーズ神の力が徐々に強くなってきた事に？」

「えっ、あっ……それは……」

アルディシスは目を閉じ昂った心を落ち着かせた。

気付かなかった、暖かな気配。

それは今まで毎日感じていた太陽神の力の証。

「朝が、来る」

再び目蓋を開いたアルディシスは、ルーグが同意するようにゆっくりとうなずくのを見た。  
「アルヴィーズもようやく重い腰を上げたようだ。さて、我々も行こう、巫女どの。五日ぶりの『夜明け』を見に。そして、あの子の呪いが解けたら、それを祝ってやろうじゃないか。ねえ？」



これほど必死になって階段を駆け上がったことは生まれて初めてだろう。

リセルは青白い薄闇に覆われた神殿の階段を、ひたすら上を目指し駆け上がっていた。  
『そなたが受けた呪いを解く方法を教えるからよく聞くのだ。目が醒めた時の朝、神殿で朝日を一番に浴びる場所へ赴き日の出を待つのだ』

神殿の壁にくり抜かれた小さな丸い明かりとりの窓から、空が白んでくるのが見える。

夜明けまでになんとしてでも朝日を浴びる事ができる場所に、たどり着かなければならない。

アルヴィーズは『目が醒めた時の朝』と言っていた。

だからこの機会を逃したら次はない。

「神の山」の岩盤を削って造られた階段は螺旋状になっていて、上に上がるにつれて円の外周が小さくなっていく。

「はあ……はあ……くっ！」

リセルは着せられていたアルディシスの法衣の裾をたくしあげ、両手でそれを持った。さっきから裾を踏んで転びそうになるのだ。

こんなに動きにくい服に着替えさせたアルディシスを恨めしく思うが、今はそれどころでは

ない。

「万一間に合わなかったら、許さないけどね……！」

それから五分。

階段を駆け上がったリセルの前には両開きの質素な木の扉があった。

把手を掴み、奥へ押す。

さーっと冷たい風が流れ込んできた。

リセルは思わずその空気を吸い込んだ。早朝の清々しいあの空気だ。

自分の生きる世界に帰ってきたような気がする。

眼下には黒い森の影が広がり、北と西には、白い降雪を戴いた『神の剣』『神の盾』と称される山々が連なっている。

そしてリセルの正面には、徐々に明るさを増していく空があった。

リセルは乱れた息を整えながら、一步、裸足の足を前に踏み出した。

ここは小さなバルコニー状になっていて、三十人ぐらいが入れる程の広さがある。

リセルはバルコニーの一番先端まで歩いていった。

空は刻一刻と明るさを増していき、山にかかった黒い雲を追い払っていく。

濃紺のそれが紫となり、やがて橙へと変わっていく。

リセルはぎゅっと両手を握りしめ、真っ黒な地平線からやがて現れる太陽の姿に畏怖した。

ここまでやってきたものの、すぐさま回れ右をして、入って来た扉の向こう側へ隠れたくなる

。

アルヴィーズと会った時は魂のみの状態だった。

だが今は違う。

果たしてこの呪われし身は焼き尽くされることなく、アルヴィーズの力に耐えることができるのだろうか。

リセルは身体を震わせ、かき集められるだけかき集めた勇気を持って、足に力を込めた。

アルヴィーズは言った。

苦しみはいつか終わる。

それに、いまここで呪いを解かなければ、リセルは二度と日の下を歩く事はできない。ルディオールの呪いはやがてリセルの心まで侵食し、奴の眷属に成り果て、日の当たる世界では暮らせなくなる。

そして今、ルディオールが居る王都はどうなっているのか。

「……くっ」

リセルは真紅の瞳を見開き、地平線から昇る太陽の最初の光の鋭さに思わず顔を背けた。

光を直視したせいだろう。焼けた短剣で眼球を突かれたような痛みが広がる。

顔を手で覆いながら咄嗟に思った。

太陽の光に包まれたら、わたしの身体は焼きつくされて、灰も残らないかもしれない。

皮膚から伝わる太陽の光の熱は暖かさを通り越して、徐々に熱さを増していく。水平線からは五日ぶりに顔を覗かせた太陽が、完全な姿で昇りつつあった。

リセルは我が身を抱えるように肩を抱き、燃え盛る業火の中に放り込まれたような熱を感じていた。それはリセルの皮膚を焼き、肉を焼き、骨まで達するような熱さだった。

自分が生きているのか死んでいるのかもわからない。

ただ、熱い。

焼きつくされる熱しか感じない。空気まで燃えているようだ。

すでに眼球は溶けてなくなっているのではないだろうか。

リセルはどこにも隠れる事ができない強烈な光の中にいた。

終わるのなら早く終わらせて欲しい。この苦しみを――。

真っ白な光の中で、何かが動いた。

誰かがいた。

『ルディオールの呪いは妾が焼き尽くした。よく耐えたな、リセル』

リセルは答える事ができなかった。ただアルヴィーズの言葉にうなづくことしかできなかった。

『これはそなたへの餞別だ』

リセルはアルヴィーズが自ら身体を支えてくれていることに気がついた。

『受け取るのだ。この剣には妾の力の一部がこめられている。これでルディオールを地の底に再び還して欲しい』

リセルは感覚を失った手を上げて、アルヴィーズが手渡した剣を受け取った。ルーグが腰に携えている銀の剣より二倍の長さがある長剣で、それはリセルの手に触れるや否や、吸い込まれるようにその中へ入って消えた。

『アルヴィーズ』

眩しい光の中でアルヴィーズが微笑んだ。

『また会おう。小さな、愛しき者よ』



太陽神の力が本来のそれに戻っていくのがわかる。

ルーグは白の式服の下で鳥肌が立つのを感じていた。

さすが太陽神が直々に降臨するという「神の山」の神殿故か。

ルーグは自分でも驚く程の早さで、リセルが駆け上がった階段を昇っていた。幾分遅れてアルディシスも来ているようだが、今のルーグに彼女を気遣う心の余裕はなかった。

『大丈夫。心配することはない』

心の奥底ではわかっているのだ。

リセルはアルヴィーズの加護を受けていた。

ちらりとしか見えなかったが、彼女が部屋を飛び出した時、額から小さな光が灯っていた。あれはまさにアルヴィーズから祝福を受けた証。

現に彼女はアルヴィーズと会って、ルディオールの呪いを解く約束を交わしたのだ。ここではないどこかで。

とはいえルーグは珍しく息を弾ませながら、神殿の階段を昇りきった。目の前の簡素な木の扉を開くため把手を握る。

そして奥へと押した。

「……」

外は光に満ちていた。

生命を育む大いなる光が世界を照らしていた。

五日間という長い夜が続いたせいで、ルーグの目は暗闇に慣れきっていた。

涙目になりながら目蓋を擦り、ようやく太陽の光に目が馴染んで来た時。

「ルーグ！」

誰かがルーグの名前を呼んだ。

とても親し気に。

ルーグはバルコニーの先に誰かが立っている事に気がついた。

そうだ。リセルは一体どこに……？

だが周囲を見回しても、あの小柄なはねっかえり娘の姿はどこにもない。

「おいルーグ！ わたしはここだ」

ルーグは弾かれたように、前方から駆けてくる人物を見つめた。

「喜んでくれ！ ルディオールの呪いはわたしの身体から消えたぞ！」

それは子供のようにルーグの首筋に抱きついてきた。

「えっ……あっ、その……！ お、お前、リセルか！」

「ルーグ？ あんた、頭でも打ったのか？ 他に誰がここにいるっていうんだい？」

「ちょっとよく顔を見せてくれ」

「はあ……？」

「いいから、早く！」

ルーグはとにかく首筋に抱きついているリセルの腕を振り解いた。

ルディオールの呪いを受けたリセルは、十三才ぐらいの小さな少女で、背丈はルーグの腰までしかなかった。

が、今はルーグの胸の高さの所にリセルの顔がある。

第一印象は、見違えたといつていい。

リセルは新緑のマントに同じ色のチュニックと長靴という出立ちで、まるでしなやかな若木のような姿だった。

三つ編みが解けた長いセピア色の髪が、陽の光を受けて金褐色に輝いている。ルディオールの呪われし紅の瞳は、光の加減で深い青に見えたり淡い水色にも見える神秘的な色へ変貌していた

。

そして何よりも違和感を感じるのはその顔だ。

高尚な猫を思わせる雰囲気は変わらないが、くっきりと伸びた眉に意志の強い目。引き締まった口元——どうみてもこれは『小さな少女』ではない。

どちらかといえば、『少年』という方がしっくりくる……。

「お……お前、ひょっとして？」

ルーグはリセルの頬を思わずぺたぺたと叩いた。

「なにをやる。いきなり人の頬を叩いたりして」

リセルがルーグの手を振り払う。

その腕力は予想していたよりも遥かに強い。

ルーグはふらりとよるめきながら、バルコニーの欄干に手をついた。

がっくりと項垂れ、思わずつぶやく。

「アルヴィーズよ……私は今、目の前の現実を受け入れるべきか迷っています」

「リセルちゃん！ ルーグさん！ 大丈夫ですか？」

その時、ようやく巫女のアルディシスがバルコニーへ姿を現わした。

ルーグと同様に全力で階段を駆け上がってきたのか、切り揃えられた金髪は乱れ大きく息を弾ませている。

「リセル……ちゃん？」

ルーグはちらりと横目でリセルのひきつった顔を見た。

血の気が失せて目がうつろになっている。

ルーグはこれで確信を得た。

受け入れなければならない現実を知った。

「巫女さん！ わたしはあの屈辱的な姿から、やっと元の自分の姿に戻ったんだ！ それなのに酷いじゃないか！ リセル『ちゃん』、だなんて！」

「……あ、あら。まあ！」

アルディシスはおずおずとリセルのそばに近付くと、恐る恐る顔を覗き込んだ。

「びっくり。あなた、男の子だったの！」

リセルは真面目な顔で頷いた。

「そうだ。ルディオールの呪詛はわたしの姿を子供に変えたばかりか、あろうことに性別まで逆転させた。それに気付いた時、わたしは目の前が真っ暗になった。魔法は使えないし、ルディオールの手下は追いかけてくるし。いっそ死んだ方がましだろうか、何度もそれを考えた」

「そうか、それでか」

ルーグは額に手を当てつつリセルの隣に並んだ。

「巫女どの、聞いてくれ。私がりセルを幽鬼から助けた時、彼女……（リセルは無言でルーグの向こうずねを蹴りつけた）……ぐはっ！ い、いや、彼は、自分を『お嬢ちゃん』と呼ぶなって、必死で懇願したんだ」

「当然だ。わたしはお嬢ちゃんじゃない！ 先月十八才になったから、立派な成人だ」

ルーグは怒るリセルの肩を右手で押さえた。

「わかった！ わかったって！ 私が悪かった！ あ、そうだ、リセル！ 元の姿に戻れてよかったな！ 私は涙が滝のように流れ落ちる程うれしいぞ！」

リセルはぎろりとルーグを睨んだ。

「……本当にそれは嬉し涙なのか？」

ルーグは大きく何度も頷いた。

実は向こうずねを蹴られた痛みで涙が出たのだが、それは決して口にはしない。

妙な所で意地を張るルーグだった。

「苦労して一緒にここまで来たんだから、お前が元の姿に戻れて嬉しいにきまってるだろ！ さあ、下に降りて何か食べたらどうだ。ずっと眠りっぱなしだったんだから、ちゃんと食べて力をつけなくては、またルディオールにやられてしまうぞ！」

「お、おい。ルーグ！」

半ばヤケといった口調でルーグはりセルの腕を掴み、階段の方へ歩いていった。

「巫女どの！ 台所を使わせてもらっても構わないだろうか。この『少年』に力のつくものを食べさせてやりたいんだ。勿論、巫女どのも一緒だ」

「あ、はい。どうぞご自由に……」

アルディシスはどういう表情をすればいいかわからない、といった様子でルーグの顔を見つめていた。

「本当に、一体何なのよ。あの人達」

## 【5】護衛の理由

「感心しないな」

「……って、何が」

「何がって、そりゃ、お前の態度かな」

「わたしの？」

リセルは一本の三つ編みに編んだ金褐色に輝くセピアの髪を大きく翻して立ち止まった。

後ろから渋々ついてくるルーグを鋭く睨み付ける。

黒髪の神殿騎士は腕を組み、飄々とした顔を珍しく不機嫌そうに歪めていた。

「まだ正午を少しすぎた頃だ」

「だから？」

リセルに追いついたルーグはちらりとその顔を眺め、何かを憂えるように溜息を吐くと立ち止まった。

「あの巫女さんと一緒に、昼ご飯を食べてから出立したって構わないだろう？ 今までいろいろ世話になったんだし、そんなに急がなくても『彼奴』は現世から消えたりしない」

「ルーグ……」

リセルは軽い目眩を感じながら、がっくりと肩を落とした。

ルーグが不機嫌な理由がそんなことだったとは。

同時にむらむらと腹の底から怒りが込み上げてくる。

リセルは自分より背の高いルーグを対抗するかのよう顔を上げた。

「本当は朝食を食べたらすぐ発つつもりだったのに、あんたが茶を飲む時間が欲しいっていうから、この時間まで待ったことを忘れてないか？ 神殿に残りたければ残ればいい。あんたは神殿の神官を護る『神殿騎士』だ。山の中でひとりっきりでいる美貌の巫女さんが心配ならさっさと戻れ。わたしは元の姿に戻ったし、自分の面倒は自分でみられる。もうあんたの付き添いは必要無い」

リセルはルーグに向かってそう言い放つと再び踵を返し、「神の山」を下る緑深い山道を歩きだした。

『王都に行くのなら、山の裏側を下る北回りの方が近道です。アルヴィーズの御加護をここよりお祈りしてますわ』

別れ際、ひとり「神の山」の神殿を護る巫女――アルディシスの少し寂し気な微笑が思い出された。

彼女と多くを語る時間はリセルにはなかったが、もしも姉がいたらあんな感じなのだろうかとも思った。

確かに、彼女のことが心配なのはわかる。

ルーグは飄々とした外見に似合わず人情家らしいので（あくまでもらしいという想像だが）特

に女性と子供にはつい世話を焼くのだろう。

それなら無理して自分についてくる必要はない。

自分が必要だと思う人間の所へ行けばいい。

(ルーグ。あんたはあれを見ていないから、そんな呑気なことが言えるんだ)

リセルは唇を噛みしめ大股で下草を踏みしめながら歩いた。

緩い傾斜を伴った山道は大人二人が並んで歩ける程の幅で、両側には背の低い灌木が生い茂っている。それらは五日ぶりに昇った太陽の光のせい、葉は瑞々しい生命に満ちた色をしていた。

だが思索に耽るリセルの目にそれらは見えていない。

リセルが見ているのは、脳裏から浮かび上がる暗き記憶。

崩れて廃虚と化した大神殿。

それらの瓦礫に埋もれて、多くの神官達が血を流し息絶えていた。

ほんの少し前まで彼等は、リセルが本当にアルヴィーズ神を喚べるのかと、疑念に満ちたまなざしで見っていたのに。それがこんな結果になるとは。誰も思わなかっただろう。

(わたしだって――思いもしなかった)

ずきん、と胸が疼く。

無我夢中だった。あそこから逃げ出したいくて。

まさか一時の怒りのせいで、あんなことが起きるとは思わなかった。

「おい、リセル！」

その時、リセルの肩を背後から誰かがつかんだ。

「……！」

リセルは弾かれたように無言で振り返った。

まるで幽鬼でも見たかのように蒼白な顔をして、光の加減で淡い水色にも青にも見える瞳を見開き、その唇は今にも呪文を紡ぐための言葉を発しそうだった。

けれどリセルの肩をつかんだのは、白い手袋をはめた大きな手。いかにも剣の扱いに慣れているがっしりとしたルーグの手だった。

リセルは血の気の失せた唇をひきつらせながらつぶやいた。

動揺を自制し震える声でつぶやいた。

「……死にたいのか？ 背後からいきなり肩をつかむなんて。もう少しであんたを消し炭にするところだったんだぞ……」

黒いマントを背に翻し、白い神殿騎士の式服を纏ったルーグは、リセルの肩をつかんだまま微動だにしない。

その口元はやはりまだ不機嫌に結ばれており、鋭利な青灰色の瞳も曇っている。

どうやらさっき言ったことを根にもっているようだ。

リセルはルーグの顔を見つめながら、何故この男は自分につきまとうのだろうかと考えた。

神官を護るのが仕事という『神殿騎士』の役目を忠実に果たしたいのなら、なおのこと、アルディシスの所へ行った方が良くというのに。

何故ならリセルは自分が神官だという認識を持っていない。

アルヴィーズ神を喚ぶためだけに母リスティスの後継者として奉り上げられ、神殿で第二位の地位――ハイ＝プリースト（神官長）を任じられたが、それは名ばかりで建前にすぎないと思っているからだ。

ルーグは腰に帯びている銀の剣を象った小さな首飾りをつけているが、それは王都にある『大神殿』直属の神殿騎士だという証だ。

だから、か？

リセルは瞳を細めた。

ルーグはリセルの名前と素性を知っていた。顔は知らなかったようだが。

彼が自分につきまとうのは、誰かにその護衛を頼まれたからなのだろうか。

「いい加減手を離してくれ、ルーグ。痛い」

呼び止めるためだけにしては、妙に力がこもっている。リセルは左手を上げてルーグの手首を掴んだ。

「……離してもいいが、下、見てみる」

ルーグが意味ありげに呟く。

「は？」

「身体はそのまま」

リセルはいらいらしながら視線を地に向けた。

「……」

ここはまだ下り続ける山道で、右に向かってきつく曲がっている。

リセルが立っているのは急角度に曲がっている所の突端で、足元にはこんもりとした小さな木が一面に葉を茂らせているだけだ。

散々脅かしておいて。ただの葉っぱだけじゃないか。

それに一瞬腹を立てた途端、リセルのブーツの先が小石に当たり、それはからんと下に転がっていった。

「え……」

小石は吸い込まれたかのように葉の間に落ちて見えなくなった。

「ここから先は崖になっている。どうやら死にたいのはお前の方のようだな」

「……」

リセルは黙ったまま足元の緑の葉を見つめていた。

そして、ルーグの手を振り払い、再び道に戻って歩き出した。

「リセル」

ルーグが追いかけてきたのをリセルは鬱陶しげに睨み付けた。

「さっき言ったこと、聞いてなかったのか？ わたしに付き添いは必要無い。王都へ戻ろうと思えば、今すぐ魔法で『翔ぶ』ことだってできるんだ。だから……」

「リセル、悪かった」

ルーグの突然の謝罪にリセルは思わず足を止めた。

「何故謝る」

「謝った方がいいと思ったから、謝ってみた」

リセルは呆れたようにルーグの顔を見上げた。

黒髪の神殿騎士は照れ隠しなのか、上げた右手で頭を掻いた。

「その、上手く言葉にできないんだが……あまり急ぎ過ぎなくてもいいと思うんだ。お前が『彼奴』を喚び出したことに責任を感じているのはわかる。母御リスティス様の安否も確かに気になる。一刻も早く王都の様子を知りたい気持ちも理解できるが、私が一番気にしているのはお前自身のことだ」

「……わたし？」

リセルは意外なものを見るような目でルーグの青灰色の瞳を見つめた。

「わたしの何が気になる？ 心配してくれるのはありがたいが、それは無用だと散々言っただろう？ 呪いも解けたし体調も悪くない。だから反対に、出立を引き延ばそうとするあんたの意図がわからない」

「……」

ルーグは黙っていた。

リセルの心情をその顔から読み取ろうとでもするかのように、じっとこちらを見返している。

やがてルーグは口を開いた。

「リセル。お前は疑問に思ったことはないのか？ 何故、お前が『彼奴』を封じ込めることができるのかと。何故『お前』なのかと。お前は自分が何者か疑問に思ったことはないのか？」

「……それは」

リセルはルーグから視線を逸らし、肩に流れ落ちた三つ編みを右手でつまんだ。関心なさげに口を開く。

「それは、あんたに話さなくてはならないことか？」

ルーグが眉を潜めた。

「いや。そういうわけじゃないが……」

リセルは唇に笑みを浮かべ、頭を振った。

「ならばこちらが反対に訊ねさせてもらうが、ルーグ、あんたこそ一体何者なんだ？ 『大神殿』の神殿騎士は、『大神殿』の警備と神官の警護をするため滅多に王都から出ることはない。特例があるとすれば、地方の神殿に出向する上級神官に付き添う場合だが、ルーグ、森で出会ったあんたにそんな連れはいなかった。あんたは単独で、あんな辺鄙な場所にいた。それは何故だ」

「……」

リセルは黙りこくったルーグを見て、再び腹が立ってくるのを感じた。

言えないということは、何か理由があるのだろう。

ルーグはひよっとしたら敵なのか。

リセルは心の中に浮かんだその疑問を一瞬吟味したが、すぐにそれは違うと却下した。

彼が何かしら邪悪な意識を持っていたら、そもそも「神の山」の神殿に入ることができないからだ。

ルディオールの呪いを受けたリセル自身がそうであったように、水晶柱の結界は強力であったし、万一そこを抜けても神殿が邪悪な意識を持つ者を拒否する。

「そうだな。私自身が自分のことを話さないのに、お前のことを訊ねるのは確かにぶしつけで非礼なことだった。すまない、リセル」

ルーグは眉の緊張を解いて、頭を垂れた。

リセルは唇を噛みしめてそれを凝視した。

「やめてくれ。わたしはそんなつもりで言ったんじゃない。訳ありなら無理に話さなくていい。わたしだって知りたくない。ただ、あんたがあまりにも、見ず知らずの人間に対して親切すぎるから……だから……」

リセルは居心地の悪さを感じてルーグの側を離れた。

これ以上ルーグと会話を続けたくなかった。

彼はリセルが敢えて意識しないようにと努めている部分に触れようとしてくる。

「あんたが王都に帰るのなら、行き先は同じだからついてくればいい」

それだけを簡潔に言って、リセルは山道を再び歩き出した。

「リセル」

ルーグが何かいいたげに名前を呼んだが、リセルは構わず歩き続けた。

『自分が何者であるか疑問に思ったことはないのか？』

そんなこと、疑問に思ったって、現実が変わるわけじゃない。

何故自分が神をも喚ぶ程の力を持っているのか。

この疑問は母リスティスがそうだから、きっとその力を受け継いでしまったせいなんだと割り切ることができた。

ただ気になったことが一つある。

アルヴィーズとの対話で、神がリセルを当代の『監視者』と呼んだことだ。

リスティスは元より、魔法の師匠であるエンジェステッド老からも、『監視者』という存在の話のリセルはきいたことがない。

ましてや自分がそうだななんて。

『そなたたち人間が自らの世界を守れるように、私の力の一部をとある者に託した』『そしてそなたが当代の『監視者』だ。リセルよ。そなたのみが、現世で『ルディオール』を封じることができる。だから、あやつを喚び出した事は『必然』だったのだ』

リセルは歩きながら右手を上げて、掌に浮かぶ小さな痣に視線を落とした。

それは良く見なければわからないほど薄いものだが、大きな円の中にもうひと回り小さな円が描かれた日輪のような形が浮かび上がっている。

ルディオールの呪いが解けてから、正確にはアルヴィーズから自分の力の一部がこもった剣を託されてから、その痣は右の掌に浮かび上がっていた。

『自分が何者であるか疑問に思ったことはないのか？』

再びルーグの言葉が脳裏に反響する。

リセルはそれを打ち消すかのように顔を上げ、唇を噛みしめながら歩みを速めた。



「神の山」の周囲にはそれを護る壁のように、「聖なる森」と呼ばれる木々が取り囲んでいる。リセルとルーグはほとんど会話をすることなく歩き続け、「神の山」を約三時間かけて下った。

その麓の岩の間から流れる冷たい清水で喉を潤して小休憩をとった後、リセルは一人、目の前に広がる「聖なる森」の緑を眺めながら、低い灌木が作る木陰の下で胡座を組んで座った。

ルーグは相変わらずリセルの様子をうかがうように、少し離れた木の下に立っていた。だが立ち去ろうとする気配はない。どうやら彼は今まで通りリセルに同行するつもりらしい。

リセルは小さく溜息をついて、ルーグの方へ振り返った。

「ルーグ」

呼び掛けるとルーグは顔を上げてじっとリセルの方を見た。

「どうした？」

「これから瞑想に入るから、小一時間ほどわたしに声をかけないでくれ」

「瞑想？ こんな時にか？」

意外な答えだったのか、ルーグの顔に驚きが広がっていくのが見えた。

「瞑想といっても、自分と向き合う行為じゃない。ちょっと外の様子を探りにいっただけだ。意識だけを鳥のように飛ばしてね」

「……ほう」

ルーグは腕を組みながら、興味深気にうなずいた。

「だから、わたしが瞑想状態に入ったら、絶対に声をかけるな。身体に触るな。外からの刺激は厳禁なんだ。魂が身体に戻れなくなることもあるし、意識のない私は自分の力を制御することもできない。下手をすれば魔力を暴走させ、ここ一帯を焼け野原にするかもしれないからな」

「……わかった」

本当に理解してくれただろうか。

ルーグの素直にうなづく顔を見ながら、リセルは再び森の方へ向き直った。

ゆっくりと目を閉じる。

瞑想中のリセルは無防備になる。

だからできるだけやりたくないが、『ルディオール』の力がどれほどの範囲まで及んでいるか知っておきたい。

よって瞑想するならここしかない。

邪悪な意識に染まった者は決して入ることができない、「聖なる森」に囲まれたこの場所だけ。

木陰を落とす木の葉が風に揺られてそよそよと語り合っている。

リセルの背丈を優に超える巨石の間から、水晶の玉のように伝い落ちる清水が、琴をつま弾く心地よい音色をたてている。

それらの音を聞きながら、リセルは自分の意識を自然に溶け込ませ、徐々に同化させていく。この地を流れる空気となったように。

身体が浮き上がる感覚を覚えた途端、リセルの意識は空から地上を見下ろしていた。

足元には山頂が白く冠雪した「神の山」とそれらをぐるりと囲む緑色の帯——「聖なる森」が見える。空は雲一つなくどこまでも澄みきった青色をして、アルヴィーズの力が感じられるやわらかな太陽の光が降り注いでいた。

リセルはそれらを一瞥し、「神の山」の反対側——エルウエストディアスの王都がある南の空へ視線を転じた。

ちょうど「聖なる森」が途切れるあたりから、そこは一変して黒い暗雲が立ち込め、霧のように空気が澱んでいた。

雲しか見えない。

それはとても密度が濃いせいなのか、太陽の光すらも吸い込まれているのだった。

この世界に降臨した『ルディオール』の力が、確実に地上に影響を与えている証である。アルヴィーズのそれよりも。

リセルは唇を噛みしめながら、目の前の闇の帳を凝視した。

アルヴィーズはこの地界には降臨しない。

かの神自身がリセルに語ったように、『ルディオール』と直接戦うことはこの地を破壊することになるからだ。

だからアルヴィーズは神界に留まり、だが、『ルディオール』を封じるだけの力をこめた剣をリセルに託した。

リセルは右手が熱を帯びたように疼くのを感じた。

王都をすっぽりと覆い隠す黒雲の向こう側から、冷たい憎悪に満ちた『視線』を感じた。

それは不意に射かけられた氷の矢のようにリセルの心臓をめがけ飛んできた。

リセルは右手をかざし、自らに向けられたその『視線』を受け止めた。

ぞくりと冷たい風が背中を一気に駆け抜ける。

暗闇に赤く光る二つの目がこちらを見ていた。

その目には見覚えがあった。

地上に沈む夕日のように純粋な赤で、暗き赤。

リセルは確実に自らの死を意識した『瞬間』を思い出す。

その目の主は殺そうと思えばリセルを殺すことができたのだ。

母リスティスが邪魔しなければ——。

『喚べ』

ただ一つへの憎しみに駆られた感情が、地の底から響く声でリセルに語りかける。

『あのあばずれを』

『この地上に』

『お前が喚ばないのなら、ひきずりだしてやる』

『そして、地中深く埋めてやる』

『今度は私の番だ』

『私が“アルヴィーズ”となる番だ』

幾つもの声が重なってそれは周囲の闇を震わせた。

リセルはいつしか自分の意識が、暗き雲に覆われた王都の方へ引き寄せられるのを感じた。  
いけない。

そろそろ地上に戻らなければ、ルディオールに魂を捕えられる。

『ルディオール』の意識が宿った、細長い手のような黒い霧が、いくつもリセルめがけて伸びてきた。

リセルはアルヴィーズから託された剣が宿る右手をふりかざし、襲いかかるそれらを瞬時に消し去った。だが、その一回の攻防でリセルは限界を感じた。

地上に降りた神と意識体だけの自分。力の差は歴然だ。

「……っ！」

急に目の前が真っ暗になって、とてつもなく長い落下をリセルは感じていた。

どうやら地上に残してきた身体が、瞑想状態を破られたらしい。

(くそっ……！ あれほど外からの刺激は厳禁だって言ったのに！)

目覚めはきっと最悪のものになるだろう。

目覚めることができれば、だが。

## 【6】慈悲の雨に消えた言葉

一体いつまで待てばいいのか。

ルーグは黄昏れ始めた空を見つつ、相変わらず木の下で胡座をかいて座しているリセルの様子をうかがった。彼は目の前にいるが、魂はない。いわば『抜け殻』の身体だけがそこにある。

弱くなった陽の光が、どことなく中性的なりセルの顔を照らしている。

そう。

ルーディオールの呪いが解けた時、一瞬戸惑ったのは彼の顔だった。

それは記憶の中でしか覚えていない、ある者とよく似ていた。

「……エレディーンの末裔か」

ルーグは溜息をつきつつ、一時間以上座っていた木の下からゆっくりと立ち上がった。肩を覆う黒いマントが、瘦躯を撫でるようにするりと滑り落ちる。

雨が降る前の、土が湿った匂いを運ぶ風がそれを波打たせた。

「何か用かな」

ルーグは聖なる森から現れた、十人程の人間に向かって呼びかけた。

彼等は畑を耕すための鍬や鋤、太い木の棒、穀物を刈り取る鎌を手にしてこちらへ歩いてくる。質素な木綿のシャツとズボンに身を包んだ彼等は、この森の近くの集落に住む農民のようだ。中には作業用の前掛けとスカーフを頭に被った女性の姿も混じっている。

ルーグは困ったように眉根を寄せた。

どうもいやな雰囲気だ。

彼等は一直線にルーグーではなく、灌木の下に座るリセルの方へ歩いていくからだ。

ルーグはリセルから少し離れた前方で、農民達の行く手を塞いだ。

リセルはまだ瞑想中だ。

彼が念を押したように、その身体に万一触れられることは避けねばならない。

「待て。一体何の用だ」

ルーグは先頭に立って歩いてきた、鍬を肩に担いだ男に向かって呼びかけた。彼等の様子はただ事ではない。男は頭髪を短く刈り込み、白くなった無精髭を生やしていた。落ち窪んだ目にはやり場のない怒りと動揺、不安が宿っていた。それはこの男だけではなく、他の男や女も同じような目をしていた。

「その少年を連れていく」

男は鍬を右手に持ち、唸るような低い声でルーグに言った。

邪魔すれば容赦なく、その手の『武器』で殴るというわけか。

ルーグは肩をすくめ、まあまあと、諭すように柔らかな口調で再び男に話しかけた。

「一体どうしてだ？ 彼が何かあんた達に恨まれるようなことでもしたというのか？」

男はうるさそうにルーグを睨んだ。

「いいからそこをどいて、大人しく少年を我々に引き渡せ。そうすればあんたには危害を加えない」

男はルーグを押し退け、リセルに近付こうとした。

だがルーグは男の腕を掴んで捻り上げると、あっさりとその身体を地面に叩き付けた。

「そ、村長っ！」

後ろに立っていた二十代の青年が叫び声を上げた。

「何をするんだい！」

ルーグは青灰色の瞳を細め、騒ぐ農民達に刃のような鋭い視線を投げた。

「そっちこそ、何故彼を連れていこうとする。理由を話せ」

「うう……」

ルーグの足元で、投げ飛ばされた男——村長がうめき声を上げた。

「命令だ。……王様の」

「何？」

村長はルーグの手を振り払い、その場にどっかと腰を下ろした。

ズボンのポケットを探って、くしゃくしゃになった羊皮紙を取り出す。

ルーグは村長からそれを受け取って素早く文面に目を走らせた。

そこには、リセルの年齢、身体的特徴と、彼が大神殿を崩壊させ、多くの神官達を殺傷したかどにより、見かけた者は直ちに警備隊へ通報するようにと書かれていた。

生死問わず。

どちらの場合でも、この農民達が十年は遊んで暮らせる程の巨額の賞金を支払うと、国王自らの印章が下の方に書き加えられていた。

「金の為か」

ルーグは村長の顔に向かって丸めた手配書を投げ付けた。

「違う！ 俺達はどうしてもその少年を連れていかななくてはならないんだ」

村長は怒りに顔を赤く染めながら猛然と立ち上がった。

「この少年を聖なる森の近くで見た。そんな知らせが王都に入ったらしく、沢山の兵隊が村に来た。だったら自分らでここまでくればいいのに、奴らは俺達の家族を人質にして、俺達にあの少年を捕まえてくるようにいいやがった！」

「不気味な兵隊なんだよ！ みんな青白い顔をして、ぎらぎらした目をして」

村長の後ろにいた中年の女性が、目にうっすらと涙を溜めてつぶやいた。

「悪いが、あの少年を連れて帰らなければ、俺達の家族が殺される」

村長がルーグに向かって再び掴み掛かってきた。

「……くそっ！」

同時にルーグの足元には二人の女性が飛びかかり、動きを封じようと手を伸ばす。

ルーグは身体を捻って女性達を躲し、村長の腕を掴んで、前方から鋏を振りかざした青年の前に立ち塞がった。鋏は幸い村長の頭を掠めたが、同時にその動きは、彼等に道を開けることとなった。

ルーグの脇を数名の女性達が走っていく。

「しまった！」

ルーグは村長の首に手刀を降り下ろして失神させながら、降り下ろされた鍬と鍬を銀の剣の柄で受け止めた。

首だけ振り返り、リセルが相変わらず目を閉じたまま座っているのに舌打ちする。彼はまだ帰って来ない。

早く帰ってこい。死にたくなければ。

「待て！ 彼に触れるな」

ルーグは疾風のように鞘のままの剣を振り回して、二人の男を殴り倒した。

そしてリセルの元に行こうとしたが、ルーグは唇を噛みしめたまま足を止めた。

色褪せた緑色のスカーフを被った女性が、リセルの首筋に小さな短剣を突き付けていた。勝ち誇ったような顔をしてルーグを見ている。

「みんな！ これで村からあの兵隊達を追っ払えるよ！」

「急げ！ この魔法使いが眠っているうちに」

ルーグに向かって鍬や鍬を振りかざしていた男達が、一斉にリセルを捕らえた女性の元へと走る。

「ちょっと待て！ 私の話をきけ！」

ルーグはいじましげに銀の剣を握りしめ、農民達に向かって叫んだ。

彼等がルディオールの手下なら容赦なく斬り捨てるのだが、彼等はただの人間で、不運なことに家族を人質にとられている。

恐らく彼等の家族を人質にとっている兵隊達が、ルディオールの邪悪な意識に染まった者達なのだろう。

だから彼等は、この聖なる森に入れない。

そして農民達をけしかけた。

卑劣な連中だ。

「おっと騎士様。それ以上近付いたら、この少年の喉元をこれで突くよ。もっとも、生死問わず、ってことだから、あたしたちはこの少年が死んだってちっとも構わないんだからね」

緑のスカーフの女性が再び短剣をリセルの首筋に押し当てた。

魂が戻らない抜け殻でしかないリセルの身体は微動だにしない。女性が短剣を突き付けたまま、一人の大柄な男がリセルの身体を抱え上げ荷物のように肩に担ぐ。

途端、リセルの微動だにしない身体が不意に震えた。

落雷にあったかのように、その身体が激しく跳ね上がる。

「なっ！ なんだこいつ！」

リセルを肩に担いでいた男は、あまりにもリセルが激しく動くので思わずその身体から手を離れた。

リセルの身体は柔らかい草が生えた地面の上に転がって、ぱしっと青い雷光に似た光を放った。

「ぎゃあ！」

リセルの前方にいた小柄な男が飛び上がってぱったりと倒れた。

焼けこげた臭いが周囲に広がった。倒れた男の衣服からうっすらと白い煙が立ちのぼっている

。

「トリス！ ああ、し、死んでるっ」

男の身体を覗き込んだ女性が腰をぬかして座り込んだ。

その直後、横に走る青い光がその身体を貫いた。

女性は声を上げる間もなく口から血を滴らせて横向きに倒れた。

「に、逃げろ！」

「うわああああ！」

『わたしが瞑想状態に入ったら、絶対に声をかけるな。身体に触るな。外からの刺激は厳禁なんだ。魂が身体に戻れなくなることもあるし、意識のないわたしは、自分の力を制御することもできない。下手をすれば魔力を暴走させ、ここ一帯を焼け野原にするかもしれないからな』

リセルが警告した通りになってしまった。

ルーグは目を細め、動けなくなっている農婦の腰を掴み、一人でも多くこの場から離れることができるよう手助けした。

農民達は蜘蛛の子を散らすように、我先にと聖なる森へ走って逃げた。

けれどリセルの身体から溢れる魔法の青白い稲妻は、彼等を追い掛けるように森の中まで飛んでいく。

それは森の木々を引き裂き薙ぎ倒した。倒れた木からは、摩擦で火が生じ、見る間に聖なる森を焼き始めた。

辺りは生木が燃えるいがらっぽい臭いと真っ白な煙に覆われた。

「リセル……」

背後は森を焼く赤い炎。

前は暴走する青き魔法の嵐。

ルーグは未だ青い魔法の光に包まれ、仰向けに倒れているリセルの身体を見つめた。両手を天に向かって伸ばし、見開いた両目には自らの身体から溢れる魔法の光が硝子のように映っている。

彼を目覚めさせなければ、その命も危ない。

身体から溢れ出る魔法の力は、確実にリセルの生命力を奪っていく。

どんなに強大な力を内に秘めようとも、それは確かに底があって、蓋をしなければすべてが流れ出てしまう。

ルーグは跪くと銀の剣の柄に額を当て、アルヴィーズの加護を願った。

『私をここに留めておく理由はただ一つ。そうだろう？ アルヴィーズよ』

ルーグは立ち上がった。

鞘から銀の剣を抜き、リセルに向かって歩き出した。

彼の身体を取り囲むように渦巻いている魔法の光は、ルーグの侵入を許さないとするかのよう、こちらに向かって矢のように飛んできた。

ルーグは銀の剣でそれを受けた。

魔法の光は剣の刃の部分に触れると、吸い込まれるように消えていった。

「くっ……これはすごいな」

魔法の光が剣に当たる度、身体の中を雷が走るような強烈なしびれがルーグを襲った。

気を抜けばその衝撃で銀の剣を取り落としてしまいそうになる。

飛び散った魔法の光がルーグのこめかみの黒髪を掠めた。

触れた部分の髪の毛がじっと音を立てて焼き切れる。魔法の光の直撃を受ければ、地面に倒れている多くの農民達と同じように身体に穴が開いて死ぬ。

リセルに近付く数十歩の距離が永遠にも感じられた。

だがルーグの足は確実に近付いていた。

自慢じゃないが、これよりもっと危ない目に遭ったことが何度もある。

ルーグはリセルの魔力を取り込み青い微光に縁取られた銀の剣を地面に突き立てた。そちらに

引き寄せられるかのように、リセルの身体から溢れる青い魔法の光が剣の方へ飛んでいく。リセルに近付けるようになって、ルーグはよろめきながらその枕元に膝をついた。

顔を覗き込むとリセルの見開かれた両目は硝子玉のように虚ろだった。

彼の意識はまだ戻っていない。

いや、魂が身体に戻れないのかもしれない。

その位置を見失って。

呼び掛ける必要がある。なんとしてでも。

ルーグはリセルの右手にそっと触れた。パチッと火花が散って、ルーグの手袋は一瞬のうちに引き裂かれ、その破片は燃えて消えた。

熱い。

リセルの手は焼けた鉄のようだった。

だがルーグはつかんだその手を離さなかった。

燃え上がる炎に包まれたような錯覚を覚えながらもぐっと握りしめ、リセルの焦点を結ばない瞳を、その奥を、じっと覗き込んだ。

ルーグの掌はすでに赤く爛れていた。指の間からじわりと血が滲んで滴り落ちていく。

けれどルーグは涼やかな微笑を浮かべながら、冗談でもいう軽い口調で呟いた。

「おい。いい加減戻ってこいリセル。私が焼け死ぬ前に。私が死んだら、嫌でもずっとその背中につきまとしてやるからな。わかったか？」

「……」

ルーグがそう呟いた途端、リセルの身体から放出され続けていた青い魔法の光が徐々に弱くなっていった。

天に向かって伸ばされていた左手が、支えを失ったかのようにどさりと地面の上に落ち、大きく見開かれていた瞳に光が宿った。

それは光の加減で淡い青にも深い青にも見える不思議な光彩。

リセルは一点をじっとみつめていた。ただ一点のみを。

自分の顔を覗き込むルーグの顔を。

「……れ、だけは、嫌、だ」

かさついた唇を動かして、リセルがかろうじて言葉を絞り出す。

「何？ 聞こえないぞ」

本当は聞こえているのだが。

けれどルーグはわざと聞こえない振りをした。

「嫌だって言ったんだ！ ルーグ、あんたにずっとつきまとわれるなんて……！」

リセルがだるそうに息を吐きながら、しかし精一杯の強がりを見せて体を起こした。

けれどその目が信じられないものを見るように、大きく見開かれるのをルーグは見た。

唇を震わせ、編んでいた髪が解けて乱れるのにまかせたまま、リセルはその場に立ち尽くしていた。

聖なる森は今や炎と白煙を吐き出し、地面には焼け焦げた傷跡が目立つ見知らぬ農民たちの死

体がいくつも転がっていた。

「わたしが……やったんだな」

乾いたリセルの声が爆ぜる火のように木霊した。

ルーグは答えなかった。

答える代わりに、ルーグはリセルの強大な魔力を吸い込んで、今だ青白い炎をゆらゆらと立ちのぼらせる銀の剣を差し出した。

「これを使ってくれ。頼む」

リセルはルーグの手をみて驚いたように息を飲んだ。

「ルーグ。その手！」

ルーグはゆっくりと首を振った。

焼け爛れた手は炎に包まれたように熱を帯びているが、そんなもの、リセルが受けた身体の痛手に比べれば大したものではない。

ルーグの不注意で、リセルは危うく死にかけたのだ。本当に。

「私のことはいい。それよりも、森を」

リセルは小さく頷き、ルーグに手渡された銀の剣を右手に握りしめた。

するとその体は再び青白い魔法の光が縁取っていく。

剣が吸い込んだリセルの魔力を、リセル自身が剣から引き出しているのだ。

「フェンサリム（慈悲の雨）」

リセルが求める雨の名を喚ぶと、その頭上で青白い雷光が一度だけ閃いた。

地上から天に向かって昇った稲妻の正体は、リセルの体から発せられた魔法の力だ。

それは炎上する聖なる森の上に暗雲を呼び寄せ、大河から溢れる滝のような雨が一斉に降り出した。

視界が雨のせいで水煙に覆われ真っ白になっていく。その中で森を焼く炎の舌は徐々に小さくなっていった。

『慈悲の雨』は焼けた森を癒すかのように、激しくも優しく降り注いでいた。

雨に打たれながらリセルはルーグの剣を地に突き立てた。

銀の剣はもはや青白い魔法の炎を灯してはいなかった。

冷たい輝きを宿す刃にも慈悲の雨は降り注いでいた。

「……わたしは、何者なんだろう。ルーグ」

銀の剣の柄に手をやり、リセルは疲れたように目を伏せた。

「今ならわかる気がする。あんたに言われたこと。わたしは、自分が何者か、ちゃんと知らなければ……ならない。でないと、わたしは……」

——わたしはただの破壊者だ。

雨音が消したその眩きを、ルーグは確かに聞き取った。

## 【7】神々の夢

慈悲の雨はまだ降り続いていた。

それは聖なる森に燃え広がった炎を消した後、柔らかな霧のようなものへと変わって大地を濡らし続けていた。

ルーグとリセルは「神の山」を下った山道から外れ、二人の背丈を優に超える巨石と巨石の間にできた、小さな空洞を見つけてその中に入りこんだ。

日没が間近に迫ったので周囲は急速に薄暗さを増している。

雨も止まないことだし、今日はひとまずここで夜を明かそう。

ルーグの言葉にリセルは小さくうなずいた。いや、ルーグの言葉を半ば聞いているようで実はあまり聞いていなかった。

気付いたらルーグに手を引かれて、巨石の作り出した空間に足を踏み入れていた。そこは決して広くはないが、ルーグが背中を丸めずに立つことができる高さがあった。

「ありがたい。ここは地面が乾いてるな」

ルーグは糧食と水が入った小さな皮袋を地に置き、濡れぼそった前髪をかきあげて雫を払った。

「……くしゅん！」

リセルはルーグが白い手袋をはめている方の手——左手で、口元を覆うのを見た。リセルの視線に気付いてルーグが気まずそうに肩をすくめる。

「すまん。ちょっと土埃を吸ってしまったようだ。そうだリセル。火を起こしたいから枯葉が落ちていたら集めてくれないか」

ルーグはしゃがみこんで、空洞の入口に吹き寄せらせていた細い小枝や枯葉を拾い集めている。

リセルは言われた通りにしようとして、だが、全身濡れ鼠になっている状況に我慢がなくなかった。何より髪や服が濡れているせいで寒い。

ルーグがくしゃみをしたのも埃ではなく寒さのせいだろう。

こんな状況になったのはリセルのせいだが、僅かばかりの枯葉や枝を燃やしたところで、服を乾かすほどの火力が得られるとは思えなかった。

「ルーグ。ちょっと」

「何だ？」

怪訝な顔をして振り返ったルーグにリセルは近付いた。

「そのまま立っていてくれ。動かずに」

「ええっ？」

リセルはルーグの肩に触れないように指一本分ほど離れた所で右手をかざし目を閉じた。

一瞬でも気が逸れると、彼を丸焼けにしてしまう。

リセルは蠟燭を吹き消すように、そっと火を司る精霊の名を呼んだ。

『ウィル・リト・エルド（エルドの溜息）』

「……リセル？」

狼狽するルーグの声と共に、リセルは暖炉の前にいるような熱と暖かさを感じた。それは春風のように二人を包んで外へと通り抜けた。

リセルは軽く息をついて目を開けた。

「何をしたんだ？ 今？」

ルーグはすっかり乾いた黒髪やマントの裾を引っ張り、不思議そうにリセルの顔を見つめている。

リセルも肩にかかるセピア色の髪を払いのけながら、服の乾き具合を確かめた。

「炎（エルド）の精霊の力で乾かしただけだ。どこか服が焦げている所はないかみてくれ。時々加減を間違えて燃やしてしまうことがあるんだけど、今日は炎上しなかったな」

リセルの言葉を聞いてルーグがぞっとしたのか顔を青ざめさせた。

「炎上って……どういうことだ」

「どういうことって、炎上といえば火だるまにきまってるだろ。炎の魔法を使う時は、その火力に応じた呼び名で精霊に力を借りるんだけど、『吐息』じゃ弱すぎて服が乾くほどじゃない。だけど『息吹き』じゃ火に当る時間が長過ぎて焦げてしまう。取りあえず『溜息』ぐらいがいいと思ってやってみた」

「……溜息。炎の精霊の『溜息』で服が乾いた……」

ルーグは肝を潰したように身震いした。

「雨の日の洗濯物はなかなか乾かないから便利なんだけど、その加減を知るために今まで結構な枚数を燃やして、師匠によく怒られたよ」

リセルは五才で魔法の修行に出された時のことをぼんやりと思い出した。

母の魔法の師匠でもあったエンジェステッド老は、リセルを本当の孫のように可愛がり、そして多くのことを教えてくれた。

彼自身も魔法の使い手だが、年と共に魔力も衰え、儂には膨大な『知識』しかもう残っておらぬと笑っていた。

「何はともあれ、炎上しなくてよかった。もう炎はこりごりだ」

ルーグは服の乾き具合に満足しながらそう言ったが、リセルは彼の眉が一瞬引きつったようにしかめられるのを見た。

彼は平静を保っているが、だらりと体の横に添えられた右手は瞑想中のリセルを呼び戻すために重度の火傷を負っている。

いや、手だけではないだろう。

ルーグの滑らかな黒いマントにもそこここにくっつか焦げた痕がある。

服を乾かす前からそれらがあつたのをリセルは知っている。

「……ルーグ、すまない。わたしのせいであんたの利き手が……」

ルーグは右手を庇うように体の後ろに回し、意図的にリセルの視界からそれを隠した。

「雨で冷えたから今はそれほど痛まない。気にするな。それより、私の方がお前に謝らなくてはならない。お前は警告したのに、私の不注意で、農民達にお前の体を触れさせてしまった」

ルーグはリセルの様子をうかがうように、その瞳を覗き込んできた。

「お前こそ大丈夫か？ 疲れただろう。すぐ火を起こすから座って休め」

「……いや、ちょっと出かけてくる」

リセルはルーグの横を通り過ぎて、まだ細かな雨が降りしきる外を眺めた。日没は間近だが、灯がなくてもぎりぎり出歩ける明るさだ。

「リセル、お前、出かけるって……」

外に出ようとしたリセルの腕をルーグが掴んだ。

リセルは小さく溜息をつきながらルーグを見上げた。

彼は優しい。

『神殿騎士』の義務感なのかもしれないが、彼は何度もリセルのことを助けてくれた。彼がいなかったら、果たして「神の山」の神殿にたどり着けたかどうかとても怪しいだろう。

ルーグには多くの借りがある。

だから少しでもそれを返したかったし、騎士である彼の利き手をなんの治療もせずに放っておくことには抵抗があった。

けれど魔法は万能ではない。

リセルにはルーグの火傷を癒すことができない。

自らの魔力を媒体に、生気を分けてくれる地の精霊に掛け合ってもいいが、魔法は一種の『交渉』と同じで、相手が同意してくれないと発動しないのだ。力で言うことをきかせる場合もあるが、今日は魔法の大盤振る舞いをしたので、ただでさえ気難しい地の精霊と『交渉』する気力も集中力もない。

となれば残った選択肢は現実的なものだった。

「軟膏にする薬草を採ってくるだけだ。「神の山」を下った山道で、サキキュロックが群生しているのを見たんだ。すぐ戻る」

「リセル、おい！」

ルーグが絶句している間に、リセルは小さく『飛翔』の呪文を唱えていた。

薬草が生えている場所ははっきりと覚えている。

考え事に耽っていたせいで転落しかけた、あの急角度に曲がった山道だ。

その映像を脳裏に強く念じてリセルは『飛んだ』。



小一時間も経たないうちに、リセルは薬草と腕一杯の枯れ木を抱えてルーグの所に戻った。

黒髪の神殿騎士は集めた小石で小さなかまどを作り、枯葉や小枝を燃やしてリセルの帰りを待っていた。

「リセル」

ルーグが入口に現れたリセルの姿を認め、立ち上がった。

「魔法の使い損じゃないか。またこんなに濡れて」

「ついでだから燃やすものも拾ってきた。今、乾かす」

雨が止まないのでもリセルは再び濡れ鼠になっていたが、先程と同様に火の精霊の『溜息』で濡れた髪や服を乾かし、今夜の暖をとるための、濡れた枯れ木の水気も飛ばした。

「ふう……」

リセルは思わず息をついた。

こんなにあれこれ魔法を使ったのは久しぶりだ。

体が気だるく眠気を感じる。

だがリセルは軽く頬を両手で叩いて、チュニクの間に入れておいた薬草「サキキュロック」の長細い葉を取り出した。

つんと青臭い臭いが漂う。服につく虫を寄せつけないために入れる香木のそれに似ている。この臭いはリセルの服にもうつっているかもしれない。悲しい事に。

「なかなかさわやかな臭いだな」

『香り』と言わない所にルーグの皮肉を感じた。

「ルーグ、少しお湯が欲しいんだけど。それと、これをすりつぶすための容れ物を」

「わかった」

ルーグはお茶を湧かすための小さな鍋に水を注ぎ、アルディシスから「もう一人分必要でしょ？」ということで借り受けた木の椀を取り出した。

旅装のルーグはともかく、王都のはずれに飛ばされたリセルは何も持っていなかった。

今になって思い返してみれば、「神の山」に向かう行きの旅は無謀な行為だった。

あの森で、ルーグに出会わなければ。

「……湯が沸いたぞ。この中に入れればいいか？」

片手鍋を手にしたルーグに、リセルはうなずいた。

椀の底にほんの少しだけお湯を入れ、小さく千切った薬草サキキュロックの葉を入れる。

リセルは薬草をすりつぶすために拾った小石を袖口から取り出し、（これも山道を下りた所に湧き出ている清水で浄めてある）薬草が原形を留めずどろどろとした液状になるまで丹念にすりつぶした。

「さわやかな臭いが一段と強まったようだ」

ルーグがひきつった笑みを浮かべながらつぶやいた。

「この臭いは王都の『いい男』の間できっと流行る」

「……嘘つけ」

リセルは自分の携帯用の袋を開けて、アルディシスからもらった清潔な布を取り出し、すりつぶした薬草をたっぷりと染み込ませた。

「右手を出してくれ、ルーグ」

「……いや、リセル。お前の気持ちはありがたいが……」

リセルはしりごみするルーグの右手をつかんだ。たき火の明かりで火傷の状態を確認する。

手全体が赤くなって熱を持っている。まるで炎の中に手を突っ込んでいたかのように。酷いの

は掌の方だ。こちらは焼けた鉄を押し当てたように爛れて水泡ができています。これでは当分剣を握ることができないだろう。

リセルは淡々とルーグの手に薬草を染み込ませた布を巻いた。

「サキキュロクは熱を吸収し、傷の表面に膜を作って化膿止めの役割を果たす。できたら明日の朝、もう一度塗布した方がいいな」

ルーグの頬がびくびくと引きつった。

「確かに冷たくて気持ちがいいが、どうも……この臭いは……」

リセルは黙ったまま薬草をすりつぶした椀を持ち上げ、空洞の外へと持って行った。外に置いておけば雨が綺麗にしてくれる。

「すまない、ルーグ」

すっかり暗くなった外をみつめながらリセルは口を開いた。

そこは闇の帳が降りて何も見えない。ただ、しとしとと細かな雨が降るばかりだ。

「わたしが正神官なら、アルヴィーズに祈る事であんたの手を癒すことができただろう。でも、わたしは違う。わたしは神を呼び出すためだけに、奉り上げられた『偽者』だ。祈りの言葉も知らないし、神への信仰心もない。アルヴィーズを否定するわけじゃないが、神は……気紛れなものだ。片手で救済の手段を持ちながら、同時に身を滅ぼす剣も突き付ける」

「リセル」

「そうだろう？ ルーグ」

リセルは急に疲れを感じて振り返った。

「自分達がこの世界を創っておいて、そして、地中にあんな恐ろしいモノを封じたくせに、いざとなったらその始末は『お前』が付けてくれと言う。確かに『あいつ』を喚び出したのはわたしのせいだが……では、何故わたしにはそんな力があるんだ？ わたしはそんなもの……望んではないのに」

リセルはアルヴィーズから託された剣が宿る右手を握りしめた。

こんなことをルーグに話したところで、何も変わらないとわかっているけれど、何故か彼の深い青灰色の目を見ると言いたくなかった。

そのせいでルーグ、あんたに怪我をさせてしまったから。

わたしはひょっとしたら、この世からいないほうがいいんじゃないだろうか。

そうすれば『ルディオール』も地下でずっと眠っていた。起こすものが他に存在しないかぎり。

不安が堰を切って溢れる水のように募ってきて、リセルは我が身をひしと抱きしめた。けれど今度は膝の震えが止まらない。

立っているのが辛くなって、リセルはごつごつした岩の壁に手をついた。

まぶたが重い。先程とは違う、強烈な眠気。

頭を殴られたように急速に意識が濁る。

振り払えない急な眠気は、これ以上術者に魔法を使わせないようにするための自己防衛反応だ

遠方から魔法の師であるエンジェステッド老のざらついたしゃがれ声が聞こえた。

「リセル、おい」

肩を揺さぶられ、リセルは閉じかけた目蓋を意志の力でこじ開けた。

鼻を刺激する香木のような臭いがする。

まったくもってこの臭いは傑作だ。

ルーグが側にいるのがすぐわかる。

リセルはルーグの膝の上に頭を載せたままほっとして息を吐いた。しばし意識を失っていたらしい。

「……ルーグ」

「もういい。眠るんだ、今は」

ルーグの声は優しかったがどこか抗えない厳しさもあった。

目蓋が再び重さを増してくる。

今度こそ本当に眠ってしまう。

「アルヴィーズは……わたしが『ルディオール』を封じるのに失敗したら、この世界を救ってくれるだろうか」

リセルはうわごとのようにつぶやいた。

神は救済の手を差し伸べながら、もう一方の手に剣を持っていた。

間違えればわたしを破滅させる剣を。

「ルーグ、教えてくれ」

「……」

意識が眠りの泥沼にはまっていく。

ルーグの声は聞こえなかった。



リセルは夢をみていた。

夢の中でもリセルはルーグと一緒にあの巨石の間にできた空洞の中にいた。

しかしルーグはいつもと同じように銀の剣を大事そうに小脇に挟み、背中を岩に寄りかからせて眠っている。

悪夢一つ見ず幸せそうなその寝顔をみていると、思わず向こうずねを蹴り飛ばして起こしたくなる。

だがリセルは空洞の外が薄ら明るいことに気付き、誘われるかのようにそちらに向かって歩き出した。

外は青い空に細い銀の月がかかり、しんとした静寂に包まれていた。

自分の息遣いすらも聞こえるような、恐ろしいまでの静寂。

「……」

リセルは青い闇に包まれる前方の「聖なる森」に向かって歩き出した。

声が聞こえたような気がしたのだ。

「どうしても、そなたはここに残るといふのだな」

「はい」

森の木々の間から金色の光が放射線状に輝いていた。

その光の中で、二人の人影が浮かび上がっている。

そこは星々を敷き詰めたように輝く美しい水辺だった。

金色の甲冑と白銀の衣をまとった金髪の女性が、緑が眩しい苔蒸した岩の上に佇んでいる。

彼女からは、ありとあらゆる命を萌えさせる生命力に満ちた、思わずその場にひれ伏してしまうような圧倒的な存在を感じた。

一方、甲冑を纏った女性の側に跪いているのは、狩人のように質素な衣を身につけた青年だった。青年は長いセピアの髪を新緑のマントを纏った背に流し、水面のように静謐な雰囲気漂わせた不思議な光彩の目をしていた。一見人間のように見えるが、彼もまた山を素手で動かす事ができるような、大きな力を内に秘めている。

甲冑を纏う金色の輝かしい女性は、その白い面を曇らせ、真昼の空のように鮮やかな青の瞳を悲し気に伏せた。

「そなたは妾と共に、荒れ果てた神界を再建する手助けをしてくれると思っていたのに……」

「申し訳ありません。ですが、誰かがこの地に降りて、もう一人の『あなた』を見守らねばなりません」

青年は俯いていた顔を上げ、金色の光の化身のような女性に真直ぐな視線を向けた。

「アルヴィーズ様。あなたが神界の戦を鎮めるために、払った代償は大きなものでした。自らの半身を切り捨て、迷いを断ち、自分を変えねばならなかったのです。その痛手に比べれば、私が地界に降りることなど大した事ではありません」

「だがそれは、そなたが神格を失う事になる。二度と神界へ行く事ができなくなるのだぞ」

「構いません」

青年ははっきりとした口調で答えると、静かに立ち上がった。

森を見回し、星の光を受けて輝く水面を眺め、清涼な風を感じるように大きく息を吸った。

「あなたが神界の戦いを終わらせる決断をしたのは、あなたが育んだこの美しい世界を護るため。この地に降りてよくわかりました。ここはあなたの……」

青年は薄い青にも濃い青にも見える瞳を細め、少し悲し気につぶやいた。

「『半身』を切り捨てる前の、優しいあなたを思い出す。私はそれがとても愛おしい」

アルヴィーズの彫像を思わせる横顔が憂えるように歪んだ。しかし彼女が見せた動揺はほんの瞬きをする間だった。アルヴィーズは再び毅然とした表情に戻っていた。

「エレディーン」

青年は頭を垂れた。長いセピアの髪が肩から音もなく流れ落ちた。

「私がここに留まる理由はただ一つ。けれど、神格を失った私は人となり、常命の定めに従わなければなりません。ですが、人と交わる事で私の血脈は受け継がれ、この地を守り続けます。『監視者』として」

リセルははっと息を飲んだ。

顔を上げた青年が何かを感じたかのように、リセルの方を見たような気がしたのだ。

いや、青年は、どこかで見た事がある表情で、リセルをじっと見つめていた。その目にはリセルを包み込むような優しさと、絶対に抗えない大きな力が宿っていた。

『迷いがあると、お前は『彼奴』に飲み込まれる。己の弱い心と向き合い受け入れるのだ。それは、恐ろしい事ではない。我が血脈に連なる者よ』



リセルは誰かに呼ばれたような気がして目を開けた。

辺りはぼんやりとした金色の霞に包まれているようだった。

何度か瞬きをすると金色の霞は夢の残り香のように消え失せて、そこは真直ぐな幹をした木々が生い茂る森の中だった。

頭上からは木々の葉の間から朝の柔らかな日差しが差し込み、足元に流れる小さな清流がきらきらと水面を光らせていた。絨毯のように岩を覆う苔の緑が眩しい。リセルは目眩を感じて眉間に右手を当てた。

「リセル！」

「……ルーグ？」

リセルは後方から響いた若い男の声に振り返った。

肩まで伸びた黒髪と黒いマントを翻し、腰に銀の剣を携えたルーグが、リセルの姿を見つけて木々の間から姿を現わした。

「こんな所にいたのか、お前！」

がらにもなく動揺の表情を見せて、ルーグは安堵したかのように口元をほころばせた。

「明け方目が覚めたら、お前がいなくなっていたから驚いたぞ。こんな所で何をしていたんだ」

リセルは黙ったままルーグの顔を見上げた。

「夜中、わたしも目が覚めたんだ。ただし、夢の中で。いや……夢の中とっていたんだが、気付いたらここにいた」

リセルは戸惑いを覚えながらルーグに訊ねた。

「お前は本当に本当のルーグか？ わたしはまだ夢をみているのだろうか」

ルーグはぎょっとしつつ、「大丈夫か？」と言わんばかりにリセルの顔を覗き込んだ。

そしておもむろに右足をあげるとリセルのむこうずねを軽く蹴った。

「痛い！」

リセルはよろめいて、苔蒸した岩の上に尻餅をついた。

もう少しで川に落ちる所だった。

「ルーグ！ 一体何をする！」

リセルの中で何かが弾けた。

睨み付けるようにルーグを見ると、彼は胸の前で腕を組んで笑っていた。

「いや、眠気を振り払う方法をお前から教わったから、それで起こしてやったまでのことだ。効果は私で実証済みだから『てきめん』だろう？」

「……」

リセルはルーグを怒鳴り付けようとしてそれをぐっと堪えた。

悲しいかな、骨に直に伝わるこの痛みのせいで、ふわふわとした夢の感覚は完全に消え失せた。それは確かだ。リセルは立ち上がって服についた苔と泥を落とした。そしてむっとしながらもルーグに向かってつぶやいた。

「……すまなかった。今まで臍を蹴飛ばして」

「どうした。今日はやけに素直じゃないか」

「別に」

リセルはルーグに背を向けて、足元を流れる清流に手を入れた。

ひやりとして気持ちいい。

リセルは両手で水を受けてついでに顔を洗った。

「鬱蒼と木が茂っているだけと思っていたが、聖なる森にもこんな場所があるのだな」

リセルの隣に膝を付き、ルーグもまた清流に手を浸していた。

「夢を見た。ここで、遥か遠い昔の……神々の夢を」

「リセル」

リセルは大きく首を振った。

慌てて立ち上がり、ルーグとの距離を広げる。

「ルーグ、わたしは起きていますぞ。決して寝ぼけてはいない！」

ルーグは残念そうに肩をすくめた。目が楽しそうに笑っている。

「魔法使いは勘が鋭くて困る。今までの借りを返す絶好の機会だったのにな」

リセルはルーグと距離を広げつつも、彼が昨夜巻いてやった右手の包帯を外していることに気がついた。

「ルーグ。さり気なく今手を洗って、サキキュロックの『すがすがしい臭い』を落としてみたんだけど、朝食後にもう一度塗布するからな」

ルーグはそっと右手を背後に回した。

今度はじりじりとルーグがリセルから距離を離れた。

「リセル、手の腫れは大分引いたし痛みもあまり感じない。もうあの薬草は不要だ」

リセルはルーグが離れた距離を詰めた。

「あ」

ルーグがしまったというふうに顔をしかめる。

彼の後ろは樹齢千年を超えようかという立派な木が生えていた。大人が手を繋いで約十人ぐらいになる太い幹をしている。

リセルは獲物を追い詰めた猟師のように微笑した。

「それを判断するのはわたしだ」

この後、ルーグの右手は新たにすりつぶされた薬草を塗布されることになる。

すがすがしい『臭い』は、ルーグの体から暫くの間、消える事がなかった。

## 【8】告解

「……これで全員だ」

「わかった」

リセルは目を閉じ深呼吸をして、昂った神経を落ち着かせようとした。

だが目の前に横たえられた、五人の農民達の変わり果てた姿は目蓋の裏に焼き付き、焼け焦げの目立つ惨たらしい傷跡からは、未だどす黒い血が流れ出して大地を染めているのを忘れる事ができなかった。

彼等は死んだ。

リセルに今できる事は、その哀れな骸を浄化の炎で清めることだ。

「ルーグ。危ないから下がっててくれ」

「どれくらい？」

「百歩ほど後方へ」

落ち着いたルーグの気配が遠のいた事を確認し、リセルは強ばった両手を組んで、ちょうど臍の部分に押し付けるようにして当てた。

俯き、火の精霊の名を唇にのせる。

「聖炎の王よ。すべてを灰に。灰は再び森を潤す糧とならん。『ヴィズ・ギムレー』」

生半可な魔力では決して呼びかけに応えてくれない最高位の炎の王の名を呼ぶと、灼熱の太陽が地に落ちたような強烈な熱波が周囲に弾け飛んだ。

それは農民達の骸は勿論、瞬時にその場の空気まで焼き尽くすほどのものだった。

「……」

聖なる炎の火力は凄まじいが、それは契約主であるリセルを燃やす事はない。

『ありがとう。ギムレー』

心の中で炎の王に礼を言い、リセルはゆっくりと目を開けた。

白い灰を焼く小さな炎の残り火が、まるで花びらのように天へ昇っていく。

目の覚めるような真っ青な空の――遥か天の高みまで。

それを見つめながら同時にリセルは唇を噛んだ。

聖なる森との境界には、黒々とした暗雲の塊が広がっていたのだ。

「リセル」

ルーグが再びリセルの隣にやってきた。

リセルの視線の先にあるものを一瞥すると、その飄々とした表情は苦いものへと変わっていた。

「彼奴は急速に自分の力を地上に及ぼしつつあるな」

「……ああ」

「行くのか？」

リセルはルーグの言葉に黙ったままうなずいた。

「わたしは――」

リセルは喉の奥につかえた思いを吐き出すつもりで口を開けたが、それをすぐに言葉にすることができず俯いた。

「どうした。口籠るなんてお前らしくない。言いたい事があるならいってみろ」

ルーグの口調は優しくだったが、彼は自分が何を言うのかわかっているような気がした。顔を上げるとルーグの湖水のような青灰色の眼がリセルを見下ろしていた。リセルは右手を上げ、無意識の内にそれを胸の上で握りしめた。

「ルーグ。『あいつ』の所へ行く前に、わたしのやったことをきいてくれるか？ わたしは、ルディオールを監視する一族の流れを汲む出自故に、尋常ではない魔力を備えて生まれてきてしまったのだ。その力を……再びあいつに利用されそうで、本当は怖い」

「リセル」

ルーグの目が訝し気に細められる。

「私に話す事でお前の気持ちが整理されるのなら、私は最後までそれを聴こう」

「……ありがとう」

この場に誰かが、けれどそれがルーグでよかったとリセルは思った。

自分の中だけに抱えていることに正直限界も感じていた。

昨日、自らの魔力を暴走させたせいで炭化した森の一部を見つめながら、リセルはぽつりと口を開いた。

「もう、あれから五日、いや……六日経つんだな。わたしは大神官である母の後継者としての証を示すため、王城内にある『大神殿』でアルヴィーズ神の召喚を行っていた。神殿内にはわたしの他に母と国王陛下。執政官などの役人に、各神殿の神官長たち十五名と、特別に立ち合いを許された上級神官達三十名ほどがいた。それと……」

リセルはちらりと隣に佇むルーグを見上げた。

「神殿の外には『大神殿』直属の神殿騎士達が警備の為に詰めていた。数はわからないが常時十五名ほどいたと思う」

ルーグはうなずき、リセルは再び話を続けた。

「召喚の儀はわたし（魔法使い）にとって難しいものではない。衣服を乾かすために火の精霊の力を呼び出すように、召喚は日常茶飯事だ。ただ……喚び出す相手が精霊より格上の『神』と呼ばれる特別な存在だけあって、要求される魔力の量が尋常じゃなかった。当然と言えば当然だ。この世界に息づく精霊とは違い、神は別次元の世界にいる。それを無理矢理喚び出すのだから、体中の力を搾り取られた。母が言っていたが、神の召喚はまさに術者の命を削る痛みを伴う。あの時わたしはアルヴィーズに呼びかけながら、自分の意識を保つことで精一杯だった。意識を失えばアルヴィーズは勿論喚び出す事はできないからだ。その時だ……」

リセルは大きく息を吐き、疲れたように足元の草むらに腰を下ろした。

柔らかな葉の手触りを確かめるようにそれを握りしめる。

大丈夫。

ちゃんと大地に足はついてる。

ここが崩れる事などありえない。

「不意に聞こえたんだ。『声』が」

黒いマントが揺れてルークがリセルの隣に腰を下ろした。

「声？」

リセルは肩に滑り落ちたセピア色の髪を手で払い、気弱な笑みを浮かべた。

「ああ。元々わたしが大神殿に来た時から感じていたことだけどね。わたしが如何に現大神官の息子であれ、本当にアルヴィーズを喚ぶ事ができるのか、大神殿の神官達は疑問に思っていたようだ。そんな彼等の『心の声』が、はっきりと不意に聞こえてきたんだ」

リセルは両腕で肩を抱いた。

――あれがそうらしい。リスティス様の息子で魔法使いだそうだ。

――なんと。まだ子供ではないか。

本当にアルヴィーズ神をあの子供が喚べるというのか？

――少なくとも国王陛下はそう思われている。

ひょっとしたら、お美しいリスティス様が、陛下に直接発言できる大神官の特権を行使して、

自分の息子を後継者にしようと吹き込んだとか……。

――まさか！

でも大神官になるためには、神を喚び出せることが条件だ。

――それはそうだが、我々一般人を欺くのに、何も本物の『神』を喚び出す必要はないだろう。

リスティス様はアルヴィーズ神を毎年喚び出して、国の安寧を願っているが、果たしてそれは本物のアルヴィーズ神だろうか？

魔法の見せる幻影で、我々はずっとそれに騙されていたのかもしれない。

――そうなのか？

――『降臨祭』の時、実際アルヴィーズ神の召喚に立ち会われるのは陛下のみ。

陛下だけなら騙すのは雑作もない。

その上、神を召喚したリスティス様は必ず人払いをして一日居室に籠られる。

ひょっとしたら、リスティス様ご自身が、

怪し気な魔術でアルヴィーズ神に化けているのかもしれないじゃないか。

――じゃあ、何故今回は我々の前で召喚の儀を？

――余程自信があるに違いないさ。魔法に素人である我々も騙す事ができるとな。

「彼等の声を聞いた途端、わたしは心の底から怒りを覚えた。確かに彼等が言う通り、魔法で神の幻影を見せる方が召喚より遥かに楽だ。でも母は違う。母は己の身を……命を削って国の為にアルヴィーズを喚んでいたんだ。人払いをするのは消耗した自分の姿をみられたくないから。母は……誇り高い人だから。決して人前で自分の弱味を見せたりしない。ましてや、母のことを

ああいう風に見る連中がいる神殿では、特にね」

「確かに、人を貶めることを平気で言う神官もいるな。私にも何人か心当たりがある」

ルーグは同情するかのようにならずいた。

「わたしのことはともかく、母のことを侮辱する言葉を聞いて、わたしは一気に集中力を失った。アルヴィーズの気配はすぐそこまで来ていた。けれどわたしは……」

リセルは息を吐いた。

「わたしは、アルヴィーズを喚ぶのを止めた。急に馬鹿馬鹿しくなった。神官達は本物のアルヴィーズを喚んだって、偽者扱いするに違いない。そんなだから、神官達は自らの信仰のみでアルヴィーズと意志の疎通をすることができなくなったんだ。だから、わたしはアルヴィーズを喚ぶのを止めた。けれどその代償は高くついた」

「一体どうしたのだ？」

「わたしの方からアルヴィーズの同意を得る前に召喚の契約を破棄した。これは召喚の魔法において最大の禁忌なんだ。本来は呼び出した相手の同意を得て、元の世界に戻ってから繋いでいた互いの空間を閉鎖させる。けどわたしはアルヴィーズがまさに現れようとする直前に、こちら側の空間を閉じてしまった。アルヴィーズは思わぬ出来事にきっと戸惑った事だろう。そのせいで……地上に出ようと機会をうかがっていた『ルディオール』の意志が目覚めたんだと思う」

ルーグはよくわかったような、わからないような複雑な表情でリセルを見た。

「ルディオールは地中深く封じられていたのだろう。それぐらいの出来事で、ルディオールの意志は目覚めるものなのか？」

リセルは肩を抱いていた腕を放し、ルーグに向かって自嘲した。

「言わなかったか？ わたしが、『ルディオール』を喚んだのだ」

「何……？」

ルーグの青灰色の瞳が大きく見開かれる。

リセルはその瞳に映る自分自身に向かって自虐的な笑みを浮かべた。

「アルヴィーズの召喚を打ち切ったわたしには、当然のことながら契約違反に対する罰が待っていた。アルヴィーズが神界に戻る前に空間を閉じるということは、かの神の存在を不安定にさせ消失させるような、大きな危険に満ちている。わたしがアルヴィーズの召喚を途中でやめたことに気付いた母が、慌てて床に描いた召喚陣を無理矢理踏み越え入ろうとした。だが、魔力の衰えが顕著になった母の力では、中に入る事ができなかった。わたしもまた召喚陣から出る事ができなかった。それはわたしを『ルディオール』のいる闇の世界へ強制送還させる魔法陣に変化してしまったのだ。

わたしは抗った。

何故わたしだけが、こんな目に遭わなくてはならない？

アルヴィーズの存在を不安定にさせたことは悪いと思っている。

だからといってこの仕打ちは厳しすぎる。

助けてくれ。

――誰か。

わたしにはもう何の力も残されていなかった。

アルヴィーズを喚んだ事ですすでに体に宿る魔力は搾り尽くされ、生ける者の住む世界ではないこの大気は、わたしの肺をすぐにでも窒息させる毒に満ちていた。

果てしなく落下を続けるわたしの体を、その時誰かが受け止めた。

『私を喚びなさい』

眠る幼子に呼び掛ける母親のような優しい声が、わたしの耳元で響いた。

『私があなただを地上まで連れて行ってあげる。あなたはただ、私の名を喚ぶだけでいい。それで地上への扉は開かれる』

『――あなた、は？』

闇の中に仄かに輝く銀髪がさらりと揺れて、この世の赤を凝縮させたような、紅の瞳がわたしを見下ろしていた。そしてその顔は、わたしが見知ったものだった。

『アルヴィーズ？』

太陽神と同じ顔をした銀髪の女性は、困ったように目を細め、ゆっくりとわたしに顔を近付けた。

『私の名はルディオール。喚びなさい。もうあなたに残された刻（とき）は瞬きをする一瞬だけ――』

わたしは彼女を喚んだ。

この闇の世界から逃れたい一心で。

途端、世界が暗転した。

気が付いたらわたしは天井が崩壊した大神殿の中に立っていた。

大神殿は柱を残して、全ての壁と天井が崩れ落ちていた。

わたしがアルヴィーズを喚ぶために描いた召喚陣は丸く床が抜け落ちて、底の見えない深い穴がぽっかりと口を開いている。

わたしは何があったのかさっぱりわからず、呆然と辺りを見回した。

足元には崩壊した神殿の瓦礫が散らばり、大きな破片の間から、一人や二人ではないいくつもの押しつぶされた人間の手足が覗いていた。白い大理石の床はそこから細く流れる鮮血で赤く彩られ、それが召喚の儀に立会人として同席していた神官達のものであるということに気付いたわたしは、強烈な吐き気を感じてその場にうずくまった。

どうして、こんなことに？

闇の世界の瘴気を吸い込んだせいもあって、わたしは何度も吐いた。元々召喚の儀の為に飲食を昨晚から断っていたから、胃の中には殆ど何も無いはずだが、込み上げる吐き気は少しも治まらなかった。

その時、上空から高らかに笑う女の声が聞こえてきた。

同時にわたしの名を呼ぶ母の声も。

母が生きている。

そのことだけがわたしの希望になって、一瞬だけ力が湧いてきた。

けれど次の瞬間、空から黒い稲妻が煌めき、わたしをめがけて落ちてきた。

わたしにはそれを防ぐことも逃れる力もなかった。直撃を受けなかったのは、母がかろうじて残る魔力を集め、わたしを守ってくれたからだが、そこにこもっていた凄まじい呪詛まで防ぐ事はできなかった。

私が覚えているのは、母の顔と、闇の空に浮かぶ銀月のような髪と鮮やかな紅の瞳を細め、アルヴィーズへの憎悪に満ちた言葉を吐くルディオールの姿だけだった。

次に目が覚めた時、わたしは王都の外れの森の中に倒れていた。

その時の姿はルーグ、あんたも覚えているだろう？

『ルディオール』はわたしを利用してこの地へ出てきたが、再び封じられる事を怖れてわたしを殺そうとした。でも、母のかけてくれた防御魔法がその威力を弱め、死には至らなかったが呪の一部がわたしの姿を歪め、神をも喚ぶ魔力を封じ込めたというわけだ」

リセルは抱えていた膝を伸ばし、両手を後ろについて空を仰いだ。

そのまま目を閉じる。

「ルーグ、ありがとう。話を最後まで聴いてくれて。心の奥に燻っていたモノが少しだけ晴れて、穏やかな気持ちになれた気がする」

「リセル」

リセルは目蓋を開き、隣に座るルーグに向かって微笑した。まるでこの聖なる森の木々のように、落ち着いた雰囲気崩さないルーグはリセルの話を聴いてどう思っただろう。

「ルディオールをこの世界に喚び出したのはわたしだ。死ぬのが嫌でルディオールの甘言にのった。わたしを罵りたければ罵ってくれ」

ルーグの顔が不意に強ばった。力強く伸びた眉の下で、青灰色の淡い光彩の瞳が急速に厳しい光を帯びていく。ルーグは手袋をはめた左手を不意に上げ、軽く拳を握るとそれをリセルの脳天に向かって振り下ろした。

殴られる。

リセルは思わず目を閉じた。

だがいつまで待ってもルーグの拳はリセルの頭に落ちて来ない。

「馬鹿。お前を罵る者がいたら、私の拳はまっ先にそいつを殴り倒すだろう」

「ルーグ」

リセルは目を開き顔を上げた。

ルーグは先に立ち上がっていて、先程振り下ろそうとしていた左手をリセルに向かって伸ばしていた。

「いかなる理由があったとしても、お前は確かに禁忌を犯した。けれどそれは誰にも責める事などできない。死の恐怖に晒され平静を保てる人間などいないからだ。この私を含めてな。さあ立て、リセル」

「……」

リセルは左手を伸ばして、差し出されたルーグの手を掴んだ。ルーグの指に力が籠るのが感じられ、それを頼りにリセルは立ち上がった。

ルーグの厳しかった顔が再び元の飄々としたそれへと変わっていく。

「お前は自分が思っているよりずっと強い人間だよ。流石、エレディーンの血脈に連なる者だけあって」

リセルは一瞬耳を疑った。

「ルーグ？ 今、なんて」

ルーグがおどけたように片眉を吊り上げた。

「えっ？ 私は今何か変な事を言ったかい？」

「言った」

リセルは確信を持ってルーグに詰め寄った。

「わたしは『神』を喚ぶ事ができる資質を持っている魔法使いだということはあんたに話したが、『エレディーン』の話はまだしていない」

リセルは光の加減で淡い青にも深い青にも見える瞳を凄め、右手に小さな白銀の炎を灯らせた。

「ルーグ。あんた、何故その名を知っている？ 今日こそあんたの素性を洗いざらい話してもらおうぞ。あんた、ただの『神殿騎士』じゃない。連中は『神殿』を守るから『神殿騎士』と呼ばれているだけで、城を守る近衛騎士と同様、ロクに神々の系譜や神学の知識を持っていない。わたしでさえ知らなかったその旧き名を、どうしてあんたが知っている！」

「そ、そうなのか？」

まだとぼけようとするルーグに、リセルは右手に灯らせた小さな白銀の火をその鼻先へ突き付けた。

「嘘は付かない方がいい。ルーグ。いや、ルヴォーグ神殿騎士」

リセルに正確な発音で本名を呼ばれたルーグは、ぶるっと体を震わせた。

「ほう。私の名前をちゃんと言えとはすごいじゃないか」

「呪文に比べればあんたの名前なんて一度聞けば何度でも言える。それよりも、この火はただの火じゃないんだ。裁定の神フォルスの『審判の灯火』だ。あんたが嘘を一つつく度にこれは大きくなって、最終的にはあんたの体を飲み込むまでの大きさになる」

「リセル。いい加減にしてくれ。私は本当に『ただの』神殿騎士だ」

ぼっ。

ルーグの鼻先に突き付けられた炎が揺らめき、それはリセルの手と同じ大きさにまで燃え上がった。

「ルーグ。わたしの話をきいてなかったのか？ 嘘については駄目だと」

ルーグは鼻先の炎を見据えながら、困ったように眉間を寄せた。炎の熱のせいかわ汗か。ルーグの鼻の頭にじっとりと汗の粒が浮かんだ。

「わかった！ 確かに公平ではないな。私もいい加減自分の事を話そうじゃないか。だから、その物騒な『審判の灯火』とやらは消してくれ」

リセルは炎が再び揺らいで大きくならないか、その動向を注目した。

しかし炎はリセルの掌の上でゆらゆらと静かに燃えているだけだった。

「わかった。今の言葉は嘘ではないらしい」

リセルは炎をルーグの鼻先から遠ざけ、右手の親指と中指をこすりあわせてそれを消した。

ルーグは安堵したかのように重苦しく息を吐いた。

「本当にお前の魔力の資質は、自分で誇っているだけあって凄まじいな。『審判の灯火』は神界にそびえるエイギス山脈の遙か奥の洞窟にあるという。その一部を雑作もなくここに持ってくるなんて」

「……ルーグ。あんた、それをどうして……」

ルーグは左手を胸の前に持っていき、首から下げていた銀の剣を小さく象った首飾りを持ち上げた。

「王都の大神殿を守る『神殿騎士』だけが、何故これを持っているかその理由を知ってるか？

ハイ・プリースト＝リセル・ルースフィア・エレディーン」

リセルは唇を震わせた。神官長の正式な呼称をつけて、かつリセルの名前を言ったのは、ルーグの本名を正確な発音で言ったことへのお返しだろうか。

「本当は……あまりよく知らない。ただ、『大神殿』の神殿騎士たちが皆それをつけているのを見ていたから……」

ルーグは首飾りから無造作に手を放した。

「まあ、手っ取り早い話が、私も神学の勉強をして、その全課程を修了したということだ。でも私は『神官』にはならず、彼等と神殿を守る『騎士』を選んだ。王都の『大神殿』に仕える『神殿騎士』は、神学の博士課程を修了した者だけができることができ、かつ、中級神官と同じ位なので、この銀の首飾りをつけている。だから……」

ルーグは不意に右手を――火傷を負って『すがすがしい臭い』を放つ薬草を塗布された包帯を外し始めた。

「魔法を使うお前がいる手前、中々言い出せず困ったが、この先剣が使えないのも困るから……」

リセルはあらわになったルーグの右手を見て驚いた。昨夜見た酷い火傷の痛々しい傷跡が、跡形もなく消えている。

すっかり完治している。

「あまり深い傷は治せないが、これぐらいなら私程度の信仰心でも『癒しの祈り』で治す事ができる」

「ルーグ……」

ルーグは申し訳なさそうに、リセルに向かって頭を垂れた。

「黙っていた事は謝る。ただ、お前を傷つけたくなかった」

リセルはルーグの言葉に絶句していた。癒しの祈りを行使できるのに、ルーグはリセルのためにそれをわざと使わなかったのだ。

「……馬鹿だ。あんた、どうしようもないお人好しだ」

リセルは急に目の奥に熱いものを感じて思わず顔を背けた。

自分が大きな力を振り回して、それを得意げに披露して喜んでいるような、ちっぽけな子供であることを否応なく感じた。

それに対してルーグはお人好しではなく、状況を冷静に見据え判断できる大人なのだ。

「リセル」

リセルは手を上げて目に浮かんだ熱い雫を払い落とした。

泣いていたことはきっとルーグにはばれているだろうが、あからさまな泣き顔を彼に見られたいなかった。

どこまで自分は子供なのだろう。

でも、みられたくないのだから仕方ない。

リセルは振り返って、わざとらしく両腕を組んだ。

「神官の資格を持っているのなら、神学に詳しいのは当然だ。でも、『エレディーン』の名は一体どこで？ わたしは母や魔法の師から神々の系譜を一通り習ったが、そのような神の名は一度

もきいたことがなかった。わたしがその名を知ったのは、『神の山』の神殿を訪れ、夢の中で会ったアルヴィーズが話してくれたからだ」

「彼のことは記録に残っている。エレディーンは神から人になった唯一の存在で、かつ、人間に魔法の言語を教えた者だった」

ルーグはリセルに対抗するかのよう、同じように腕を組んだ。

「『神の山』の神殿。あそこに一枚の壁画が残されている。お前が出立を急がなければ、それを見せてやるつもりだった」

「えっ」

「お前がただの魔法使いでないのはわかっていたからな。そしてその疑問は、ルディオールの呪いから解放されたお前の姿をみて確信へと変わった。その風貌が隣の柱に記されていたからな」

ルーグは腕を組んだまま意味ありげにリセルを眺めた。

リセルは嫌な汗が額に浮かぶのを感じた。ルーグが記録に書かれたエレディーンの風貌と自分を見比べているのが容易に想像できる。

そしてリセルも明け方夢で見た、アルヴィーズの側にいた青年の姿を思い出していた。

「すまなかったな、ルーグ」

「どうした。急に」

リセルは困ったように髪に手をやり、それをぐるぐる指先で弄んだ。

「いや。あんたはわたしに、わたしが何者であるか知る機会を与えてくれようとしたのに、わたしは聞く耳を持たなかった」

「……そうだな」

溜息と共にルーグがつぶやいた。けれどその顔は笑っていた。

「まあ、焦る事はない。いつか、自分の目で壁画を見に行ったらどうだ。神殿を管理しているアルディシスなら場所を知っているだろうから、落ち着いたら案内してもらおうといい」

リセルは唐突にルーグとの距離感を感じた。

髪に絡めていた指を放し、ルーグを見上げた。

「見に行けると……思うか？」

「思うさ」

ルーグは初めて森の中で出会った時のように、穏やかな笑みを浮かべてうなずいた。

「ルディオールを封じ込める事ができたら――ルーグ、わたしは……」

リセルは突如強く吹いた冷たい風に髪をあおられ、それを右手で押さえた。

思わず息を詰める。

気配を感じた。

何者かが『聖なる森』の結界を力づくで破壊し、侵入しようとしている。

丁度リセルが焼いてしまった、炭化した木々の向こう側から――

異変を察知したルーグが腰に帯びた銀の剣に手をかけた。

## 【9】ルディオール

森を渡る風が、さらに冷気を増していく。触れただけで気力が萎えてしまうような、澀んだ気を伴っている。

やがてそれらは、森の木々の影から姿を現わした。

風に漆黒のマントをはためかせ、見覚えのある白い儀礼用の式服を纏った者達だ。その数、ざっと二十名ほど。

「神殿騎士……何故ここに」

リセルは森を踏み越え、こちらへ歩いてくる騎士達の姿を凝視した。

けれど彼等の様子は違和感を感じるほど不自然でおかしい。

歩き方はどこかぎこちなく、顔色も青ざめ生気を感じられない。

まるで人形が歩いているみたいだった。

「リセル、気をつけろ。奴らは……」

隣でルーグが銀の剣を抜き放った。白銀の刃が日光に反射して、先頭を歩く騎士の顔を明るく照らす。それを見てリセルははっと我に返った。

長い金髪 of 騎士は額を割る大きな傷跡があった。眼孔は落ち窪み、そこから血の涙が滴り落ちていた。

その隣を歩く瘦身の騎士は、右腕がありえない方向へ捻れていた。肩を脱臼しているのか、腕の長さが左右違う。そして、今にもつまづくのではないかと思うほど、不安定な歩き方をする騎士達の首には光るものがぶら下がっていた。

それはルーグも身につけている、あの銀の剣を象った小さな首飾りだ。

「まさか……この騎士達……」

リセルは奥歯を噛みしめ、ぐっと両手を握りしめた。あまりのおぞましさに吐き気が込み上げ、同時に怒りで体が震えるのがわかる。

彼等は六日前、大神殿の崩落に巻き込まれて死んだ『神殿騎士』達であることに間違いない。

彼等はリセルが焼いた森を通り抜け、真直ぐにこちらへ歩いてくる。森が焼けたせいで聖なる森の結界は、ひびが入った硝子のように脆くなってしまったのだろう。

死した『神殿騎士』達は、ねじまがった手に折れた剣を握りしめ、ルーグとリセルの方へ歩いてくる。

ひやりとした風に乗って、濃厚な血の臭いが漂ってきた。

「わざわざ迎えに来てくれたようだぞ。リセル」

「……それは、不要だ」

リセルは右手を上げて炎の王ギムレーの力が宿る業火を喚び出していた。

死してなおまだ安息を与えられない騎士達の魂を憐れむからこそ――

『全てを灰に。肉体の檻から今魂を解き放つ……！』

リセルはギムレーに願った。

彼等の身体を跡形もなく燃やし尽くすようにと。

浄化の炎で焼き尽くさなければ、彼等は永遠に安息を得られない。

リセルは躊躇いなく右手に宿った炎の力を騎士達に向けて放った。一瞬の内にそれらは騎士達を包み込んで炎上する。金と緋の入り交じった光の中で、炎に包まれたまま騎士達は歩き続けていたが、やがてそれも激しい熱に身体が灰となり、崩れ落ちていった。

「……」

生き物の焼かれる臭いと煙にリセルは口元を覆った。

ギムレーの炎に死者を愚弄するルディオールへの怒りがこめられたのは否定しない。

ルディオールの力で偽りの生を与えられた、神殿騎士たちの骸は灰燼と化した。今は靄のように立ちのぼる煙だけが、彼等の存在を唯一示しているばかりだ。

けれどリセルとルーグはその靄の向こうに、大きな力を持った何かがつたずんでいることに気がついた。

「何者だ」

ルーグの誰何に答えるように、再び吹いた冷たい風が、騎士達を焼いた煙を吹き流す。

「……折角お前を迎えに来たのに、その騎士達を焼くとは何事です。リセル」

「なっ……」

靄の向こうには白い馬に乗った金髪の女性が佇んでいた。女性は緋と金糸をあしらった豪勢な神官の長衣を身に纏い、肩から真紅の布を羽織っていた。エルウエストディアスのすべての神官を統率する者——『大神官』にしか纏う事を許されない真紅の肩掛けを靡かせて、女性はリセルに向かって妖艶な笑みを浮かべた。その肌の色はおよそ生者とはほど遠く、大理石のように青ざめていた。

「……」

リセルは馬に乗った女性を見つめたまま愕然と立ち尽くしていた。

そして、自分が今見ているものが、幻であることを切に願った。

「リスティス＝アーチビショップ」

その名をつぶやいたルーグの声に、リセルは両手を握りしめて絶叫した。

ルーグの声は僅かなりセルの希望をあっさりと打ち砕いたのだ。

「嘘だ！　こんなの……嘘だ」

リセルを見つめる母リスティスの目は、纏う神官服より鮮やかな紅に光っていた。それはあきらかに彼女もまた騎士達と同じように命を失い、ルディオールに身体を支配されている証だった。

。

リスティスは静かに馬を降りて、こちらへと歩いてきた。肩掛けの上でゆるやかに波打つ金色の髪が、生前の彼女を思い出させるかのように神々しく輝いている。

リセルはその場から動けなかった。

両目を見開いたまま、リスティスが近付いてくるのを見ているだけだ。

「リセル、しっかりしろ」

ルーグがリセルの肩を掴んで正気付けさせようとした。

だがリセルは開いた口から何も言葉が出ず、死してなお自分の手駒として母を差し向けたルデ

ィオールへの怒りよりも、深い悲しみに突き落とされるのを感じていた。 見開かれたリセルの瞳から、一筋の涙が流れ落ちた。

母リスティスはもうここにはいない。

あれは母の姿をしているが、母ではない――。

頭ではわかっている。

もたもたするな。

騎士達と同じように、彼女もまた聖なる炎で焼き清めなければ、いつまでも彼女の魂は肉体から解放されず苦しむことになる。

「リセル。どうしたの。そんなに辛そうな顔をして」

リスティスは両手を広げ、リセルの顔を覗き込むように首を傾けた。

「私と一緒に来なさい。リセル。そしてあの方に仕えるのです。アルヴィーズさえいなければ、私達は普通の暮らしに戻る事ができる。ルディオール様がアルヴィーズを神界から引きずり下ろせば、わざわざ民の為に召喚を行わずとも、あの方がこの地をずっと守って下さるのよ」

リスティスの言葉は毒の入った蜜酒のようだった。

リスティスはまた一步、リセルの方へ近付いた。

「リセル！ 何をしている。早く魔法で彼女を解放してやれ」

ルーグが銀の剣を構えリセルの肩を揺さぶった。

「母さん。わたしは……」

リセルはかろうじて上げた右手をだらりと下ろした。

死んだのならもう眠っていて欲しかった。話しかけないで欲しかった。

目の前に現れないで欲しかった。生きている時と同じ姿と声色で。

リスティスはもう手を伸ばせば触れられるほど間近に近付いていた。

ルディオールと同じ真紅の瞳が、リセルを捕らえるために妖しい光を帯びる。

リスティスの青白い手がリセルの喉元に向かって伸びたその時。

「わたしには……できない！ ルーグ！」

ルーグはリセルの身体を後方へ突き飛ばし、手にしていた銀の剣でリスティスの首を刎ねた。

が、リスティスの首は地面に落ちるところか、赤い筋が一瞬付いたかと思うと、すっと傷が消え失せた。

「何……！」

リスティスは白い指を首に当てながら、赤い唇に笑みを浮かべた。

「生憎だったな。神殿騎士」

ルーグの右手から銀の剣が滑り落ちて足元の地面に突き立った。

ルーグに突き飛ばされたリセルは身を起こし、自分を庇うように立つルーグの背中を見て呆然とした。

翻った漆黒のマントから、血濡れたリスティスの左手が突き出ていた。それはルーグの胸を深々と貫いていたのだった。

けれどルーグはリスティスを睨み付けていた。

その瞳の奥――彼女を操る者へ自分は屈しないといわんばかりに。

リスティスは興味深気に目を細めた。

「……貴様……どこかで」

「ルーグ！」

リスティスはルーグの肩に右手を回し、抱き寄せるような格好で、ルーグの胸から左手を抜いた。

支えを失ったルーグは膝を付き、地面にそのまま倒れ臥した。

「ルーグ！ ルーグ！」

リセルは倒れたルーフの所に駆け寄ろうと立ち上がった。

だがリセルの視界には、いつか見た黒い稲妻が迫っていた。

それはルーフを巻き込むほどの質量で避ける暇などない。

リセルは右手を伸ばし、ルーフの背に覆い被さりながら、アルヴィーズより託された剣が宿る掌でそれを受け止めた。

心臓の鼓動が止まりそうなほどの冷たい衝撃がリセルを襲う。黒い稲妻はそれを防ごうとしたリセルの力と相克していたが、やがて勢いを弱め消失した。

「……くっ……」

リセルは痺れて感覚を失った右手をだらりと落とした。

アルヴィーズは自分の力を剣に変えて、ルディオールを封じるためにリセルに託してくれたはずだが、何故か今はその力を引き出す事ができなかった。

「どうして……」

未だぴくりとも動かないルーフの肩を抱きながら、リセルは右手の痺れが全身に広がっていくのを感じた。

雪山で遭難したかのように体中が凍えて冷えきっている。

指一本動かすのも相当な意志の力を必要とした。

「私の力が、いつまでもアルヴィーズと同等であると思わぬ方がいい。いや、ここにいる分だけ、私の方があの女より遥かに大きな力を地上に及ぼせる」

「……」

いつのまにか近付いてきたリストイスが、リセルの長いセピア色の髪をつかみ上げ、その顔を覗き込んでいた。瞳が真紅であることを除けば、リセルを見つめるのは優しかった母リストイスそのものだ。

いや、違う。

リセルは瞬きを繰り返し、その顔が別の女のものへ変わっていくのを見た。

「……ルディオール……」

闇夜に浮かぶ銀月のように白く輝く髪を揺らし、太陽神の『半身』であった女は、六日前より若々しく、そして圧倒されるような禍々しい気に満ちていた。

「リセル。お前には一つ借りがあったな」

リセルはルディオールを拒絶するかのように目を閉じた。

「……わたしもお前に助けられた。だから借りなどない。しかし、わたしはあの時、禁忌を犯した罰を受け入れ死ぬべきだった」

リセルの髪を掴むルディオールの手に力が込められた。

ルディオールはさらに自分の方へリセルの顔を引き寄せた。

「そう急くな。お前だけは……私を解放したお前だけは、何の苦しみも感じない死を与えてやるのだから。身体が冷えきって冷たいだろう？ 手足の感覚も痺れて何も感じないだろう？」

「……」

リセルは答えなかったが、ルディオールの言う通り、身体は凍え手足の感覚もなくなっている

のはわかっていた。「お前は間もなく死ぬ。だが、その命の鼓動をいつ止めるかは、私次第だ」

リセルはぎりりと歯を噛みしめた。

ルディオールが自分をまだ生かす理由が不意にわかった。

アルヴィーズだ。

ルディオールはアルヴィーズをこの地上に喚ぶつもりなのだ。

そして、リセルに今度はアルヴィーズを封じさせるつもりなのだ。

「私の思考を読んだか」

小さくルディオールが笑い声を立てた。

「そうだな。お前の考えも読めるぞ。お前はアルヴィーズを喚ぶくらいならこのまま死を選ぶ。けれどお前の『監視者』としての役目は果たされない。エレディーンも草葉の陰で泣いていよう。神格を捨ててこの地に降りた愚か者。常命の身になれば死を免れぬというのに、どうやって私の監視を続けることができるというのだ？ エレディーン。あれから幾千幾万の夜がこの地上を訪れた？ お前の魂は欠片すらこの世界に残ってはいまい」

ルディオールはリセルの髪から手を放し空に、向かって高らかに笑い声を上げた。

支えを失ったリセルの頭は未だ倒れているルーグの肩の上に落ちた。

ルーグ。

リセルは感覚を失った指を懸命に動かして、その肩を握りしめた。

まだ彼のぬくもりが感じられるようだった。

『すまない、ルーグ』

リセルはただルーグに詫びた。

『わたしに出会わなければ。この森でわたしに会わなかったら、あんたは死なずに済んだ。許してくれ、ルーグ……』

『馬鹿』

朧げな意識の中で、はっきりと声が聞こえた。

『ルーグ？』

身体は冷えきって微動だにしない。それを動かそうとする意志も萎えている。けれどその声を聞いただけで、リセルは再び自分の中に力が湧くのを感じた。

『私はお前に会わなければならなかった。リセル。この森で……いや、お前に会うために、私は待っていたのかもしれない』

『ルーグ？』

『その名は私のものであって私のものに有らず。我が名はエレディーンと呼ばれていた』

リセルははっと目を見開いた。

氷よりも冷たいルディオールの手が、リセルの髪を再び掴み引っ張り上げたのだ。

「さあリセル。アルヴィーズを喚ぶのだ！」

ルディオールはリセルを睨み付けながら、周りを気にするように、白銀の髪を大きく乱しながら

ら紅の瞳を油断なく見回した。

「あの女に救いを求めろ！ さもなくば、あの傲慢な女が私にした同じ仕打ちをお前にしてやる。あの闇の中へ……魂の嘆きすら届かぬ地の底へこの私が送ってやる。喚べ！ 叫べ！ 私から助けて欲しいとあの女に願え！」

『ルディオールを……救ってくれ』

再びルーグの――いや、エレディーンの声が響いた。

リセルは誰かが自分の右手を握りしめているのを感じた。

始めは暖炉の前の炎のように暖かかったそれが急速に熱を帯び、そこから全く感じられなかったアルヴィーズの力が全身に流れ込んできた。まるで灼熱の太陽が落ちてきたみたいに身体が火照って熱くなる。

それに伴い、ルディオールの冷たい憎しみに満ちた力がリセルの中から消えていった。

雪が解け春を告げる風が吹き、森の木々が青々とした葉を芽吹かせる光景がふと脳裏に浮かんだ。

「ルディオール。もう……やめないか」

リセルは右手を伸ばし、自分の髪の毛を掴むルディオールの青白い手首に指を絡ませた。

「リセル、お前……！」

ルディオールの手首を掴み、リセルはゆっくりと上半身を起こした。その身体は青白く輝くやわらかな微光が縁取っている。

ルディオールはリセルの顔を見て怯えたように真紅の瞳を見開いた。

「貴様は……！ 嫌よ……嫌っ！ 私に触れるな。手を放せ！」

ルディオールは自由な左手を振り上げ、憎悪と孤独の思念に満ちた黒い稲妻の力を収束させた

。

「私の力を見くびるな！ 私はアルヴィーズの『半身』だ！」

「わたしを信じてくれ。今度はお前を傷つけたりはしない」

リセルはもう一方の手を伸ばした。即座に凍り付いてしまいそうな冷気を放つルディオールの稲妻を包み込む。それはリセルが触れた途端霧のように四散した。

「嫌っ！ 私はあそこへ……あの中には戻りたくない！」

ルディオールが身体を仰け反らせ絶叫した。

リセルはその両手を掴みながら、彼女が目にして同じ光景を見ていた。

息詰まるような静寂に満ちた、暗黒の霧が立ち込める空間。

その中で一人、小さな少女が座り込んで泣いていた。

肩に届くぐらいの真直ぐな金髪に白いゆったりとした衣を纏っている。

『私の何がいけないというの？』

『あの小さな箱庭を、愛することが何故いけないの？』

『あなただっただけ泣いていたじゃない』

『あの箱庭を失う事が何よりもこわくて、悲しくて……』

『その気持ちを捨ててしまうなんて。こんな所に閉じ込めるなんて』

『私を、閉じ込めるなんて』

『私は、あなたなのよ』

「アルヴィーズ」

リセルは闇の中で泣き続ける少女に呼びかけた。

少女の肩がぴくりと震えた。金色の髪がさらりと揺れて少女がおずおずと振り返る。

リセルは彼女に近付き、膝を付くと両手を広げてその小さな肩を抱きしめた。

「わたしの所において。あなたの怒りや痛み……悲しみや寂しさ。封じなければならなかったあなたの心。わたしがすべて受け止める」

『そんなこと、できっこないわ』

リセルの腕の中で少女の声は震えていた。

「大丈夫。わたしがここに留まった理由はただ一つ」

リセルはここにはいない、けれど側にいる、もう一つの思いを感じながらつぶやいた。

「あなたを独りにしないためだ」

――エレディーン。

私の心を封じて。

戦いに必要のない、私の『弱き心』を愛しいこの地に。

リセルを取り巻く闇の霧が晴れていく。

色を失っていた『聖なる森』に、明るい陽の光が降り注いでいた。

リセルは両手に淡い金色の光を抱えていた。まるで磨かれた水晶球のように透明な輝きを放つその光は、かつて『ルディオール』と呼ばれた、アルヴィーズが自分にとって不必要だと思った『心』そのものだった。光は小さな明滅を繰り返しながら、ずっと、リセルの胸の中に入って消えた。

「それでいいのか？」

リセルの背後で、聞き覚えのある懐かしい声がした。

リセルは小さく息をついて、森を渡る風に靡く髪を押さえながら振り返った。

そこにはリセルによく似た面差しの青年が立っていた。

恐らく五才ほど年上だろうか。

腰まで伸びたセピア色の髪が太陽の光に当って金茶色に輝いている。

くっきりとした眉の下で、淡い青とも濃い青にもみえる湖水のような瞳がリセルをじっと見つめていた。

けれどよくみれば彼の姿は薄い。

「これがわたしの選んだ方法です。エレディーン」

リセルの前に立つ青年――いまは魂のみで存在しているかつての『監視者』は、リセルの良く知った者と同じ穏やかな微笑を浮かべていたが、申し訳なさそうに眉間を曇らせた。

「あの者の心を救ってくれた事には大変感謝している。けれど、ルディオールを抱えて生きるお前は、常命の者より遥かに永い時を生きなければならない存在となってしまった」

「ええ」

リセルは言葉少なげに返事をした。

かつて神族だったエレディーンがこの地に降りた時のように、神の力を抱えたりセルもまた、普通の人間より永い時を生きる事になる。

それは決して幸いな事とはいえない。

「でも、彼女と約束してしまいましたから。わたしがすべてを受け止めると。いつか、アルヴィーズが自ら封じた己の心を再び受け入れて下さる時まで、わたしがあの方の心を守ります」

リセルは右手を胸に押し当てた。

「一つだけ教えて下さい」

リセルは目を閉じ、小さく頭を振ってから、足元に倒れている黒髪の神殿騎士の遺体の側に膝をついた。

「あなたが、ルーグだったんですか？」

「そうだ……でも、正確にはそうではない」

「えっ」

「ルーグと共に、私が在った」

エレディーンが静かにリセルの側にやってきた。そして騎士の側に跪いた。

瞳を伏せ、そっと労るように物言わぬ騎士の黒髪を撫でた。

「ルーグは真の『神殿騎士』だった。彼がいなければ、私とお前の母……リスティスの願いを叶える事はできなかった」

「願い？」

「彼に触れてやってくれ。その思いを知るためにも」

リセルはルーグの肩に手を置いた。

誰かの――これはルーグが生きていた時の記憶だ。

それが一気にリセルの脳裏に流れ込んできた。

## 【回想】 最後の務め

何かとてつもなく大きな負の力を帯びたものが、神殿の地下から溢れる気配。

同時に神殿全体が小刻みに揺れて、純白の壁に無数の亀裂が走った。

「地震か？」

祭事が行われている大広間の外で、いつも通り扉を守っていた神殿騎士のルーグは咄嗟に近くの柱へ身を寄せた。

それはあっという間の出来事だった。

地の底から不気味に鳴り響く音と揺れが激しさを増したかと思うと、壁の亀裂は天井にまで達し、細やかな色彩で描かれた聖人の絵を引き裂いてばらばらと崩れてきたのである。

しかも信じ難いことに、神殿を支える太い石柱にも亀裂が襲いかかった。

ルーグは身を寄せた柱の後ろに回った。

大きな振動と共に、対面の柱が折れて倒れてきたのはその直後だった。

一体何が起きたというのだ。

ルーグは身を寄せていた柱に背中を預けながら息を吐いた。

これもアルヴィーズ神の加護のせいだ。ルーグは柱と柱の間にできた空間のおかげで、抜け落ちた神殿の天井の破片から身を守る事ができて無傷だった。

頭を振ると粉々に砕けた大理石の破片と粉塵が落ちた。周囲は天井の崩落のせいで埃が舞っているのか薄暗い。

ひょっとして瓦礫の中に閉じ込められたか。

いや、大丈夫そうだ。

ルーグは慎重に柱と柱の隙間から這い出し、大広間へ続く扉があった場所を見つめた。そこにはかつて扉があったと思われる枠だけを残して壁が崩れている。周囲は神殿の屋根と思しき破片などが山のように積み重なっており、半ばほどで折れた柱のみが残っていた。

けれどルーグの視界に入ったのは、全てが崩壊し、人影が絶えた漆黒の闇に浮かぶ一人の少年の姿だった。長いセピア色の髪を靡かせた、緋の神官服を纏う少年。

そして彼から少し離れた場所に、国王や執政官など、祭事の立会人として参加していた者達が倒れていた。

瓦礫の山の中でひとり立つ少年は、凍り付いたように一片の光も射さない上空を見上げていた。

ルーグは少年の視線を追って、思わず息を飲んだ。

真っ黒な空に白銀の髪を靡かせた異形がたたずんでいる。

ルーグは神殿の大広間でリステイス＝アーチビショップの後継者に指名された彼女の息子が、実際にアルヴィーズ神を召喚する祭事が行われていたことを思い出した。

あれが召喚されたアルヴィーズ神だということか？

いや違う。

あんな禍々しいものが輝けるアルヴィーズなものか。

ルーグは全身の毛が逆立つようなおぞましさを感じた。

異形はルーグから遥か離れた上空にいるためその容姿がよく見えないが、憎悪や妬みといった負の感情を特に強く感じた。

その時、異形は華奢な身体の割りに大きな鉤爪状の手を振り上げ、真っ黒な雷をその掌に宿らせると、やおら緋の神官服を纏った少年めがけ放った。

危ない。

けれどルーグと少年の間には瓦礫の山が立ちはだかり、彼を漆黒の雷から救おうにも到底間に合わない。

雷は少年に直撃した……かのように見えた。

ルーグは自分からさほど離れていない柱の影に、リスティスがいることに気付いた。緋の神官服を纏ったリスティスは、他の者と同じように地に倒れ伏していたが、上半身だけを持ち上げて右手を伸ばし、異形が放った黒き雷からセピアの髪の少年を守っていた。

雷はリスティスの力によって弾け周囲に四散した。

飛び散った雷は瓦礫にぶつかり、再び濛々と土埃が舞った。同時に白い光が少年を包み込んで、その姿が消え失せた。

上空に佇む異形がリスティスに気付いて、再び手に黒き雷を灯らせた。

それを見たルーグは叫んだ。

「リスティス様、お逃げ下さい！」

だがリスティスは先程の攻防で力を使い果たしたのか、ちらとルーグの方に視線を向けると小さく首を振った。

上空から押しつぶされるような圧迫感が迫る。

躊躇う間もなくルーグは瓦礫の影から飛び出した。

神殿騎士は身命を賭して神官を護るのが使命。

倒れたリスティスの身体に手を回し、立ち上がった所で、異形が放った黒き雷が二人の頭上に煌めく。

間一髪、ルーグは直撃を逃れた。だが、落ちた雷は神殿の瓦礫を打ち砕き、リスティスを抱えたルーグごと遥か後方へ吹き飛ばした。

「……」

自分の身に何が起きたのか。

ルーグは崩れかけた瓦礫の山に背中を半ば埋め、思い出したかのように目を開いた。

一瞬、気を失っていたらしい。

瓦礫に埋もれながら、ルーグは腕の中でぐったりしているリスティスに視線を走らせた。

彼女は無事だろうか。見た所大きな外傷はなさそうだが、リスティスの顔は紙のように白い。自らの傷の確認よりも、ルーグはリスティスに万が一のことがないかそれが不安だった。

「リ……」

リスティスの名を呼ぼうとして、ルーグは喉を詰まらせた。

込み上げてきた塩辛い血の塊を吐き出し、空気を求めて喘ぐ。けれど全量量が足りない。そし

て胸が激しく痛む。どうやら肋骨が何本か折れて、それらが肺に刺さったようだ。ルーグは血の滲む唇を歪ませた。

自分はこの方をもう護ることができない――。そう、悟った。

アルヴィーズに祈って、せめてリスティスをこの場から連れ出すだけの回復を願おうと思ったが、神の存在は遥か遠く今は全く感じられなかった。

失望感に俯くと、腕の中でリスティスが身じろぎした。

「そなた、ルーグじゃありませんか」

目を覚ましたリスティス自身も顔色はよくない。今にも倒れそうで気力だけで意識を保っている。だが、ルーグのように大きな外傷はなさそうだ。ルーグは身体を動かそうとして、けれど胸の疼痛と息苦しさに咳き込んだ。

「ごめんなさい。わたくしのために」

「……いいえ」

リスティス様をご無事なら――。そう言おうと思ったが、ルーグは口を開く事ができなかった。

ルーグ達の前には新たな瓦礫の山ができていた。上空にいる異形の神の気配は依然大きな圧力感を地上にもたらしているが、瓦礫のせいで丁度死角になっているようだ。

あの黒き雷をもう一度喰らえば終わりだ。

その前に、せめてリスティスだけでもこの場から逃す事はできないだろうか。

そんなことを考えていたルーグは、リスティスが上半身を起こし、ルーグの腰に帯びた剣に手を伸ばすのを見た。

「リスティス、さま？」

「ルーグ。剣を借ります。……わたくしにはもう……時間がないのです」

白い華奢な手がルーグの銀の剣を引き抜いた。

「リ……」

リスティスはやおら抜き身の剣を逆手に持つと、自らの胸に突き立てた。

「リスティスさまっ！　なんてことを」

だが瓦礫に埋もれ身動きできないルーグは、リスティスを見つめる事だけしかできない。

リスティスは剣を両手で握りしめながら祈っていた。

胸から溢れる鮮血は量を増し、緋色の神官服に吸い込まれていく。

ふっと、リスティスの目が開いた。色を失った唇が小さく笑みを浮かべる。

「……申し訳、ございません。貴方の眠りを醒ましてしまって。ですが、わたくしの最後の願いを……この命でもって、どうか、お聞き遂げ下さい……エレディーン」

ルーグはリスティスの肩を抱きながら、目の前に現れたセピア色の長髪を靡かせた青年の姿を見つめた。

それは現か幻か。

ぼんやりとした光に包まれたその青年は、穏やかな湖水のように、淡い青にも深い青にも見える眼をしていた。けれどそこには静かな闘志が宿っている。

「リスティス」

リスティスの呼び出した青年は、彼女に呼び掛けると側に近付き膝をついた。

その時初めてルーグは、彼の姿が硝子のように透けて見える事に気付いた。

「……申し訳ございません。わたくしにはもう……あれを鎮める力がないのです。わたくしの力は、すべて、息子のリセルに託しました」

リスティスは残る全ての力を振り絞ってエレディーンに訴えた。

「あの子はまだ、自分が何者であるかを知りません。できれば、何も知らずにいさせたかったのです。けれど、ついにわたくしから、貴方の血脈に連なることを、教える事ができなかった。ですから、どうか、あの子を導き、守って下さい……お願いします」

エレディーンは黙ったまま、けれど深く頷いた。

「リスティス。貴女の願い、叶えたいと思う。だが一つだけ問題がある。私は『聖なる森』から離れる事ができない。身体をとうに無くした私は、アルヴィーズの力が宿る森を離れたら、現世に留まることができず消えてしまうのだ。いまこうしていられるのは、貴女の命が私を繋ぎ止めているからだ」

リスティスの白い顔に絶望という名の影が降りた。

「そ、んな……」

「リスティス様」

ルーグは胸の痛みと息苦しさを忘れ、急に重さを増したリスティスの身体を支えた。けれどリスティスの瞳はすでに閉ざされ、胸を貫いた剣から力の抜けた華奢な手が滑り落ちた。

「リスティス、様」

ルーグは声にならない声で、力尽きたリスティスに呼びかけた。

神殿騎士は身命を賭して神官を護るのが使命。

ましてや、リスティスはこの国で最高位のアーチビショップ（大神官）であり、国の安寧を神に願う要人であった。

ルーグは自分が側にいながら、彼女を守れなかった事をただ悔いた。

勿論、ルーグ自身も重傷を負っている。

肋骨が何本も折れてそのうちのいくつかが肺に突き刺さっている。

右手は動くが左手は感覚がない。

立ち上がる事はおろか、次の呼吸もできるかどうか。

酸欠と痛みでルーグの視界は急速に暗くなりつつあった。

リスティスは守れなかったが、もしもこの身体が再び動くのなら、自分が彼女の願いを叶えてやるのに。

ふと脳裏に、緋色の神官服を纏った少年の姿が浮かんできた。

リスティス様にあまり似てないな。

彼に対する第一印象はそれだけだった。

けれど同時に、少年が向ける不思議な光彩の瞳には肝が冷えた。こちらの真意を見通すような、彼のまっすぐな目で見つめられると、いかなる偽りも底意も見透かされているようで居心地が

悪かったのを覚えている。

それ故に、神官達がよそよそしい態度で彼に接するのをルーグは何度か見た事がある。  
薄暗くなった闇の中で、ふとルーグは視線を感じた。

あの少年と同じ視線を感じた。

目は閉じているはずなのに、青白い微光に包まれた人影をルーグは見た。

『私に力を貸して欲しい。神殿騎士よ……』

リスティスが自らの命を代償にして呼び出したエレディーンという名の青年は、かろうじてこの場に留まっているようだった。ルーグが己の生命をなんとか引き延ばしているように。

『私に、か？』

エレディーンは徐々に薄くなる姿をなんとか保ちながら頷いた。

『私は、あの地の底に眠るアルヴィーズの『半身』を見守ってきた者。そしてリスティスと彼女の息子は、我が血脈に連なる当代の『監視者』だ。身体を失った私に代わり、地上に出たアルヴィーズの『半身』を再び鎮められる唯一の者。だがリスティス亡き今、その役割は彼女の息子に託された。私は自らの命をもって訴えた、リスティスの想いに応えたい』

『それは……』

それは私だって同じだ。

口を開くのも億劫になってしまった。

ルーグは苦しい息をついた。

『私は、何をすればいい？』

身体が冷えてきた。ルーグに残された時間も僅かだろう。

その時、何か暖かい気配がルーグの肩に触れた。

『私に、あなたの身体を貸して欲しい。その間、あなたの身体の時分は凍結される。けれど私があるあなたの身体から離れたら……時は再び動き出す。死を免れるわけではないが、身体を貸してくれたら、私達はリスティスの願いを叶えることができる』

ルーグははっと目を見開いた。

どこかで見覚えのある淡い光彩の瞳がルーグを見下ろしていた。

『私達……』

エレディーンはルーグに向かって頷いた。

『そう。私があるあなたの身体を借りても、あなたの意識が消えるわけではない。私は普段はあなたの邪魔はしない。必要な時には、私が表に出る事もあるだろうが』

『エレディーン』

『お互い時間がない。返事を聞こう。神殿騎士』

ルーグは血のこびりついた唇を歪め、仄かに笑ってみせた。

『私の名前はルーグ。この身体で役に立つのなら、ぜひ使って頂きたい。私はそれを最後の務めとして誇りに思う』

## 【10】永き時の終わり

「母さん……ルーグ……」

リセルは物言わぬ騎士の肩から手を離しうなだれた。

すべての謎が解けた。

何故、神殿騎士であるルーグが森で単独行動をとっていたのか。

何度追い払おうとしても自分についてきたのか。

『お前は自分が何者であるのか、それを疑問に思った事はないのか？』

そう問いかけてきたのも。

すべてはリスティスの命をかけた願いを叶えるため。そして、リセルにアルヴィーズの『半身』を見守る『監視者』として自覚させるため。

跪いたエレディーンがルーグの身体に手を伸ばした。金色のやわらかな光が指先から溢れ、それはルーグの身体を優しく包み込むと一層強い光を放って消えた。

リセルは俯いたまま声を震わせた。

「わたしは何も知らなかった。二人が、そしてエレディーン、あなたがわたしの事を気にかけて下さった事を。そこまで大きな犠牲を払うことがわかっていたなら、わたしはあの時、ルディオールを……」

「リセル。お前にその運命を担わせたのは私だ。だからそのようなことは言うな」

エレディーンはリセルの肩を自らの胸に引き寄せた。

「本当に申し訳なく思う。でも私は、お前を待っていたのだと思う。私が身体を喪った後もこの地に留まり続けたのは、アルヴィーズが封じた己の『半身』が、時を重ねる事につれて『負』の力を帯び、強大になっていくことに脅威を感じていたからだ。このままその力が膨れ上がれば、それは自らこの地上に出てきただろう。そうすれば、もはや魂だけの私では抑えきれず、かつ、アルヴィーズとの戦いも免れなかった。あの方が創造し愛したこの地も崩壊し、すべてが終わっていた」

エレディーンはリセルの肩を抱いたまま言葉を続けた。

「お前に会えた事、とても感謝している。これでやっと私も……いくことができる」

リセルは弾かれたように顔を上げた。

「エレディーン。あなたまで……あなたまで、わたしを置いていくのですか」

エレディーンは抱擁を解き、静かな湖畔を思わせる瞳を細め呟いた。

「お前はもう自分の足で歩いていける。そして覚悟を決めたはずだ。人とは違う永い時を生きる覚悟を」

「わかっては……います。でも……」

リセルは精一杯別れの悲しみを堪えて答えたが、目から流れる涙を止める事ができなかった。

「リセル」

言葉では厳しい事をいいながら、リセルを見つめるエレディーンの瞳はどこか憂いに満ちていた。

「リセル。永い時を生きるのは、辛い事も多いが良い事もある。例えば、私がこの森でお前と出会えたように。お前にも多くの出会いが待っている事だろう。そのひとつひとつを大切に、胸の中にしまっていくんだ。それがあ限り、お前は決してひとりではない」

「エレディーン」

リセルは自分を包み込んでいた暖かな気配が薄れるのを感じた。

それは緑眩しい森を渡る風となり、澄み渡った青空へ昇っていった。リセルはそれをどこまでも目で追った。

この森で出会って、常に自分を守ってくれた人。

彼の永すぎた時はようやく終わりを迎えようとしている。

自分と出会えた事で。

リセルは今だ濡れる目元をこすり、ゆっくりと立ち上がった。

「.....別れの言葉は言いません。あなたとは、また出会えるような気がするから。勿論、ルーグや母さんにも.....。わたしには、幸いな事にそれを待つだけの時がある」

「エレディーン。いつてしまったか」

リセルは背後に現れた大きな存在に一瞬息を詰めた。頬を撫でる風が地界に現れた創造主に礼を払うように、優しい花の香りを運んできた。聖なる森の木々達も、腰を折り緑の葉を垂れる。

「リセル.....いや、当代の『監視者』よ」

名を呼ばれたリセルは振り返り、その場に片膝をついた。周りを圧倒するほどの存在に満ちた太陽神アルヴィーズには、誰もが思わず頭を垂れ跪いてしまう。

けれどリセルを見下ろすアルヴィーズの麗しい顔は、曇に隠れた太陽のように輝きが失せていた。

「何故、そのような顔をされるのです」

リセルはうつむいたまま口を開いた。神の顔を直接見たわけではない。

けれどいつも自信に満ちあふれるアルヴィーズの気が、激しく乱れているのが感じられた。

「妾の事、さぞ恨めしいはずだ。リセル」

リセルは静かに顔を上げた。神界で一、二を争う美姫としても知られるアルヴィーズの麗しい顔はやはり憂いに沈んでいた。

唇を噛みしめ、リセルは目を細めた。確かに言いたい事がないわけではない。

「ならば、わたしを『監視者』という役目から解放していただけるのでしょうか。アルヴィーズ」

太陽神はリセルから目を逸らし、静かに首を振った。

「.....それは、できぬ」

「では、そのような顔をされると困ります。わたしも.....決心が鈍ってしまいますから」

「リセル」

リセルは自らの身体に封じ込めたアルヴィーズの『半身』がざわつくのを感じた。

胸がしめつけられるように痛い。言いたい事があるのは彼女もそうだろう。

「お待ちしています」

リセルは右手を胸に当て、その痛みをなだめながらアルヴィーズを見上げた。

一瞬、神の麗しい顔が、暗闇の中で一人泣いていた少女のそれと重なった。

「いつか、迎えに来て下さい。わたしの中にいるかぎり、彼女が『ルディオール』になることはありません。彼女は……エレディーンが愛した『あなた』なのですから」

「……リセル」

リセルはエレディーンと同じ、淡い青にも深い青にも見える瞳を細めうなずいた。

アルヴィーズはようやく沈んだ顔をほころばせて、リセルにうっすらと微笑してみせた。

「ありがとう、リセル。妾もそなたに会えてよかった」

「アルヴィーズ」

アルヴィーズは自ら身を屈め、そっとリセルの右手をとった。剣を握り自ら先頭に立って戦う神の手は、意外にも繊細で小さく、完璧な形だった。

真昼の空のように真っ青なアルヴィーズの瞳が、リセルの顔を覗き込んだ。

「困った時はいつでも妾を喚ぶが良い。召喚陣とかいう不便なものはいらぬ。そなたが願えば妾はすぐに参る。それから……」

アルヴィーズはリセルの手を取ったまま、暫し瞳を閉じて沈黙した。

リセルは何か大きなものが地響きを立てて閉じる音を聞いた。例えば、地面に割れた亀裂が塞がるような。

「……王都に開いた『闇の世界』への穴は閉じておいた。人々もそこに何があったのかは覚えておらぬ。だが、妾とて壊れたものを元に戻す事はできぬ。神殿は突如起きた地震によって崩壊したと皆にそう思わせた。妾ができるのはここまでだ」

リセルは深い感謝の念を込めて頭を垂れた。

「ありがとうございます。アルヴィーズ」

「では妾も戻る。リセル、また会おうぞ」

アルヴィーズは再び立ち上がり、小さく頷いてみせた。その頭上には丸い日輪が燦々とした光を降り注いでいる。その眩い光と同化するように、アルヴィーズの姿は消えていった。雲一つない蒼天と聖なる森の緑が、リセルにはただ眩しく見えた。

## 【11】永き時の始まり

「まったくもう一限界だわ。黙ってきいてたけど、あの女の高慢ちきな態度、全然変わってなくてもう許せない〜！」

青い青い空を眺めていたリセルは、突如響いた声に我に返った。

「だ、誰だ？」

辺りを慌てて見回すが、そこには人の姿も気配もない。

もとより誰もいないはずである。

「あら、あんた私を探してるの？ ここよ、ここ」

「ここって言われても……」

リセルは戸惑いがちに周囲を見回した。けれど辺りはさわさわと森を茂らせる木の葉や草が揺れているだけである。

「どこみてんのよ。あんた、私を抱えている事を忘れちゃったの？」

「！」

リセルはどきりとした胸に右手を当てた。

脳裏に長くつややかな金髪を伸ばした少女の姿が浮かんできた。

年の頃は、今やすっかり忘れていたが、丁度リセルが少女に姿を変えられた時と同じ十三才ぐらい。意志の強そうなきりっとした青い瞳に、形の良い桃色の唇が小憎たらしげな笑みを浮かべていた。

「ルディオール……いや、アルヴィーズ？」

リセルは己の身体に封じ込めた太陽神の『半身』を、どう呼ぼうか一瞬迷った。

「どっちで呼ぼうがあんたの好きにするがいいわ。でも、私はあの女の所に戻る気は、幾億の朝と夜が過ぎて、あんたがついに死ぬ時が来ても来ないから。あんたも私を抱えた以上、その覚悟はできてるんでしょね？ リーちゃん」

「……えっ？」

リセルは思わず叫んだ。急に目眩がしてその場に倒れそうになる。

「なっ、何だその呼び方は！ わたしは……！」

「リセルだから『リーちゃん』。いいでしょ、可愛くて？」

少女は純真で無垢な笑みを浮かべ小首を傾げた。

リセルは髪を振り乱して地団駄を踏んだ。

「可愛いって……別にわたしは、可愛く呼ばれなくていい！」

「いーじゃない、リーちゃん。呼びやすくて気に入っちゃった」

少女は両手を合わせ、思案顔になった。

「あんたがリーちゃんなら、そうだ！ 私は『ルー』にしようかしら。もしくは『ルディオール』。アルヴィって呼ばれるのはあの女を思い出してすっごく抵抗があるし、『ルディオール』なんてちっとも可愛くないんだもの。ねえ、リーちゃん、どっちがいい？」

「……どっちでも。好きにしる」

リセルは頭の中で響く少女の声を閉め出そうと意識を集中した。

彼女のおしゃべりを聞いていたら気が狂うかもしれない。

もしくは、これからの長い時を彼女とすごすことに悲観して、自殺願望を抱くかもしれない。

「ちょ、ちょっとリーちゃん！ あんた、私を無視する気？」

「無視はしないが、一人になりたいだけだ」

「じゃあ、私の名前を決めてからにして頂戴。『ルー』はアルヴィーズの『半身』とか、適当に呼ばれるのは嫌！」

「……」

リセルは大きく溜息をついた。

名前を決めろと言われてたって、もう自分で言ってるじゃないか。

リセルは苦笑いを浮かべながらつぶやいた。

「後で相手をするから、今は眠ってくれ。『ルー』」

「あ、やっぱり『ルー』にするのね！ ……わかったわよ、リーちゃん」

少女は機嫌悪そうに、けれど笑みを浮かべて返事をした。

「ねえ、リーちゃん」

リセルは小さく舌打ちした。

名前を決めたら一人にさせてくれるんじゃないのか。

「これからどうするの？」

リセルの顔はますますしかめっ面になった。

「……それを決めるために、一人になりたいんだ」

「あ、王都に行く時は気をつけた方がいいわよ。私、国王の意識を操って、リーちゃんの手配書をばらまいちゃったから。きゃ、私って優しい〜」

「……なん……だって……？」

少女――いや、ルーは、ちょっとすねたように口を尖らせた。

「だって、リーちゃんったらこんな『安全地帯』に逃げ込んで、ちっとも私の所に帰ってこないんですもの！ でも、大神殿を崩したのも、その床に闇の世界へ通じる穴を開けたのも、みーんなリーちゃんのやったことでしょ？」

リセルは頭を抱えた。

それだけは違う。絶対に違う。

床の穴は自分のせいかもしれないが、大神殿だけは絶対に違う……（とりたい）。

「でも、ルー。さっきアルヴィーズが、大神殿の崩壊は地震のせいだと人々に思わせてくれるようにしてくれたんだ」

「それがなんだっていうの？」

リセルはぎょっとしてルーに問いかけた。

「だから……わたしが王都に行っても、その件で捕えられることは……」

「さあねえ〜。あの女が『手配書』まで燃やしてくれたかどうか、私にはわからないわ。王都に行って捕まったって、私のせいじゃないわよ？」

「……うう」

リセルは目を閉じて呻いた。

これからの永い人生、一生お尋ね者として生きていかねばならないのか。

「仕方ないじゃない。これも自業自得よ」

「ううう」

それを言われたらぐうの音も出ない。

リセルは深く深く溜息をついた。エレディーンじゃないが、自分もこの森に縛り付けられる定めなのだろうか。

物思いに沈むリセルとは対照的に、ルーのおしゃべりはとめどなく続く。今までずっと一人きりでいた反動なのかもしれない。

「王都でもどこでも行くのはあんたの勝手だから好きにきなさいよ。でもリーちゃんって、どこか行きたい所があったんじゃないか？ 感じるわよ。心の奥底に深く沈んだ思いがある……これは……誰？ 黒い髪の……きゃっ！」

ルーは床に這わせた手のひらに、青白い光がほとぼしったのを見て叫び声を上げた。

「何するの！ リーちゃん。危ないじゃない！」

「……それ以上、わたしの心に触れるな。お前を傷つける気はないが、わたしがわたしでいられなくなる」

リセルは胸を押さえ、その場に膝を付いた。

ルーに触れられた時、耐え難い痛みが走った。今はまだ癒えない傷がそこにある。

忘れたくない人の記憶がそこにある。

「リーちゃん……？」

ルーが小声で囁いた。具合を案じるかのように。

「ごめんね。痛かったの？」

「……なんでもない」

「わざとじゃないの。ただ、リーちゃんが、そうしたかったような気がただけなの。誰かと約束してたみたい」

リセルは顔を上げた。

ふと、振り返る。

そこには頂きにうっすらと雪を冠る『神の山』がそびえ立っていた。

『ルディオールを封じ込める事ができたらールーグ、わたしは……』

『まあ、焦る事はない。いつか、自分の目で壁画を見に行ったらどうだ。神殿を管理しているアルディシスなら場所を知っているだろうから、落ち着いたら案内してもらおうといい』

リセルは山を見上げたまま立ち上がった。

天に向かって伸びる金色の柱のように、傾き出した夕日が裾野を照らしている。

一瞬、頷くアルヴィーズの横顔が見えたような気がした。

「ルー、行く所が決まったよ」

「えっ、何処にするの？」

心なしかわくわくしているような口調。

無理もない。彼女はリセルが想像するよりずっと長い間、あの暗い空間に封じられていたのだから。

「取りあえず、『神の山』のアルヴィーズの神殿だ」

はっとルーが真っ青な両目を見開いて絶句した。

「どうしてあの女の本拠地に、私が行かなくちゃならないのよー！」

リセルはにやりと笑みを浮かべた。

「大丈夫。今はわたしの中にいるんだから。もっとも、出たくてもお前はわたしの中から出る事はできない。わたし自身が封印そのものだからな。アルヴィーズだってお前を無理矢理ここから出す事はできないよ。現にさっきアルヴィーズが来た時、そうしなかったらどう？」

「なっ、なによ！ 人の弱味につけこむなんて、リーちゃん、最低！」

「ルー、お前は人ではなくて『神』だろう？」

「『神』ってなによ。私はあんたの中にいる限り、何もできないの。ふーんだ。もうリーちゃんなんて知らない！」

行く先が気に入らないせいか、ようやくルーは大人しくなった。

「やれやれ。これから大変だな」

ルーがふて寝をはじめたので、やっと一人きりになれることをリセルは喜んだ。

「さて、『神の山』まで魔法を使うか、それとも自分の足で歩こうか。どっちがいいと思う、ルー？」

「……」

「返事なし、か。そうだな……」

リセルは空を見上げた。太陽はちょうど頭上に差しかがろうかというくらいだから、そろそろ正午を過ぎた頃だろうか。



黒髪の神殿騎士は腕を組み、飄々とした顔を珍しく不機嫌そうに歪めていた。

『まだ正午を少しすぎた頃だ』

『だから？』

リセルに追いついたルーグはちらりとその顔を眺め、何かを憂えるように溜息を吐くと立ち止まった。

『あの巫女さんと一緒に、昼ご飯を食べてから出立したって構わないだろう？ 今までいろいろ世話になったんだし、そんなに急がなくても『彼奴』は現世から消えたりしない』



リセルは振り返り、懐かし気に「神の山」の麓を――正確には昨日ルーグと共に下ってきた山道を見つめた。自然と足がそちらに向かって歩く。

絨毯のように生える緑の下草を踏みしめながら、今度はひとり、神殿に向かうために黙って山道を登る。

一時間ぐらい登ったある場所で、リセルはふと足を止めた。

考え事に耽っていたせいで、危うく崖から転落しかけたのをルーグに助けてもらった所だ。ここは相変わらず緑の木々の葉が生い茂り、その下が絶壁になっていることを微塵も感じさせない。そして道の傍らに生い茂る長細い葉の薬草をみて、リセルは苦笑いを浮かべた。

サキキュロック。

ルーグが『すがすがしい臭い』とあって、傷口に塗布するのを嫌がった薬草だ。

見る景色すべてにルーグの存在を思い出してしまう。彼と過ごした日は一週間にも満たなかったというのに。思い出に浸りながら、リセルはついに「神の山」の神殿に入る北側の通用口の前にとどり着いた。ここにもリセルが初めて神殿を訪れた時のように、複雑な幾何学模様が刻み込まれた二本の水晶柱が門のようにそびえ立っている。

ルディオールの呪いをかけられていたときは、この水晶柱のそばまで行く事がとても辛かった。今はつぶやきひとつ聞こえて来ない。リセルはそれに安堵しながら、通用口の弧を描いた鉄の扉まで近付いた。

扉の隣には小さなくぼみがあり、一本の赤い紐が垂れ下がっている。呼び鈴の紐だ。

リセルはそれを握りしめて、ふと思った。

アルディシスに訊ねられるだろうか。ルディオールを無事に封じ込めた事を。そしてルーグはもうこの世に存在しない事を。

リセルは呼び鈴の紐を引っ張った。隠しても仕方ない。訊ねられたら答えるまでだ。

紐を引いて暫くしてから、通用口の扉が開いた。懐かしいアルディシスの顔がそこにあった。

「神の山の神殿に何の御用ですか。旅の方」

「ええっ？」

リセルは信じられない面持ちでアルディシスの顔を凝視した。

「ア、アルディシスさん。私です。二日前、ここを出立した……」

金髪の巫女は白い法衣の袖をさばいて腕を組んだ。

「申し訳ありませんが、あなた、勘違いなさってない？ 私の名前を何故知っているのかはわかりませんが、この二日、こちらに客人は来てませんし、私もあなたを存じ上げません」

「……」

リセルは絶句しながら、これはどういうことか考えた。

『あの女の仕業よ』

リセルは脳裏に響いたルーの声に思わず右手を胸に当てた。

『言ってたでしょ？ あの女は私の存在を無視して、人々の記憶から私のことを消し去ったって。闇の世界に通じる穴もしっかりふさいだけど、壊れた王都の大神殿は直す事ができないから、地震で崩壊したことにしておくって』

「……」

「それで、こちらには何か御用ですか？」

リセルは我に返った。

初対面の時のように、どことなく冷たいアルディシスの態度に懐かしさを覚えながら。

「これは失礼いたしました。私の名はリセル・ルースフィア。「神の山」の神殿の壁画に興味があって訪ねたのです」

「……まあ……」

アルディシスは明るい水色の瞳を見開いて、両手を胸の前で組んだ。そして感動に震えているのか、目をキラキラさせながらリセルを見つめた。

「嘘みたい。夢の通りだわ」

「夢？」

アルディシスはリセルの手を掴んだ。

「とにかくお入りになって。日も暮れてきましたし。大したもてなしはできないけど、お茶でも煎れますわ」

「あ、アルディシスさん……」

リセルはアルディシスに手を掴まれたまま、自分の用件を伝えようとした。

「あの……」

前を歩くアルディシスが、肩で切りそろえた金色の髪を揺らしながら振り返った。

「『神々の系譜の間』に多分、あなたの探しているものがあると思うのだけれど」

リセルはぎくりとして足を止めた。

「ど、どうしてそれを」

アルディシスはじっとリセルの顔を覗き込んだ。

「アルヴィーズ様が昨晚私の夢に現れたの。リセルと名乗る人がいつか神殿を訪れたら、『神々の系譜の間』に案内するようになって。あなたは一枚の壁画を探しているはずだからって。本当に本当なの？」

リセルは神の采配に舌を巻きながらうなずいた。アルヴィーズは地上の出来事をひよっとしたら逐一見ているのかもしれない。

「ああ、そうなんだ。どうしても見たい壁画があって……」

アルディシスは困ったように眉間を寄せて、口元にほっそりとした手を当てた。

「神々の系譜の間には案内いたしますわ。でもね、リセルさん」

リセルは急に口籠ったアルディシスの様子に訝しんだ。

「どうしたんですか？ 何か、都合が悪い事でも？」

アルディシスは慌てて首を横に振った。

「ごめんなさい。実は私もこの神殿の管理を任されたのが半年前で、神殿内部のことを全部知っているわけではないの。だから……」

アルディシスはリセルの腕を取り、自分の隣に引っ張った。

「ここから通路が二股になっているのがわかります？」

「はい」

リセルは岩を削って作られた通路を覗き込んだ。どちらも人一人が通れるぐらいの狭い幅しかなく、明かりは側面につけられた蠟燭のみが、弱々しい光を放っている。

「私が知っているのは、神々の系譜の間というのは、この「神の山」の神殿全体を示していて、そこに描かれている壁画は、歴史の古い順になっているということ」

「つまり？」

リセルはぞっとしながらアルディシスに訊ねた。

アルディシスは瞳を細め、同意を求めるかのように微笑した。

「左の道は地下へと通じてます。地下は三階まで。右の道はこの神殿の最上階まで続いています。約十階まであるそうです」

「……ということは何？」

アルディシスは両手に腰を当ててむっとした。

「あなた、わざとそう言ってるの？ 要は地下三階から地上十階まで壁画は描かれていて、その順番は歴史の古い順に並べられているって言ったの」

リセルは肩に流れたセピア色の髪を払った。

「どの年代がどの階にあるかは？」

「ごめんなさい。自分で行って確認して下さい。実はそれ、先代の巫女も調査していたんだけど、あまりにも膨大な数に挫折してしまって、ついに身体を壊して亡くなってしまいましたの」

アルディシスは美しい顔を青ざめさせ、ひしと我が身を抱きしめた。

「私も神々の系譜や歴史には興味があって、ぜひ先代が成し遂げられなかったこの仕事をしたいと思って……それでここの管理を申し出たんですけど……はや挫折しそうですわ」

「ちなみに、調査はどこまで進んでます？」

リセルはあてにしているわけではないが、一縷の望みを抱いてアルディシスに聞いた。リセルが見たい壁画はたった一枚だけ。人々に殆ど知られていない、かつて神から人となった唯一の存

在である『エレディーン』の壁画。

残念ながらリセルはエレディーンがいつの時代から存在したのか全く知らない。

手がかりがあるとすれば、それはアルヴィーズが神界の戦を鎮めるために、己の弱い心を地上に封じた頃だろう。その年代を探れば、リセルが探す壁画がどこにあるのか、場所を絞れるかもしれない。

「ごめんなさい。今、やっと地下三階が終わった所なの。壁画の数は大小合わせて千五百枚。ちなみにこれ、先代が十年かけて調査したわ。目録は書物室の棚に収めてますけど、それを一通り目を通すだけでも多分三日ぐらいかかるんじゃないかしら」

「……」

「ねっ、大変でしょ？」

半ばヤケといった表情でアルディシスが引きつった笑みを浮かべた。

リセルも俯いたまま、両手で拳を作りながら唇を震わせた。

「ルーグの……嘘つき」

アルディシスに聞いたらすぐ見られると、彼は気軽なことを言っていた。

こんなに大変だとは思わなかった。

リセルはもっと詳しい場所を何故ルーグに聞いておかなかったのか今更悔いた。

「ちなみに何の壁画をお探しですか？ 有名どころなら『アルヴィーズの創造』とか、一度海底にエルウエストディアスの国土を沈めた『ノルンの魔風』とか、海神ストラシアの悲恋で知られる『水晶の塔』の詩の一場面を描いたものとかなら、私もすぐにご案内ができるんですけど」

リセルは首を振った。

エレディーン存在は恐らく神殿の教典にも載っていない。ひょっとしたらほとんど口伝という形で、知る人ぞ知る神だったのかもしれない。

リセルは三ヵ月前に『大神殿』に呼ばれた時から、それなりに神学の勉強を始めていた。リストイスの後を継ぐ以上知識は必要だし、魔法使いというせいで偏見の目でみる神官達に馬鹿にされたくなかったのである。

「ありがとうございます。アルディシスさん。壁画が見つかるまでしばらくやっかいになりたいんですが、いいですか？」

アルディシスの美しい顔が困惑に歪むのをリセルは見た。

「め、迷惑はかけませんし、それなりに仕事があれば手伝わせてもらいますし。壁画の調査とか調査とか……」

「あらリセルさん、私、あなたがここにいることを迷惑だなんて思いませんわ。むしろそうして下さったらすごく助かりますもの。ただね……」

「ただ……？」

「何年いるつもりかしらと思って」

アルディシスは真顔でそう言った。

「は……はは。そうですね。希望としては一週間ぐらいで見つけないなあって……」

アルディシスの懸念を知ってリセルは再び引きつった笑みを浮かべた。

そう。エレディーンの壁画を『いつ』見つけれられるか。これによってここへの滞在期間は変わってくる。

「ちなみに私は、来年の春に王都に戻りますの。あと半年。その時までまだリセルさんがいらっしゃったら、ちゃんと次の方に引き継ぎいたしますわね。じゃ、私、夕課のおつとめをしなければならないので、一旦失礼いたしますわ。夕食のご用意ができたら鐘を六つ鳴らしますので、この二股の通路まで来て頂けます？ それからお部屋にご案内いたしますわ」

「急にお邪魔したのに、ありがとうございます」

「構いませんわ。あなたの来訪はアルヴィーズ様の思し召しでしたし。すぐ壁画が見つかると思いますわね」

リセルは自分の仕事をしに戻るアルディシスの小柄な背中を見送った。

「ふっ……こうなればここに骨を埋めるつもりで、壁画を探そうじゃないか。私には人が羨む程の永い永い時がある！」

これもアルヴィーズの采配ならば、意地でも壁画を探してやる。

妙な気合いを込めリセルは二股になった通路を睨み付けた。

どっちから攻めようか。地下三階と地上十階。アルディシスは年代の古い順に壁画が並んでいると言っていた。つまり、地下の方が古いわけだ。ここは順当に歴史を追うべきだろう。リセルは左の下る通路に向かって歩き出した。



『リーちゃん。私、いい加減飽きちゃった』

「うるさい」

『うるさいってなによ。毎日毎日薄暗い部屋で壁画とにらめっこ。エレディーンなら本物を見たからいいじゃない？　なんで今更あの人の壁画を探すの？』

リセルは仄かな明かりを照らす角灯を、岩肌いっぱい描かれた壁画に沿わせながらその内容を読み解いていた。

神殿に来たその日に、リセルはまず地下二階にある書物室に籠り、先代の巫女が調べた地下三階にある壁画の目録に目を通した。どうやらこの階の絵は遙か昔、まだ人間という存在がなくて、神々が生まれた頃の歴史がだらだらと綴られているのがわかった。

アルディシスの言う通り、この目録に目を通すだけで三日かかった。

でもおかげで地下三階にエレディーンの壁画はないという結論を導き出す事ができた。よってリセルは順番に壁画を追う事ことにした。誰も調べていない地下二階の一面と天井に描かれたそれらを調べ始めたが、気付けばはや一週間が過ぎていた。

「わたしには自分でも持て余すぐらいの膨大な時間があるんだ。壁画の調査は、丁度良い仕事だと思わないか？　ルー」

『知らない』

ルーは再びリセルの中で大人しくなった。何度も飽きた飽きたとつぶやきながら、リセルが応じないのでついに説得を諦めたいらしい。

「ルーグ……いや、エレディーンは、わたしがこういう選択をすると見込んで、壁画の話をしたのだろうか」

壁画から目を離し、リセルはしばし角灯の揺れる炎をじっと見つめた。

「リセルさん！　ちょっと」

その時、背後の出入口からアルディシスの白い顔が覗いた。

「なんですか？」

「お願い、助けて。外に行き倒れがいの」

「は……？」

リセルはアルディシスに急かされながら、一週間前、自分が訪れた神殿の通用口まで行った。開け放たれた扉からは、雪混じりの冷たい風がびゅうびゅうと吹き込んでいる。

この二、三日、神の山の天気は荒れていた。アルディシスいわく、冬が近付いてきていると言う。

その出入口で力尽きたのか、一人の男がうつ伏せになって倒れていた。

「扉を開けたら、ばったり倒れてしまって。私じゃこの人を中まで運べないんです」

リセルはじっと男を凝視していた。

男は襟足まで伸びた黒髪に、黒いマント、そして白い手袋をはめていた。がっしりとした肩にはうっすらと雪が積もっている。

胸の奥がずきりと痛んだ。

嘘だ。

こんなこと、ありえない。

「リセルさんっ。ぼーっとしてないで、この人を中に入れるのを手伝って頂戴！」

アルディシスに肩を叩かれるように触れられて、リセルはようやく我に返った。

「あ、はい。そうだ。台所の隣の部屋、丁度暖炉に火が入っているから、そこに運びましょうか」

「ええ。その方がこの人の身体を温める事ができるからいいと思いますけど……」

「じゃ、わたしが魔法でこの人を運びます。アルディシスさん、すいませんが扉を閉めて下さい」

リセルは倒れた男の側に膝を付き、首筋に手を伸ばして脈を探った。力強い鼓動を感じる。寒さと疲労で力尽きただけだろう。リセルは脈をとったその手を男の肩に置いて暖炉のある居室を強く脳裏に念じた。瞬く間にリセルと行き倒れの男は暖炉の部屋へと移動した。

普段アルディシスと語らったり食事をするその部屋は、赤々とした暖炉の火が燃えていて暖かかった。床には毛足の長い羊毛で織られた絨毯が敷いてある。

リセルはうつ伏せに倒れたままの男を凝視した。

似ている。

背格好から髪型、体型……そして……。

「いけない。はやく、この人を暖炉のそばに」

リセルは跪いてとにかく男を仰向けにさせた。

「あっ！ やっぱりここにいた」

「なっ、何っ？」

リセルは叫び声を上げそうになった。仰向けにした男の眼が開いたかと思うと、彼はむずと起き上がり、リセルの右手首を思いっきりつかんだのである。

「やっぱり、やっぱりそうだ！ よかった……無事で」

「えっ、あ、うわ！ 何するんだ！」

男はリセルを自分の胸に引き寄せて抱きしめた。リセルはその腕の中から逃れようとしたが、男の両腕は太い木の幹のようで叩いてもびくともしない。リセルはしばしもがいていたが、ふと頬に冷たい金属が触れる事に気付いた。（この感覚……）

その時、ぱたぱたと法衣の裾がはためく音がして、アルディシスが部屋に入ってきた。

「えっ、あ……、何やってるんですか？」

アルディシスが来た事に気付いて、リセルは両手を振り回しながら叫んだ。

「助けてくれ。急にこの人が抱きついてきて……」

アルディシスがおずおずとリセルの側に近付いてきた。そして、行き倒れの男の顔を見て驚いたように口を開いた。「あら！ 誰かと思えば神殿騎士のルーグじゃない」

「ええっ！」

リセルはもはやわけがわからなくなった。

アルディシスがルーグと呼んだ男が、ようやくリセルの抱擁を解いた。

間近に見えるその顔は、きりっとした眉に青灰色の瞳。どこか飄々とした雰囲気、リセルと目が合うと人懐っこい笑みを返してきた。

まぎれもなく、あのルーグと同じ顔。彼の胸には王都の『大神殿』に属する銀の剣の首飾りが揺れていた。

「……ルーグ。そんな、馬鹿な」

リセルは腰が抜けたとまではいかないが、床に座り込んだままルーグの顔を見つめた。

「あら。あなたも彼を知っているの？」

アルディシスが暖炉に薪を追加しながら言った。

黒髪の神殿騎士はまだリセルの前に座っていた。目を細めて笑っている。

「私のような一神殿騎士の名前を知って下さっていたとは。いや光栄だな。ハイ・プリースト＝リセル」

「ハイ・プリースト……ですって？」

アルディシスがぎょっとしてリセルの隣にやってきた。法衣の裾をさばいて座る。

「『大神殿』のハイ・プリーストは、リスティス様の後継者が決まるまで、空席だったと思ったんだけど」

黒髪の騎士＝ルーグはアルディシスに向かって肩をすくめた。

「その後継者が彼だ。ここは辺境の神殿だから、三ヵ月前の情報もまだ伝わってないようだな」

アルディシスは珍しく頬を怒りのせいで赤く火照らせながら口をとがらせた。

「ええ、ここは山奥の、しかも普段は入山が禁じられている「神の山」の神殿ですからね。あなたもちっとも来てくれないし。悪かったわね。知らなくて」

リセルはいろんな意味で頭が混乱していた。死んだはずのルーグがこうして目の前にいることと、アルディシスがルーグを知っている事。けれどアルディシスはリセルのことを知らなかった事。

(一体……何がどうなっている?)

リセルはただ二人の顔を交互に見つめることしかできなかった。

「それにしてもルーグ。あなた、こんな時分に何故ここに来たの？ まさか、行き倒れてお花畑の夢とか見るためじゃないわよね？」

「当たり前だ。倒れたのは単なる体調不良のせいだ」

ルーグはふんと鼻で笑って、そして改めてリセルの前に膝をついた。

「ハイ・プリースト＝リセル。ご無事で何よりです。デュミナス国王陛下より、あなたの探索を命じられた神殿騎士のルヴォーグ・フォグナーと申します」

リセルは国王と聞いてぎょっとした。

『ふふふ……リーちゃん。どうやら手配書は生きてたみたいね』

(そ、そんなことわかるもんか)

ルーはやっとな面白事が見つかったかのように瞳をきらきらさせている。

「わたしの探索って……」

ルーグは膝をついたままリセルを見上げた。

「驚かないで聞いて下さい」

(いや、あんたの出現で、もう十分驚きまくっているんだが)

リセルはもはや何を聞いても知っても仕方ないと腹をくくった。

「何だい？」

「はい。実は、もう一週間前になりますが、王都の大神殿が地震に見舞われ、全壊してしまったんです。それで……その時に、お母上のリスティス＝アーチビショップも巻き込まれて……犠牲に……」

「……」

リセルは悲し気に俯くルーグを黙って見ていた。ルーグの膝の上に置かれた両手は握りしめられ小刻みに震えている。リセルはそっとその拳の上に自分の手を置いた。

「リセル様」

リセルは首を振った。

気持ち悪い。中身まで同じかわからないが、あのルーグの顔なのだから、そんな呼び方は止めて欲しい。

「わたしのことはただのリセルと呼んでくれ。わたしもルーグと呼ぶから。それから、ありがとう。母の事を教えてくれて。犠牲者は他にも沢山出たのだろう？ あなたも無事で本当に良かった」

ルーグの青灰色の瞳が心なしか潤んでいるような気がする。

神殿騎士は突如右腕を目に当てて何度かごしごしと擦った。

「それは私の台詞だ。丁度リセル様……いや、リセル、あなたが護衛もつけず、「神の山」へ壁画の調査に行くと言われたその翌日に、地震が起きたのだから。そうだ。それで、リスティス様が亡くなられたので、私は王命であなたを迎えに来たのだ」

「迎え？」

「そう。あなたに、正式にアーチビショップ（大神官）になってもらうために」

リセルは飛び上がった。じりじりと壁際まで後ずさる。

「まあ……リセルさんすごい！ しかも、あのリスティス様の息子さんだったなんて」

アルディシスが両手を合わせて感嘆した。

「断る！ その話はもうなかったことにしたいんだ。断じてわたしはアーチビショップにはならない。いや、なれない！」

ルーグが黒いマントを翻しながら立ち上がった。

「どういう心変わりか知らないが、あなたはいずれはリスティス様の後を継ぐ方だ。あなたもそれをわかって、ハイ・プリーストになったんじゃないのか？ 違うか？」

ルーグの口調がリセルの知るそれと大分近くなってきた。

「……それは、そうだが……でも、わたしは……」

「神官達の口さがない噂を気にしているのか？」

リセルはきっとルーグを睨み付けた。

リセルはルーグの事を知らないが、ルーグは神官と神殿を護る『神殿騎士』として、さまざまなことを見聞きしているはずだ。勿論、リセルに関するいい事も悪い事も。

リセルはルーグを睨みながらはっきりと言った。

「わたしは魔法使いだ。神官ではない。仕事も神をその魔力で喚ぶことしかできない。それでい

いのなら、神殿に戻る。そう、国王陛下に伝えてくれ」

ルーグはにやりと微笑した。なぜそこで笑う。リセルはルーグの腹の中が読めず、さらに身を固くした。

「それでいいそうだな」

「……なに？」

ルーグは白い式服の胸元を探り、赤い封蝋のついた一枚の封書を取り出した。

「デュミナス陛下の親書だ」

リセルはルーグを睨み付けながら封書を受け取った。水平線から昇る日輪と獅子を組み合わせた紋章が封蝋に刻み付けられている。一応紋章だけは正真正銘、本物の王家のものだ。封筒の端を破り捨て、リセルは中に入っていた国王の手紙に目を通した。

「……」

「どうだ？」

両腕を組んでルーグが訊ねる。

リセルは深く溜息をついた。

ルーにさんざんおどされていた『手配書』とは全く無縁の内容で、国王は母リスティスへのお悔やみと、リセルの無事を祈っていると綴っていた。そして無事ならば、年に一度のアルヴィーズ神の召喚だけ務めてくれれば、後は好きなようにしてもいいとあった。

リセルは国王の手紙を持ったまま目を閉じた。

アルヴィーズがここまで『なかったこと』にしてくれたことを、素直に喜ぶべきだろうか。そして、一度は放棄したリスティスの後継者としての人生を、考えるべきなのだろうか。

『リーちゃんがしたいようにすればいい。誰も、最初から正しい道を知っているわけじゃないもの。そして、その道が間違っていると思う事もおかしいわ。どんなことをしようと、大事なものはリーちゃんが自分で『選ぶ』こと』

(ルー……)

リセルはそっと胸に手を当てた。

思い返してみれば、一時の怒りがすべてのきっかけだった。自分にもっと分別があれば、今頃誰も傷つくことなく失う事なくすごせたと思う。

ただ、あのままずるずるとリスティスの後継者に奉り上げられていたら、リセルは自分がいつか神殿から逃げ出すだろうとも思っていた。魔法使いである自分を偏見で見る神官達の視線が辛かったのは確かだし、母リスティスの苦勞を知らないで、彼女の陰口を叩く彼等の存在は今も許したくない。

けれど。

リセルは唇を噛みしめ国王の親書を握りしめた。

これが『やりなおし』だとは思いたくない。自分にはそんな恩恵を受ける資格などない。でも、この世界には自分を必要としてくれる人達がいて、他にそれを為すことができる人間がいないのだ。

強制されるからやるんじゃない。今度は自分の意思で決めるのだ。

リセルは俯いていた顔を上げた。肩に流れ落ちたセピア色の髪を払いのけ、光の加減によって淡い青にも深い青にも見える瞳でまっすぐルーグを見つめた。

「……わかった。ルーグ、わたしは神殿に戻る。そして……」

運命の歯車が軋みながら動き出す音が聞こえる。

「母の後を継ぐ。わたしには神を喚ぶ事しかまだできないが、少しでも多くのことを覚えて皆の役に立てるようになりたい。それでいいか？」

ルーグは黙ったまま頭を垂れた。

「それでこそリスティス様の後継者。王都へは僭越ながら、神殿騎士の私が一緒に同行します」

「あ、リセルさん、ルーグ。今すぐ発つなんて、無理は言わないでよ？」

アルディシスが慌てて二人の間に駆け寄った。

「天気は荒れてますし、もう日は暮れたし、それに……」

アルディシスはリセルの顔を見てつぶやいた。

「壁画はどうかさるんです？ まだ見つかってないのでしょうか？」

リセルは小さくうなずいた。

「壁画？ あ、ああ……そうだったな。リセル、あなたが「神の山」の神殿に行ったのは壁画を見るためだったな。ちなみに、何の壁画なんだ？」

「えっ」

「そうそう。良く考えたら、私、リセルさんにちっともうかがってませんでしたわ。何の壁画をお探しののか」

リセルは興味津々で自分を見つめるルーグとアルディシスに困惑した。

「別に……無理してみたいわけじゃないんだけど……」

エレディーンの名を出してもきっと二人にはわからない。あのルーグはエレディーンが宿っていたから自分のことをリセルに知って欲しくて、壁画の話をしたに違いないのだ。

どう誤魔化せばいいか。

視線を彷徨わせたりセルは、ふと暖炉の上にある小さな壁画に気をとられた。

まるで額縁に飾られているかのように、植物のつるが絡み合ったような飾り枠が刻まれた小さな壁画。

そこには立派な大樹の幹に背中をあずけて、安心しきったような、うっすらと微笑をたたえて眠っている少女の姿が彫り込まれている。

「あら、ひょっとしてこれですか？」

リセルの視線に気付いたアルディシスが暖炉に近付いた。

「かわいらしいでしょ？ 私もとても好きな壁画ですの。普段、アルヴィーズ神は甲冑を纏った女性の姿で、いつも剣を握った戦いの場面の壁画ばかりあるんだけど、この一枚だけは違うの」

「アルヴィーズ……なんだ。この子」

リセルは自分の中に封じ込めたアルヴィーズの『半身』、ルーと壁画の少女の顔が同じである事に気付いた。

「ええ。この部屋に壁画はここしかないんだけど、さしずめアルヴィーズの少女時代ってことか

しら。それで、彼女が寄りかかっている大樹が、宿っている精霊の名前を取って『エレディーン  
の樹』というの」

「えっ」

リセルは突如発せられたエレディーンの名前にどきりとした。

「アルヴィーズはある日、大切なものをこの地に埋めた。その下から樹の芽が出て、やがて旅人を日差しや雨から護る大樹に育ったそうなの。この大樹には精霊が宿っていて、時々旅人と話をしたり、不思議な力で傷や旅の疲れを癒してくれたそうよ。ほら、神聖上代言語で精霊の姿が書かれている……」

「アルディシスさん。多分これだ。ありがとう」

リセルは暖炉の縁に書かれた小さな文字を読み取ろうとしたアルディシスを遮った。

やはりエレディーンは土着の民のみが知る神で、永くこの地を護っていたのだ。

リセルはなんとなく壁画に描かれた樹に見覚えがあった。『聖なる森』で神々の夢を見た時に、樹齢千年は超えようかという巨木があった。ひょっとしたら身体を失ったエレディーンはあの樹に宿り、人々と交流しながら、自分との出会いを待っていたのだろう。きっと。

リセルは自然と微笑が浮かぶのを感じながら、再び壁画に手を触れた。



翌日、朝食を取ってから、リセルとルーグは「神の山」の神殿を出立した。昨日の荒天が嘘のように治まり、澄み渡った空がどこまでも続く美しい朝だった。

「王都でまた会えるのを楽しみにしてますわ。そろそろ冬が来るので、私も一度山を降りるつもりですの」

神殿の通用口の前にそびえる二本の水晶柱の下で、心持ち寂しそうに巫女のアルディシスが言った。

「じゃあ、お越しの際は神殿にも寄って下さい」

リセルはそう言ったが、隣に立つ黒髪の神殿騎士はぶんぶんと首を振った。

「リセル、『大神殿』は全壊して、今その瓦礫を取り除く作業をしている。仮神殿もどこにするのか決まってない」

「え……」

ルーグはにやりと唇の端に笑みを浮かべながら、リセルの肩を軽くこずいた。

「まあ、その諸々の問題を解決するためにも、あなたが早くアーチビショップになってくれないと困るみたいなんだな。二ヵ月後には早速アルヴィーズに国の安寧を祈願する『降臨祭』も控えている事だし」

リセルはげっそりとして思わず嘆息した。

自分で決めたこととはいえ、はやその現実から逃げ出したくなる。

「がんばって下さいね。リセルさん。いや、ハイ・プリースト＝リセル様。立派になったあなたに会いに必ず参りますから」

柔らかな金髪を風に靡かせながら、アルディシスが手を振った。

「ありがとうございます。がんばってみます。いろいろお世話になりました」

リセルはアルディシスに頭を下げて、山を下る道を歩き出した。

「アルディシス。何かあったらすぐに連絡を寄越すんだぞ。か弱い女が一人きりで、こんな山奥に籠ってるんだから」

ルーグの言葉の後に、アルディシスのかん高い声が響き渡った。

「だったら私にも護衛の神殿騎士を寄越して頂戴！」

それもそうだ。リセルは内心そう思った。何か起きてからでは絶対間に合わない。

王都についたら早速誰か、アルディシスの護衛を手配しよう。

「そういえば……リセル」

隣を歩くルーグに話しかけられて、リセルは妙な感覚を覚えた。いや、死んだはずの彼が隣にいる事自体、そもそもおかしいのだが。

まあいい。この問題は『降臨祭』の時、国の安寧を願うついでに、喚び出したアルヴィーズ神へ直に訊ねてみることにする。

「何だい？ ルーグ」

黒髪の神殿騎士は、リセルの分の糧食や水筒が入った革の鞆を肩から下げていた。どうしても自分が荷物を持つと言ってきかなかったのである。

「あなたは魔法使い、なんだよな」

「それが、何か問題でも？」

ルーグの言いたい事がよくわからず、リセルはいぶかしみながら彼の顔を覗いた。視線が合うとルーグは唇を歪めながら、右手を頭に当てて眼を伏せた。

「その、魔法使いなら、『飛べる』という話をきいたんだ。ひょっとしたら、あなたも王都まで一気に『飛ぶ』ことができるのかなと……ふと思って」

「……」

リセルは足を止めた。ルーグも立ち止まる。

「そりゃ、できないことはないさ。何たってわたしは、神を喚ぶことができる魔法使いなんだからな」

「それなら！」

ルーグのきりっとした眉の下で、青灰色の瞳が大きな期待に輝いた。

だがリセルはその瞳を見つめたまま、素早く右足を引いて、ルーグの左足の臍を蹴り飛ばしていた。

「ぐはあ！ 一体何をする！」

黒髪の神殿騎士は前かがみに腰を折り、リセルに蹴飛ばされた臍を両手でさすった。

骨に直に伝わる痛みは自分もよく知っている。

リセルは痛がるルーグの反応に懐かしさを覚えながら両腕を組んだ。

「魔法は楽をするためにあるんじゃない。それに『飛翔』の呪文は人数と距離があればあるほど疲れるんだ。とにかく、王都へは歩いて帰る」

リセルは未だ臍をさするルーグを放置して、木々の緑が眩しい山道を下り始めた。

『リーちゃんって意外とケチなのね。力を出し惜しみするなんて。あんたほどの魔力なら連れが一人増えたって、雑作もなく王都まで飛べるのに』

リセルは一つの三つ編みに編んだ長いセピア色の髪を背中に放り投げながら、ルーの言葉に笑みを浮かべた。

「出し惜しみじゃないよ。わたしはただ……もう少しだけ旅をしたいんだ」

再びこの地で出会ったあの黒髪の神殿騎士と。

今度はちゃんと彼のことを知って、そしてできたらこれから待っている新しい生活において、力になってくれる存在であって欲しい。勿論、自分もそうありたいと思う。

「リセル！ ちょっと待ってくれ！」

リセルは振り返り、仕方なく立ち止まった。ルーグが左足を引きずりながら山道を下ってくるのが見える。

「……ただ、わたしの知っている『ルーグ』は、もっと頑丈だったんだけどな」

小さくそう呟いて、リセルはルーグの方に歩み寄った。

取りあえず、哀れな神殿騎士に自分の肩を貸してやるために。

## 邂逅の森

<http://p.booklog.jp/book/71768>

著者：天竜風雅

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tenryu-dou/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/71768>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/71768>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ